

茨城県土浦市

扇ノ台遺跡

古代編

——宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1999

土浦市遺跡調査会
土浦市教育委員会

茨城県土浦市

扇ノ台遺跡

古代編

——宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1999

土浦市遺跡調査会
土浦市教育委員会

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため市内には貝塚、古墳、集落跡など数多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることはもちろんのこと、現代の私たちが豊かに生活できる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な任務であり、郷土の発展のためにも重要なことと思われます。

この度の調査は、大松企画管理株式会社の宅地造成工事に伴い、周知の遺跡である扇ノ台遺跡発掘調査による記録保存を目的として行なわれたものであります。

遺跡内からは、市内でも有数の縄文時代の集落跡が確認され、おびただしい数の縄文土器などが発見されております。また平安時代の遺構・遺物に特筆すべきものがあります。遺跡の中からは大規模な掘立柱建物跡群が出土し、それを取り巻くように堅穴住居跡群が確認されました。このような遺跡内での建物の配置関係を示す出土例は、当地域を代表するものとして貴重なものと思われます。

この調査によって、中地区の古代文化の究明にいささかなりとも役立てていただければ幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の発刊にあたり、大松企画管理株式会社をはじめ、関係者の皆様方のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼を申し上げます。

平成11年10月

土浦市教育委員会

教育長 尾 見 彰 一

例　　言

1. 本書は、大松企画管理株式会社の宅地造成工事に伴う土浦市扇ノ台遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は土浦市教育委員会が主体となり、教育委員会内に土浦市遺跡調査会を組織し、山武考古学研究所の協力のもとに実施した。
3. 発掘調査は、土浦市教育委員会の指導のもとに山武考古学研究所の平岡和夫、桐谷優、高野浩之、齊藤洋が担当した。
4. 遺跡の所在地・面積及び調査期間は以下の通りである。

扇ノ台遺跡　所在地　茨城県土浦市大字中1141-1番地ほか

面　　積　21,000m²

調査期間　平成8年11月15日～平成9年3月25日

5. 整理調査は、山武考古学研究所において、遺跡より検出された遺構・遺物の内、主に古代（奈良・平安時代）を中心に行なった。
6. 本書の編集は、平岡和夫・桐谷優が行い、執筆の分担は以下の通りである。

第1章・第3章　　関口満（土浦市教育委員会）

第2章・第4章・第5章　平岡和夫　桐谷優　高野浩之　齊藤洋

第6章　　平岡和夫　桐谷優　土生朗治

7. 調査に係わる図面・写真・遺物等の資料は土浦市教育委員会が一括して保管している。

8. 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の諸氏・諸機関にご指導、ご協力を賜った。記して感謝の意を表すものである。（敬称略・順不同）

松原次男　吉原玲子　佐藤慎太郎　木下良　平川南　金井塚良一　久信田喜一　塙谷修　折原繁

伊藤知子　芦田和義　大松企画管理株式会社　三友測量設計株式会社　株式会社協栄工務店

株式会社高田工務店　間成測量株式会社　有限会社新成田総合社　前橋文化財研究所

凡　　例

1. 第1図は国土地理院発行25,000分の1『土浦』を、第2図は明治16年測量20,000分の1『土浦』を、第3図は土浦市都市計画図の10,000分の1をそれぞれ使用した。

2. 位置図・地形図及び遺構実測図中の方位はすべて座標北を示す。

3. 本書の挿図縮尺は下記の通りである。

遺構　全体図　縄文（1/400）　古代（1/400）

竪穴住居跡（1/80）　掘立柱建物跡（1/100）　溝（1/80）　井戸（1/30）

遺物　土器（1/4）　土製品（1/4）　石製品（1/4）　鉄製品（1/2）　古銭（1/1）

4. 遺物番号は、本文・挿図・表・写真共一致している。

5. 本書の挿図に使用した記号、スクリントーンは下記の通りである。

遺構　地山　　カマド袖部　　火床部　

遺物　黒色処理　　●土器　▲石製品　■铁製品

目 次

序

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と調査組織.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査組織.....	2
第2章 遺跡の位置と環境.....	3
第3章 確認調査の概要.....	9
第4章 調査の方法と経過.....	11
第1節 調査の方法.....	11
第2節 調査の経過.....	11
第3節 基本堆積土層.....	13
第5章 検出された遺構と遺物.....	17
第1節 縄文時代の概要.....	17
第2節 奈良・平安時代.....	37
第6章 まとめ.....	111

挿図目次

第1図 爽ノ台遺跡の位置と主な遺跡	4	第37図 19号住居跡・出土遺物	51
第2図 爽ノ台遺跡周辺地形と古代遺跡	5	第38図 20号住居跡	51
第3図 爽ノ台遺跡周辺遺跡位置図	7	第39図 20号住居跡出土遺物	52
第4図 確認調査トレンド設定図	8	第40図 21号住居跡	52
第5図 本調査範囲図	8	第41図 21号住居跡出土遺物	53
第6図 グリッド設定図	11	第42図 22号住居跡・出土遺物	54
第7図 調査区域表土・排土図	12	第43図 23-24号住居跡	55
第8図 基本堆積上層図	13	第44図 23号住居跡出土遺物(1)	55
第9図 爽ノ台遺跡縄文時代遺構全体図	14	第45図 23号住居跡出土遺物(2)	56
第10図 爽ノ台遺跡遺構全図	折図	第46図 24号住居跡出土遺物	56
第11図 縄文時代住居跡時期別分布図	17	第47図 25号住居跡・出土遺物	57
第12図 遺跡内における石器の組成	20	第48図 26号住居跡	58
第13図 打製石斧の形態と出土比率	21	第49図 27号住居跡・出土遺物	58
第14図 府製石斧の形態と出土比率	21	第50図 28号住居跡・出土遺物	59
第15図 縄文時代集落の展開(始期)	折図	第51図 29号住居跡・出土遺物	60
第16図 縄文時代集落の展開(初期)	折図	第52図 30号住居跡	61
第17図 縄文時代集落の展開(盛期)	折図	第53図 30号住居跡出土遺物	62
第18図 縄文時代集落の展開(末期)	折図	第54図 31号住居跡・出土遺物	64
第19図 奈良・平安時代遺構金体図	折図	第55図 32-33-34号住居跡・出土遺物	66
第20図 1号住居跡・出土遺物	37	第56図 35号住居跡・出土遺物	68
第21図 2号住居跡・出土遺物	38	第57図 36-37号住居跡・出土遺物	69
第22図 3号住居跡・出土遺物	38	第58図 37号住居跡出土遺物	70
第23図 4-5号住居跡・出土遺物	39	第59図 38-39-40号住居跡	71
第24図 5号住居跡・出土遺物	40	第60図 41号住居跡	72
第25図 6号住居跡・出土遺物	41	第61図 41号住居跡出土遺物(1)	73
第26図 7号住居跡・出土遺物	42	第62図 41号住居跡出土遺物(2)	74
第27図 8号住居跡・出土遺物	43	第63図 42号住居跡・出土遺物	76
第28図 9号住居跡・出土遺物	44	第64図 44号住居跡・出土遺物	77
第29図 10号住居跡	45	第65図 45-46号住居跡	78
第30図 11号住居跡・出土遺物	45	第66図 47号住居跡・出土遺物	79
第31図 12号住居跡・出土遺物	46	第67図 48号住居跡	79
第32図 13号住居跡・出土遺物	47	第68図 49号住居跡・出土遺物	80
第33図 14号住居跡・出土遺物、15-16号住居跡	48	第69図 50号住居跡	81
第34図 16号住居跡出土遺物	49	第70図 50号住居跡出土遺物	82
第35図 17-43号住居跡・出土遺物	50	第71図 1-2-3号掘立柱建物	83
第36図 18号住居跡	50	第72図 4-5-6号掘立柱建物	84

第73図	7・8・9号掘立柱建物	85	第88図	55号掘立柱建物	100
第74図	10・11・12号掘立柱建物	86	第89図	掘立柱建物出土遺物(1)	101
第75図	13・14号掘立柱建物	87	第90図	掘立柱建物出土遺物(2)	102
第76図	15・16・17・18・19・20号掘立柱建物	88	第91図	1・2号溝出土遺物	106
第77図	21・22・57号掘立柱建物	89	第92図	1・2・3号井・1跡	107
第78図	23・24・25・26号掘立柱建物	90	第93図	住居跡形態時期別図	111
第79図	27・28・29号掘立柱建物	91	第94図	住居跡規模時期別図	112
第80図	30・31号掘立柱建物	92	第95図	住居跡柱穴別変遷	113
第81図	32・33・34・35・37号掘立柱建物	93	第96図	側柱式掘立柱建物の平面形式と棟数	116
第82図	36号掘立柱建物	94	第97図	特異な造物	117
第83図	38・39・40・41・45号掘立柱建物	95	第98図	9世紀前半代の須恵器	118
第84図	42・43・44・46号掘立柱建物	96	第99図	出土遺物の縦年(1)	折図
第85図	47・48号掘立柱建物	97	第100図	出土遺物の縦年(2)	折図
第86図	49・50・51・52号掘立柱建物・2号柵列	98	第101図	古代集落の変遷	126
第87図	53・54・56号掘立柱建物	99			

表 目 次

表1	扇ノ台周辺遺跡一覧表	6	表21	13号住居跡出土遺物観察表	47
表2	縄文時代住居跡一覧表	18	表22	14号住居跡出土遺物観察表	47
表3	炉跡一覧表	19	表23	16号住居跡出土遺物観察表	49
表4	出土土錐一覧表(1)	19	表24	17号住居跡出土遺物観察表	50
表5	出土土錐一覧表(2)	20	表25	43号住居跡出土遺物観察表	50
表6	出土石器一覧表(1)	21	表26	19号住居跡出土遺物観察表	51
表7	出土石器一覧表(2)	22	表27	20号住居跡出土遺物観察表	52
表8	出土石器一覧表(3)	23	表28	21号住居跡出土遺物観察表	53
表9	1号住居跡出土遺物観察表	37	表29	22号住居跡出土遺物観察表	54
表10	2号住居跡出土遺物観察表	38	表30	23号住居跡出土遺物観察表	56
表11	3号住居跡出土遺物観察表	38	表31	24号住居跡出土遺物観察表	57
表12	4号住居跡出土遺物観察表	39	表32	25号住居跡出土遺物観察表	57
表13	5号住居跡出土遺物観察表(1)	40	表33	27号住居跡出土遺物観察表	58
表14	5号住居跡出土遺物観察表(2)	41	表34	28号住居跡出土遺物観察表	59
表15	6号住居跡出土遺物観察表	42	表35	29号住居跡出土遺物観察表(1)	60
表16	7号住居跡出土遺物観察表	42	表36	29号住居跡出土遺物観察表(2)	61
表17	8号住居跡出土遺物観察表	43	表37	30号住居跡出土遺物観察表	63
表18	9号住居跡出土遺物観察表	44	表38	31号住居跡出土遺物観察表(1)	64
表19	11号住居跡出土遺物観察表	46	表39	31号住居跡出土遺物観察表(2)	65
表20	12号住居跡出土遺物観察表	46	表40	32号住居跡出土遺物観察表	67

表41 33号住居跡出土遺物観察表	67	表63 41号掘立柱建物出土遺物観察表	103
表42 35号住居跡出土遺物観察表	68	表64 42号掘立柱建物出土遺物観察表	103
表43 36号住居跡出土遺物観察表	70	表65 43号掘立柱建物出土遺物観察表	104
表44 37号住居跡出土遺物観察表	70	表66 44号掘立柱建物出土遺物観察表	104
表45 41号住居跡出土遺物観察表(1)	74	表67 45号掘立柱建物出土遺物観察表	104
表46 41号住居跡出土遺物観察表(2)	75	表68 46号掘立柱建物出土遺物観察表	104
表47 41号住居跡出土遺物観察表(3)	76	表69 47号掘立柱建物出土遺物観察表	104
表48 42号住居跡出土遺物観察表	77	表70 48号掘立柱建物出土遺物観察表	104
表49 44号住居跡出土遺物観察表	78	表71 49号掘立柱建物出土遺物観察表	105
表50 47号住居跡出土遺物観察表	79	表72 50号掘立柱建物出土遺物観察表	105
表51 49号住居跡出土遺物観察表	80	表73 51号掘立柱建物出土遺物観察表	105
表52 50号住居跡出土遺物観察表	82	表74 53号掘立柱建物出土遺物観察表	105
表53 7号掘立柱建物出土遺物観察表	102	表75 55号掘立柱建物出土遺物観察表	105
表54 9号掘立柱建物出土遺物観察表	102	表76 1号溝出土遺物観察表	107
表55 11号掘立柱建物出土遺物観察表	102	表77 奈良・平安時代住居跡一覧表(1)	108
表56 13号掘立柱建物出土遺物観察表	102	表78 奈良・平安時代住居跡一覧表(2)	109
表57 15号掘立柱建物出土遺物観察表	102	表79 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表(1)	109
表58 32号掘立柱建物出土遺物観察表	103	表80 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表(2)	110
表59 33号掘立柱建物出土遺物観察表	103	表81 住居跡時期別一覧表	111
表60 38号掘立柱建物出土遺物観察表	103	表82 住居跡カマド位置一覧表	112
表61 39号掘立柱建物出土遺物観察表	103	表83 時期別掘立柱建物一覧表(推定)	114
表62 40号掘立柱建物出土遺物観察表	103	表84 側柱式掘立柱建物跡の平面形式と棟数表	116

写真図版

本文図版

測量前・確認調査	10	4. 8号住居跡遺物出土状況（北より）	
1. 伐開前の遺跡遠景（南より）		5. 16号住居跡（北より）	
2. 伐開後の遺跡遠景（西より）		6. 1号炉跡（北より）	
3. A地点第1トレンチ（北→南）		7. 9号炉跡（東より）	
4. A地点第2トレンチ（北→南）		8. 74-77-78-79号土坑（北より）	
5. B地点Aトレンチ（南→北）		縄文時代(2)	34
6. B地点Eトレンチ（西→東）		1. 127-140-141-142号土坑（南東より）	
基本堆積土層	13	2. 134-138号土坑（東より）	
縄文時代(1)	33	3. 205-206号土坑（北より）	
1. 1号住居跡（西より）		4. 209-210号土坑（北より）	
2. 2号住居跡（西より）		5. 268-269-270-273号土坑（西より）	
3. 同 遺物出土状況（西より）		6. 286-290-291-294-326号土坑（東より）	

7. 320・321・323～327号土坑（西より）

8. 539号土坑（南より）

図版

- | | | |
|-----|--|---|
| 図版1 | 1. 遺跡全景 | 2. 同 カマド |
| 図版2 | 1. 調査区中央・南
2. 調査区中央住居跡・掘立柱建物跡 | 3. 22号住居跡全景（南より）
4. 23・24号住居跡全景（南より） |
| 図版3 | 1. 調査区北西住居跡・掘立柱建物跡
2. 調査区西中央住居跡・掘立柱建物跡 | 5. 23号住居跡全景（南より）
6. 同 遺物出土状況 |
| 図版4 | 1. 1号住居跡全景（南より）
2. 同 カマド
3. 2号住居跡全景（南より）
4. 3号住居跡全景（南より）
5. 4・51号住居跡全景（南より）
6. 4号住居跡遺物出土状況
7. 5号住居跡全景（南より）
8. 同 遺物出土状況 | 7. 24号住居跡全景（南より）
8. 同 遺物出土状況 |
| 図版5 | 1. 6号住居跡全景（南より）
2. 同 遺物出土状況（1）
3. 同 遺物出土状況（2）
4. 同 カマド
5. 同 掘形 | 9. 1. 25号住居跡全景（南より）
2. 26号住居跡全景（南より）
3. 同 カマド
4. 27号住居跡全景（南より）
5. 同 遺物出土状況（1）
6. 同 遺物出土状況（2）
7. 同 遺物出土状況（3）
8. 同 カマド |
| 図版6 | 1. 7号住居跡全景（南より）
2. 8号住居跡全景（南より）
3. 9号住居跡全景（南より）
4. 同 遺物出土状況（1）
5. 同 遺物出土状況（2）
6. 同 遺物出土状況（3）
7. 10号住居跡全景（南西より）
8. 12号住居跡全景（南より） | 10. 1. 28号住居跡全景（南より）
2. 同 遺物出土状況（1）
3. 同 遺物出土状況（2）
4. 同 遺物出土状況（3）
5. 同 遺物出土状況（4） |
| 図版7 | 1. 13号住居跡全景（西より）
2. 同 カマド
3. 14号住居跡全景（南より）
4. 15号住居跡全景（南より）
5. 16号住居跡全景（南より）
6. 18号住居跡全景（西より）
7. 20号住居跡全景（南より）
8. 同 遺物出土状況 | 11. 1. 29号住居跡全景（南より）
2. 同 遺物出土状況（1）
3. 同 遺物出土状況（2）
4. 同 遺物出土状況（3）
5. 同 遺物出土状況（4）
6. 同 掘形 |
| 図版8 | 1. 21号住居跡全景（南より） | 12. 1. 30号住居跡全景（西より）
2. 同 遺物出土状況（1）
3. 同 遺物出土状況（2）
4. 同 遺物出土状況（3） |
| | | 13. 1. 31号住居跡全景（西より）
2. 同 遺物出土状況（1）
3. 同 遺物出土状況（2）
4. 同 遺物出土状況（3） |

5. 同 カマド
- 図版14 1. 32号住居跡全景（西より）
2. 33号住居跡全景（南より）
3. 同 カマド
4. 同 遺物出土状況（1）
5. 同 遺物出土状況（2）
6. 同 遺物出土状況（3）
7. 34号住居跡全景（南より）
8. 35号住居跡全景（南より）
- 図版15 1. 36・37号住居跡全景（東より）
2. 38号住居跡全景（南より）
3. 39号住居跡全景（北より）
4. 40号住居跡全景（西より）
5. 23-41号住居跡遺物出土状況（南より）
- 図版16 1. 41号住居跡遺物出土状況（1）
2. 同 遺物出土状況（2）
3. 同 遺物出土状況（3）
4. 同 遺物出土状況（4）
5. 42号住居跡全景（西より）
6. 17-43号住居跡全景（南より）
7. 44号住居跡全景（東より）
8. 45号住居跡全景（南より）
- 図版17 1. 46号住居跡全景（南より）
2. 47号住居跡全景（南より）
3. 同 遺物出土状況
4. 48号住居跡全景（南より）
5. 49号住居跡全景（南より）
6. 1号井戸跡全景
7. 2号井戸跡全景
8. 3号井戸跡全景
- 図版18 1. 1号溝全景（南より）
2. 2号溝全景（北より）
3. 1号溝遺物出土状況（1）
4. 同 遺物出土状況（2）
5. 同 遺物出土状況（3）
6. 同 遺物出土状況（4）
- 図版19 1-9・11-12号住居跡出土遺物
- 図版20 13-14-16-17-19-20-21-22-23号住居跡
出土遺物
- 図版21 24-25-27-28-29号住居跡出土遺物
- 図版22 30-31号住居跡出土遺物
- 図版23 32-33-35-36-37号住居跡出土遺物
- 図版24 41号住居跡出土遺物
- 図版25 41-42-43-44-47-49-50号住居跡出土遺物
- 図版26 7-9-11-13-32-38-39-40-51-53-55号掘立
柱遺物跡、1号溝出土遺物
- 図版27 墨書き土器（1）
- 図版28 墨書き土器（2）
- 図版29 墨書き土器（3）

第1章 調査に至る経緯と調査組織

第1節 調査に至る経緯

平成7年4月13日に大松企画管理株式会社代表取締役松原次男氏から、土浦市教育委員会に埋蔵文化財の有無の照会があった。その内容は、土浦市大字中地内での土取り工事に伴うものであった。教育委員会では開発予定地と埋蔵文化財遺跡地図との照合を行ない、事業主から照会のあった土地は「周知の遺跡」の解ノ台遺跡（市番号A-69）に全面的にかかることを説明した。

土浦市教育委員会は4月14日に現地の確認及び現地踏査を行なった。開発予定地の一部が畑となっているのみでほとんどは山林となっていた。畑や山林の中を通じる農道で土師器・縄文土器を表探した。先の状況を元に、土取り工事を実施する場合には事前に埋蔵文化財の試掘調査を行ない、遺跡の内容・範囲等を確認し、その後の協議の為に埋蔵文化財の状況把握をする必要性を伝えた。加えて試掘調査後、埋蔵文化財の現状保存が不可能な場合は本調査の必要性があることを説明した。

その後、事業主と教育委員会との間で協議がなされ、地主・事業者の協力を得て試掘調査を実施することになった。試掘調査は教育委員会の立会のもと開発予定面積18,355m²のうち7,137m²を対象にしたもので、平成7年6月29日から6月30日までトレーン調査により行なった。その結果、縄文時代から平安時代にわたる多数の遺物・遺構が確認され、当遺跡が規模・密度ともに大規模なものであることが想定できた。この結果報告については7月10日付で事業者宛てに通知した。

このことを受け7月13日に今後の埋蔵文化財の取り扱いについての協議がもたれ、事業主からは土取り計画は断念する旨の申し出があった。

平成8年2月に入り、事業主から当初の土取り工事計画が宅地造成工事に変更になったことが教育委員会に提示された。そして事業主から前回の試掘調査で対象外の部分についても試掘調査実施との依頼があった。このことを受け平成8年2月8日から2月9日にかけて11,218m²の調査対象面積に対し前回同様の調査方法により試掘調査が行なわれた。この調査においても前回同様多量の遺物・遺構が確認された。

土浦市教育委員会では平成8年3月2日付で、確認調査の状況をまとめ事業主宛てに「開発予定地で今後現状変更を行なう場合は、埋蔵文化財の発掘調査が必要となる」旨を報告した。

この後事業主と土浦市教育委員会との間で、埋蔵文化財の取り扱いについての協議を重ねた。その結果、現状の工事計画では埋蔵文化財の現状保存が困難であることから、発掘調査により埋蔵文化財の記録保存を行なうことで合意した。

発掘調査にあたっては土浦市教育委員会が土浦市遺跡調査会に依頼し、緊急な開発事業のため、山武考古学研究所の協力の基に実施するはこびとなった。

調査会の実施にあたっては、これまでのさまざまな合意事項を協定書としてまとめ、事業者・教育委員会・土浦市遺跡調査会の三者で取り交わした。その後、事業者と土浦市遺跡調査会との間で契約書をかわし平成8年11月15日から発掘調査に至った。

第2節 調査組織

1 調査会組織

平成8年度の土浦市遺跡調査会組織は下記の通りである。

会長	須田直之	土浦市文化財保護審議会会长
副会長	青木利次	土浦市教育委員会教育長(平成8年9月31日まで)
副会長	尾見彰一	土浦市教育委員会教育長(平成8年10月1日から)
理事	大塚博	土浦市文化財保護審議会委員
タ	廣川宣治	土浦市参事兼企画課長
タ	内海崎保生	土浦市区域整理課長
タ	坂入勇	土浦市建築指導課長
タ	野口幹雄	土浦市都市計画課長
タ	金塙文雄	土浦市耕地課長
タ	大塚重治	土浦市土木課長
タ	平岡和夫	山武考古学研究所長
監事	飯田章二	土浦市教育委員会教育次長
タ	小野政大	土浦市監査事務局長
幹事長	宮本昭	土浦市教育委員会文化課長
幹事	矢口俊則	上高津貝塚ふるさと歴史の広場副館長
タ	小貫俊男	土浦市教育委員会主査兼文化財係長
タ	塙谷修	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹
タ	石川功	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹
タ	黒澤春彦	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事
タ	中澤達也	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事
タ	岡口満	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事
タ	橋場君男	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事
タ	宮本礼子	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事

2 調査担当

現地発掘調査から整理・報告書作成に至るまで山武考古学研究所が担当した。

主任調査員	平岡和夫 桐谷優
調査員	高野浩之 斎藤洋 土牛朗治(整理調査)
調査員参加者	湯原勝美 間宮正光 近藤省一郎
調査補助員	秋山和 安達浩二 飯田志滿子 石神洋 石黒よし子 磐前順一 磐前大地 磐前和己 市村けい 市村東子 浦野博之 海野二三子 大林貴 小野寺奈央 河合淳子 金田志帆 川中四郎 川村俊夫 河原秋彦 倉持李子 小角みや子 小松伊久子 小柳道雄 斎藤英子 坂本のぶ子 桜井隆夫 沢田すみ江 高久忠義 塚原なお子 守島邦助 中川恭子 中島とみ子 中島よしこ 長嶋道子 中村暉也 西宮芳江 西山歩弥 長谷川秀久 芹田英子 松井久子 宮本義雄 目黒貞志 望月典昭 矢口弘子 山崎亜紀子 吉原玲子
整理補助員	朝生タカ 池田とし子 上野尚美 折鉢伸二 片岡美和子 加藤庸子 平岡重也子 藤崎徳江 松戸芳子 三浦京子

第2章 遺跡の位置と環境

扇ノ台遺跡はJR常磐線荒川沖駅の北1.5kmの茨城県土浦市中1141-1番地ほかに所在している。土浦市付近では、霞ヶ浦に注ぐ大小の河川が形成した低地と洪積台地とが帯状に並行する地形となっている。河川は北より桜川、花室川、清明川、乙戸川、小野川の5条が北西から南東方向に流下して、台地を方形に区画している。また、各河川に直行するように小谷が洪積台地の縁辺部を浸食して樹枝状の深い谷を形成している。本遺跡は花室川の右岸にあたり、霞ヶ浦の河口から3.6km遡った宇永国の塚田橋付近から南西方向に入った小谷の奥に位置している。遺跡の所在する台地の標高は約20mで、周囲は急峻な斜面となり、下の水面との比高は約5mを計る。

遺跡の周辺では多くの遺跡が確認されているが、時代的には旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中・近世の各時代にわたっている。第1図と表1に示したように、本遺跡周辺に所在している主な遺跡は91か所である。このなかには時代的に重複した複合遺跡も含まれているので、これらを個別に数えあげた総計は約120遺跡となる。

旧石器時代遺跡は62向原遺跡、87摩利山貝塚、91宮前遺跡の3か所が確認されている。宮前遺跡ではナイフ形石器、スクレーバーなどの石器群が発見されている。昭和60年代に市域の北にあたる原出口遺跡が調査され、尖頭器多数が出土している。今後、本市域内でもこの時期の遺跡が増加していくものと思われる。

縄文時代遺跡は34か所が確認されており、花室川を挟んだ台地上に多く分布している。特に右岸の台地上には大遺跡が集中している。なかでも53号橋台遺跡をはじめとする字中村西根付近の7遺跡、本遺跡周辺にあたる字摩利山新田付近の12遺跡、74号地塚遺跡周辺の宇右初付近の5遺跡の集中度は強く、特徴的である。本遺跡と同時期の遺跡の分布を「土浦市内の縄文時代中期の主な遺跡」図によって知ることができる。これによれば、花室川右岸の縄文中期の遺跡は宇上高津付近、字中村西根付近、字摩利山新田付近の3地点に遺跡が集中しており、大集落が形成されていたことが判明する。後述するように、本遺跡でも中期の大集落遺跡が営まれていたことが確認されている。

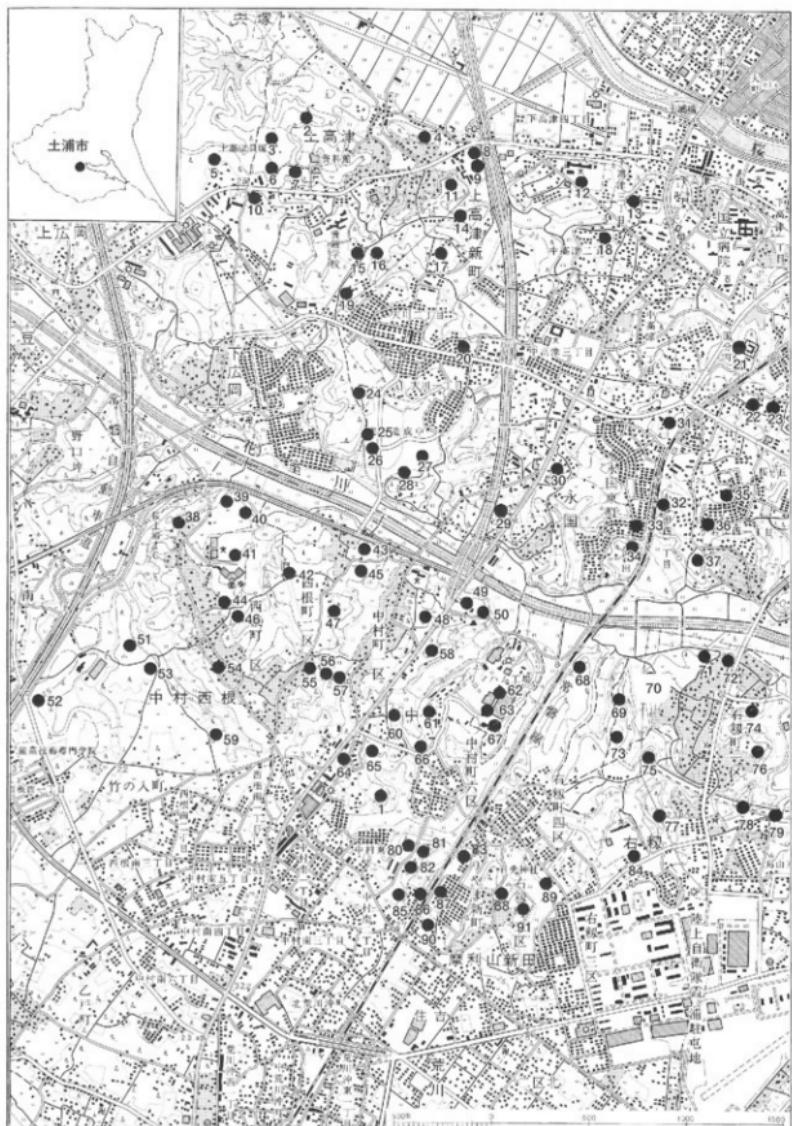
弥生時代の遺跡は30和台遺跡、85木ノ宮南遺跡Aの2遺跡であり、詳細については不明な点が多い。

古墳時代の遺跡は2青久保遺跡ほかの48か所が確認されていて、そのうち11か所が古墳ないし古墳群である。古墳は桜川右岸に沿った台地縁辺と花室川右岸の台地縁辺に多く築造されている。特に字中村西根付近に多く、一部は中村町1丁目付近にまで広がっている。古墳時代集落は花室川からやや南に寄った台地上に広く分布している。

奈良・平安時代の遺跡は13か所が確認されていて、花室川右岸、左岸の台地上に広く分布が認められる。なかでも本遺跡の東2.6kmの北平・宮ノ鎌に所在する鳥山遺跡は昭和47年以降第3次にわたる調査が実施され、101軒の住居跡と土坑10基、古墳9基、貝塚2か所が確認されている。住居跡の全部が同時期のものとは考えられていないが、かなりの大規模集落であったものと思われる。41西根遺跡はかつて製鉄遺跡とされてきたが、現在消滅しており、詳細については不明である。

立 地

本遺跡は花室川右岸の洪積台地上に立地している。宇永国の塚田橋付近から南西方向に進入した谷は途中竹岸学園の南で西側に支谷を分岐し、さらに南進して宇摩利山新田付近に至り西側、中央、東側の3支谷を分岐して谷頭部を形成している。西側の支谷は3指に再分岐しているが、この中央部分に残された大舌状台地上が本遺跡の営まれた地点である。台地の北から東にかけては、標高約15mの低湿地が巡り、東から南に



第1図 扇ノ台遺跡の位置と主な遺跡

国土地理院「土浦」1:25,000



第2図 扇ノ台遺跡周辺地形と古代遺跡
明治16年大日本帝国測量部迅速図「土浦」1:20,000

表1 扇ノ台周辺遺跡一覧表

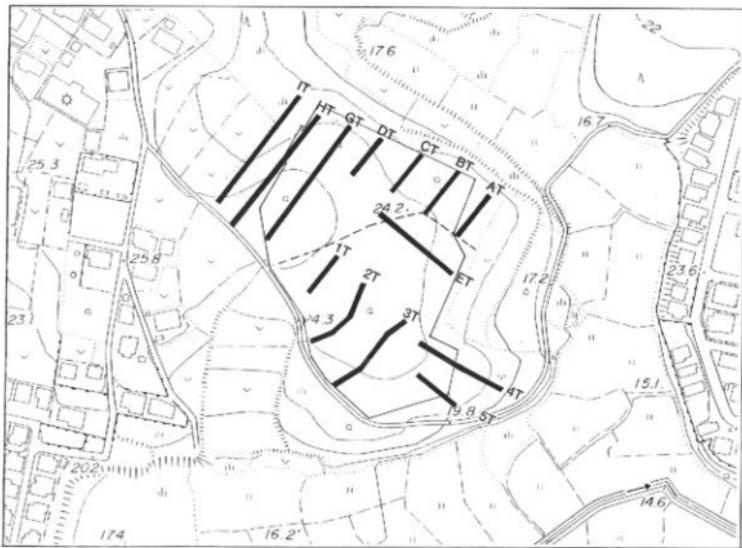
番号	遺跡名	所在地	種別	時代	番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1	扇ノ台遺跡	中字扇ノ台	集落跡	縄文・平安	47	平代地遺跡	西横町字平代地	包蔵地	縄文・古墳
2	吉久保遺跡	穴塚町字吉久保	集落跡	古墳	48	南達中遺跡B	中村町一区南達中	包蔵地	古墳
3	上高津貝塚	上高津町字貝塚	貝塚		49	馬道遺跡	中村町一区字馬道	包蔵地	古墳
4	扇下女發占須	上高津町字下女發	古墳	古墳	50	扇道古墳群	・	古墳群	古墳
5	栗崎遺跡	穴塚町栗崎	包蔵地	縄文・古墳	51	笛崎遺跡	中村西横字笛崎	包蔵地	縄文
6	眞庭庄A遺跡	上高津町字眞庭庄	集落跡	縄文	52	長峰遺跡	中村西役字長峰	包蔵地	縄文
7	源詮庄B遺跡	・	集落跡	縄文・古墳	53	石橋台遺跡	中村西根字石橋台	包蔵地	縄文
8	天神山古墳	常名町字西根	古墳	古墳	54	西所在城	中村西根字西	塚	古墳
9	天土山古墳群	上高津字古館	古墳群	古墳	55	大日古墳	西根町白楽	古 墓	古墳
10	出山山遺跡	上高津町出山	包蔵地	奈良・平安	56	白楽所在塚	西根町字白楽	塚	古墳
11	寄居遺跡	上高津町	集落跡	古墳～平安	57	浅間古墳	西根町白楽	古 墓	古墳
12	下高津小字長瀬	下高津町	包蔵地	古墳	58	南達中A遺跡	中村町一区南達中	古墳跡	古墳・奈良
13	弁天社遺跡	下高津三丁目	包蔵地	古墳	59	竹ノ入遺跡	中村西板字竹ノ入	包蔵地	縄文
14	うぐいす平遺跡	上高津新町	集落跡	古墳～平安	60	谷原門遺跡B	中村町一区字谷原門	包蔵地	古墳
15	宮脇B遺跡	上高津町字宮脇	包蔵地	縄文～中世	61	谷原門遺跡C	・	集落跡	平安
16	宮脇A遺跡	・	包蔵地	古墳	62	向原遺跡	中字向原	集落跡	旧石器・古墳
17	新町遺跡	上高津新町	包蔵地	古墳	63	向原古墳群	大字中字向原	古墳群	古墳
18	西原遺跡	中高津町字西原	包蔵地	古墳	64	高久保一里塚	中村町字萬葉一里塚	一里塚	江戸
19	宮脇庚申塚	上高津町字宮脇	塚	鎌倉・室町	65	天神遺跡	中村六区字天神前	包蔵地	古墳
20	中高津古墳	中高津町字天川	古 墓	古墳	66	谷原門遺跡A	中村一区字谷原門	包蔵地	縄文・古墳
21	四分遺跡	四分町	包蔵地	縄文	67	ともえ坂古墳群	中村町字池向	古墳群	古墳
22	六十原A遺跡	桜ヶ丘町	集落跡	縄文	68	右町十二塚	右町字行部	塚	奈良・平安
23	六十原B遺跡	桜ヶ丘町	集落跡	縄文	69	牧の内遺跡	右町一区字牧の内	包蔵地	古墳・奈良・平安
24	十三塚A遺跡	永国町字十三塚	塚	中近世	70	食代遺跡	右町一区字代	集落跡	古墳・平安・中世
25	十三塚B遺跡	・	集落跡	古墳	71	平坪遺跡	右町一区字平坪	包蔵地	縄・古・奈・平
26	水國十二塚	永国町字十三塚	塚	中近世	72	沖ノ山遺跡	右町一区字沖ノ山	包蔵地	古墳
27	寺家ノ後遺跡	永国町字家ノ後	古墳群	古墳	73	内路台遺跡	右町一区字内路台	包蔵地	縄文
28	寺家ノ後遺跡	天川南字寺家ノ後	包蔵地	古墳	74	堂地塚遺跡	右町字堂地塚	包蔵地	縄文
29	龜井遺跡	永国町字龜井	包蔵地		75	右町二区遺跡	右町二区	塚	近世
30	和合遺跡	永国町字和合・天下	集落跡	椎心式・古墳	76	松原遺跡	右町字松原	包蔵地	縄文・古墳
31	ピカ首遺跡	小岩町字ピカ首	包蔵地	縄文	77	小谷遺跡	右町一区字小谷	包蔵地	古墳
32	阿ら地遺跡	小岩町字阿ら地	包蔵地	古墳	78	宮城遺跡	右町字	包蔵地	
33	水国遺跡	永国町字東田	集落跡	縄文	79	数光遺跡	右町字	包蔵地	縄文
34	宮久保遺跡	永国町字宮久保	包蔵地	古墳	80	鳥山八山遺跡	鳥山町二区	包蔵地	古墳
35	桜ヶ丘遺跡	小岩町字桜ヶ丘	包蔵地	古墳	81	木の宮遺跡C	中村町字木の宮	包蔵地	縄文
36	油荒田遺跡	小岩町字丁口油荒田	集落跡	縄文	82	木の守通塚B	中村町字木の宮	包蔵地	縄文・古墳
37	いさる遺跡	小岩町字三丁目・いざる	包蔵地	古墳	83	峰崎遺跡A	摩利山町字峰崎	包蔵地	縄文
38	二又遺跡	西横町二又	集落跡	高文化・平安	84	宮城遺跡	右町字宮城	包蔵地	縄文
39	後稻遺跡	西横町字後稻跡	包蔵地	縄文・古墳	85	木の守通塚A	中村町字木の宮	包蔵地	縄文・牛糞
40	不動塚古墳群	西横町字不動塚	古墳群	古墳	86	峰崎遺跡C	摩利山町字峰崎	包蔵地	縄文・古墳
41	西横遺跡	中西横町字西横	製鉄跡	奈良・平安	87	摩利山貝塚	右町字峰崎	貝 塚	旧石器
42	宮基遺跡	西横町字宮基	包蔵地	古墳～中世	88	椎前遺跡	摩利山町字椎前	包蔵地	縄文
43	平遺跡	西横町字平	包蔵地	古墳	89	右町貝塚遺跡	右町町	包蔵地	縄文
44	中新台遺跡	西横町字中新台	集落跡	古墳	90	西横遺跡B	摩利山町字西横	包蔵地	縄文
45	森遺跡	西横町字森跡	包蔵地	古墳	91	宮前遺跡	摩利山町字宮前	包蔵地	旧石器・縄文
46	堂地古墳跡	西横町字堂地	包蔵地	古墳					

かけては浅い瀬れ谷が回りこんでいて北、東、南の3方向が開けた良好な環境となっている。かつては台地の南西縁辺部に湧水があったとの伝承も残されている。本遺跡のある谷頭周辺は縄文中期の集落遺跡が集中する特異な地点である。浸食された細長い舌状台地上には西から木の宮南遺跡C・B・A（加曾利E）、峰崎遺跡A（加曾利E I）、C（加曾利E）、B西・東（加曾利E III・IV）、そして中央に麻利山貝塚が位置している。東に向かい椎現前遺跡、宮前遺跡（加曾利E I）、右筋貝塚東遺跡が、やや離れて谷原門遺跡A、内路地台遺跡の計13遺跡が確認されている。

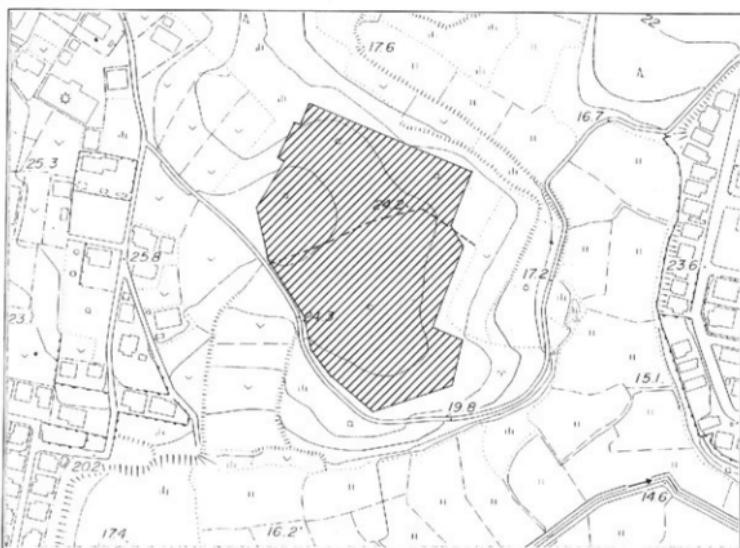


縄文時代中期の集落跡

第3図 扇ノ台遺跡周辺遺跡位置図



第4図 確認調査トレンチ設定図



第5図 本調査範囲図

第3章 確認調査の概要

本調査に先立ち、当遺跡の性格やその規模を把握するため確認調査を実施した。確認調査は開発計画の都合により2回に分けて行なうことになった。これらの調査では遺跡をA・Bエリアに分け、1回目の調査対象範囲をA地点とし、2回目の調査対象範囲をB地点とした。以下はその状況について述べる。

扇ノ台遺跡A地点の調査前の状況は、人の背丈を超える篠が繁茂する山林となっており、山林内の地肌が露出する道で遺物が採集された。確認調査は遺跡のほぼ南側にある約7,137m²の範囲を対象に、平成7年6月29日から同年6月30日まで行なった。調査はトレンチ調査により行ない、トレンチの幅は約2mで計5本を設定した。これらのトレンチは北側から南側へ第1・2・3・4・5トレンチと呼称した。第1・2・3トレンチは台地上に南北方向で設定し、第4・5トレンチは台地縁斜面に東西方向で設定した。トレンチ内の表土は重機を使用して教育委員会担当者立会のもとに行ない、遺構確認面は地表面から約30~40cmの表土を取り去ったローム層上面とし、部分的にローム層よりも上層の暗褐色土層上面とした。この暗褐色土層は縄文時代の遺物を包含する包含層である。

その結果、第1・2・3トレンチでは堅穴住居跡等の遺構の密集する状況が窺われ、明確に遺構と認識できたものは古代のものと縄文時代のものであった。縄文時代の遺構は堅穴住居跡と土坑が確認され、覆土が暗褐色を呈し、周辺の包含層も同様な色調を持つことから遺構確認が困難な状況であった。古代に位置付けられるものは、堅穴住居跡と掘立柱建物跡であった。第4・5トレンチでは先のトレンチほど密な状況ではないが、同様な時期の遺構が確認されていた。

出土した遺物のはほとんどは縄文土器であるが、古代の土師器や須恵器も出土している。縄文土器は阿玉台式・加曾利E式土器が主体を占め、後期前半の土器も出土している。土師器・須恵器は平安時代の9世紀代のものが確認されている。

扇ノ台遺跡B地点の調査前の状況は山林であった。同地点の東には畠や栗畠が所在し、遺物が採集された。確認調査は、遺跡のほぼ北側にある約11,218m²の範囲を対象に、平成8年2月8日から同年2月9日まで行った。調査はトレンチ調査により行ない、トレンチの幅は約2mで計8本を設定した。これらのトレンチは東側から西側へA・B・C……トレンチと呼称した。Eトレンチ以外は南北方向を軸に設定し、Eトレンチは東西方向を向く。トレンチ内の表土は重機を使用して教育委員会担当者立会のもとに行い、遺構確認面は地表面から約30~50cmの表土を取り去ったローム層上面とした。トレンチによっては縄文時代の包含層が存在するが、明瞭な状態で遺構を把握するため、トレンチ内はすべてローム層上面まで掘り下げた。

確認調査の結果、A・B・C・D・Eトレンチの遺構の密度が濃く、特にCトレンチでは遺構の重複関係が不明瞭な箇所が長さ約10mにわたり確認され、遺構が密に重複する可能性が考えられた。

立地的には台地縁辺部よりも平坦面の方に多く遺構が確認された。確認された遺構の時期は、A地点の調査結果同様に、縄文時代と古代のものが確認され、遺構の種類についても同様であった。

遺物・遺構の時期は縄文時代中期の阿玉台式・加曾利E式のものが多数を占め、奈良時代末から平安時代初の土師器・須恵器も出土していた。

今回は合計2回の確認調査により予想以上の遺構・遺物が確認された。調査面積は開発予定面積の6%であったが多数の堅穴住居跡や土坑が確認された。よって本遺跡が大規模な集落を構成していることが想定された。



1. 伐開前の遺跡遠景（南より）



2. 伐開後の遺跡遠景（西より）



3. A 地点第1トレンチ（北→南）



4. A 地点第2トレンチ（北→南）



5. B 地点 A トレンチ（南→北）



6. B 地点 E トレンチ（西→東）

第4章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

調査の範囲は、確認調査の成果に基づき、面積21,000m²について本調査を実施した。

調査区は日本平面直角座標区座標を用いて区画し、X軸（南北）+5000、Y軸（東西）+30700を支点基準として10m×10mのグリッド方眼を設定した。調査区の名称はアルファベットと算用数字を用い、西から東へA・B・C……T、北から南へ0・1・2・3……19と呼称した。表上は調査前に事業者が大部分除去していたので、遺構確認作業から開始した。

各遺構の調査については、住居跡は基本的に4分割法を用い、主軸線を基準に上層観察用ベルトを設定し、遺物は、覆土の上・中・下・床直上・床着に分けて出土地点・高さを記録し、取り上げを行った。掘立柱建物跡・横列は、柱痕を確認し、柱間を通す形で柱痕を2分割して土層の観察を行った。井戸・土坑・か跡は、主軸を基準に2分割あるいは4分割し、溝は全長に合わせて数か所土層を観察した。尖端圓は平板実測と造り方実測を併用してを行い、全体測量1/100、各遺構は平面図・上層図・断面図ともに1/20を基本に、

炉・カマドは1/10、掘立柱建物跡・溝1/40で作成した。写真撮影は35mm白黒及びカラーリバーサルフィルム、6×7判白黒フィルムを用いて適時行った。遺構掘り下げを終了後、調査の進捗に合わせてバルーンとラジコンヘリコプターにより2度の空中撮影を行った。

整理調査は、山武考古学研究所において発掘調査により得られた資料・遺物を対象に古代に伴う遺構・遺物を主に行なった。遺物は細片に至るまですべて水洗いをし、注記は下記の略号を用いた。

扇ノ台遺跡……O N 　古代住居跡……H 　掘立柱建物跡……S B 　土坑……S K H

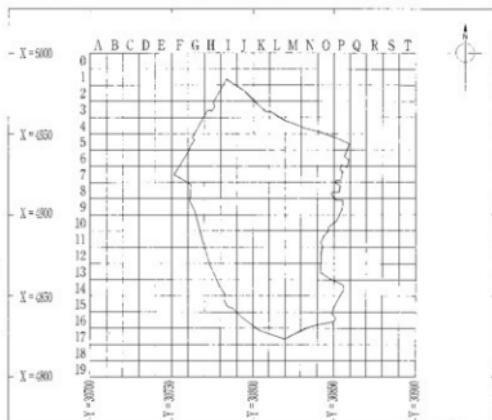
ピット……P H 　溝……S D H 　横列……S A

出土遺物の写真は白黒35mm、白黒6×7判で撮影し、墨書き器については赤外線写真を撮影した。

第2節 調査の経過

発掘調査は当初平成8年11月15日より開始し、平成9年3月25日までの間、調査面積12,000m²を対象として行なうこととなった。その後、遺構の広がりによって最終的には調査面積21,000m²について実施した。以下は、本遺跡における調査経過の内容である。

平成8年11月 調査に先立って事業者である大松企画管理株式会社より、提供頂いたテント・トイレ等の施設の設置を行なう。15日より調査を開始する。調査区域は、大部分が市教育委員会の指導のもとに事業者によって农土除去作業（第7図）が行なわれている為、遺構確認



第6図 グリッド設定図

作業を西側から南側にかけて進めた。遺構確認作業と並行して調査区域内に水準点と10m×10mのグリッド（座標軸）の設定を行なう。確認された遺構は縄文時代中期から後期の住居跡・屋外炉跡・土坑と古代の住居跡・掘立柱建物跡・井戸・溝等で、縄文時代と古代集落跡の遺構は調査区域全体に分布していることが判明した。

12月上旬 古代に伴う遺構の確認図を作成し、南側より遺構番号を付して、住居跡より遺構調査を進めた。遺構の分布は南側で住居跡24軒・溝2条、北側で住居跡19軒・井戸等を確認する。掘立柱建物跡は、調査区域の西・中央・東に規則的に多数検出された。

中旬 遺構が調査区域外に広がる為に、事業者・市教育委員会と協議を行い、南西側の雜木部分の抜張と中央付近の残り部分の表土除去作業を行なった。

下旬 掘立柱建物跡の南側の溝・住居跡・柱痕の調査を継続する。住居跡は掘り込みの浅いものが多く見られる。8号住居跡内より小鍛冶を確認。出土遺物は5・8・9号住居跡より鉄製劔鍔車・刀子・鎌、3・6・9号住居跡より墨書き土器片が出土する。27日に年内の調査を終了する。

平成9年1月上旬 7日より調査を再開する。調査区域東側の住居跡・掘立柱建物跡の調査作業を進める。東側の住居の29・30・31・33号住居跡内より刀子・鎌・鉄鏃等の鉄製品が多く出土する。特に33号住居跡内より鉄鏃5点が出土する。

中旬 東側の住居跡・掘立柱建物跡の調査作業の継続と縄文時代に伴う遺構調査を始める。古代に伴う遺構は住居跡の軒数45軒を数え、掘立柱建物跡において棟数は30棟強を数える。分布は中央部から西側に集中する傾向があり、主軸方向にも一定の規則性のあることが解ってきた。

下旬 23日、第1回目の航空写真撮影を行なった。南北に延びるベルト状の表土除去作業を行ない、住居跡6軒、掘立柱建物跡20棟以上、井戸等の遺構を確認する。

2月上旬 調査区域中央部から西側の住居跡・掘立柱建物跡の調査作業を行なう。調査の終了した南側から東にかけて全体測量を開始する。縄文時代遺構調査は北側を行なう。

中旬 調査区域古代の遺構調査は中央部分から、縄文時代の遺構は北側から東に調査を進めた。中央部分では41・45号住居跡の覆土中より土師器・須恵器が多く出土する。また、23号



第7図 調査区域表土排土図

住居跡より古銭（神功開寶）が1点出土する。掘立柱建物跡は4間×2間・3間×2間・2間×2間の倒柱で、片庇のものと両妻に庇を有するものが検出された。

下旬 調査区域内の古代に伴う遺構調査を終了する。検出された遺構は住居跡5軒・掘立柱建物跡57棟・横列1条・溝2条・井戸3基である。28日、第2回目の航空写真撮影を行なう。縄文時代の遺構の調査は東側から南側に向かって作業を進める。遺構の時期は中期阿玉台期から加曾利二期、後期称名寺期、堀之内期と確認された。また縄文時代の遺構は古代の集落を構築する際に大規模な整地作業が行なわれた可能性が高いため、大規模に破壊されており、遺物は原位置から移動している。土器片は多量に散布している。

3月 南側から中央部西側地区の縄文時代の遺構調査を行なう。24日に縄文時代の遺構調査を終了する。縄文時代の遺構は住居跡23軒、埋甕と石組みを含む屋外が跡16基・土坑398基を検出する。住居跡は平面形態が楕円形を呈するものと円形を呈するものがあり、規模は楕円形が長軸約7m、円形が5mを計る。土坑は平面形態が円形のものと隅丸方形を呈したものがあり、規模は長径2.5~4m、短径1.4~2.5mで深さは0.3~1.6mを計る。断面形はフラスコ状と袋状の2タイプがあり。フラスコ状の土坑は基底に1~4の小ビットを有するものがある。25日、調査区域内での調査を終了する。

第3節 基本堆積土層

本遺跡の基本層序調査を北西端のG-6グリッドで行った。層序は第8図のとおりで各層の概要は以下のとおりである。

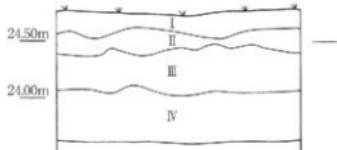
I 表土層 黒褐色を主体として、台地東側斜面部では堆積が厚い。土厚15~25cm。

II 暗褐色土層 土厚は一定ではない。10~25cm。

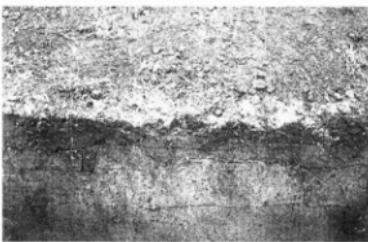
III 黄褐色土層 軟質ローム・ソフトロームである。土厚30cm前後。

IV 掘色土層 硬質ローム・ハードロームである。

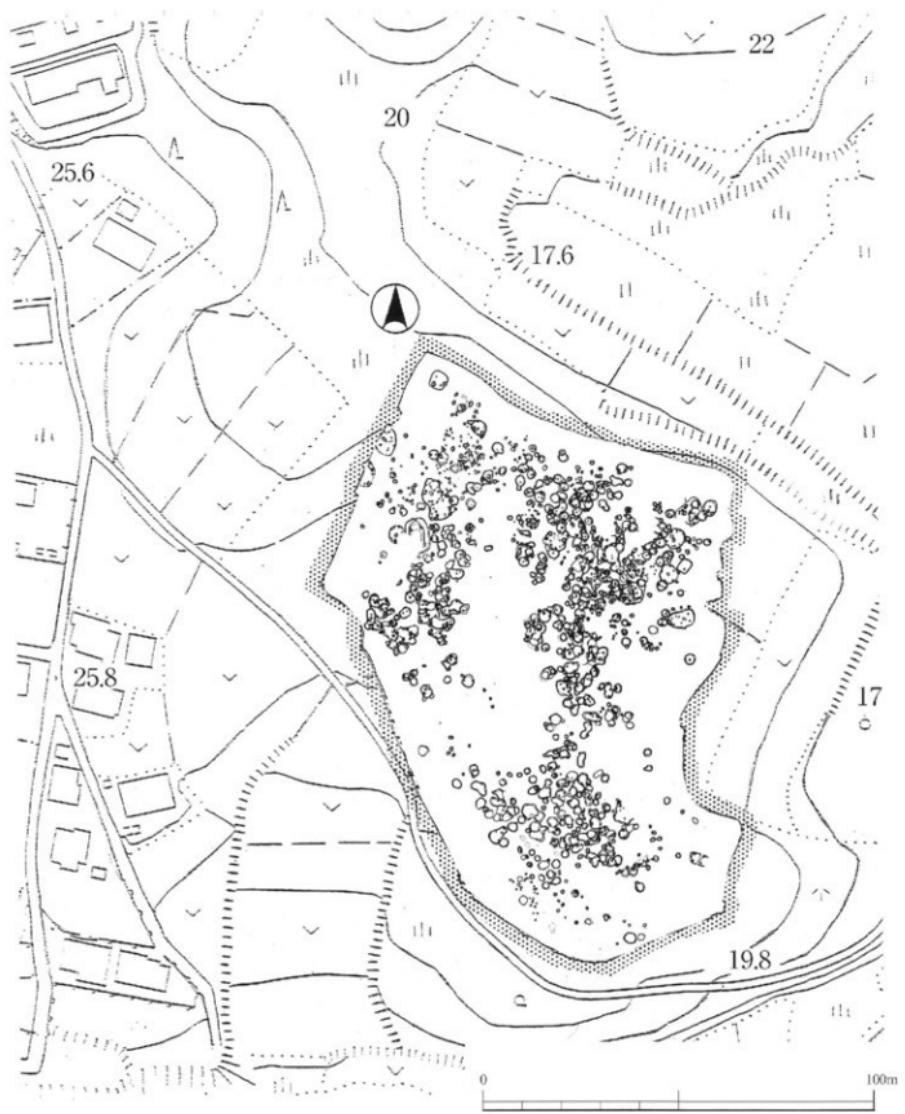
遺構確認面は第II層からIII層上面である。遺構の覆土の特徴として古代に伴う住居跡等の遺構は黒褐色をしており、縄文時代のものは暗褐色を呈している。



第8図 基本堆積土層図



基本堆積土層



第9図 扇ノ台遺跡縄文時代遺構全体図 (1/1,250)



第10図 扇ノ台遺跡遺構全体図(1/400)

第5章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代の概要 (第10図 国版3・4)

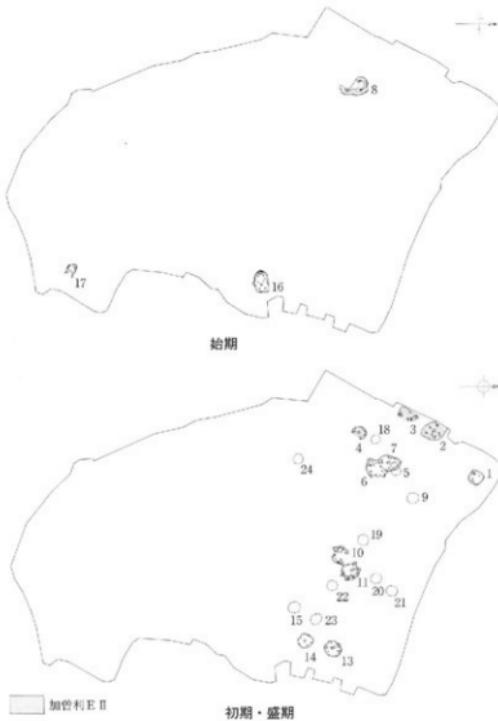
本遺跡の発掘調査において検出した縄文時代の遺構は、中期前半から後期初頭にわたる23軒の竪穴住居跡と土坑群、単独の炉跡である。この遺構群は阿玉台Ⅲ式ないしⅣ式期から構築され始め、称名寺式、堀之内Ⅰ式期に終焉を迎えたものである。本報告書では各遺構の年代の記述に際し、別表の様に型式名を直接使用する場合もあるが、通常始期（阿玉台式）、初期（中幹式、加曾利E1式）、盛期（加曾利EII～Ⅲ式）、末期（称名寺、堀之内Ⅰ式）の4期にわけて記述していくこととする。これは、先述したように縄文時代の遺構が奈良・平安時代の遺構群によって大規模な擾乱を受けていたためであり、これによる遺物の移動、転移が甚だしく時期を確定する資料を欠いているためである。

1. 竪穴住居跡 (第11図 付図1 表2 国版3)

発見された竪穴住居跡は23軒である。このうち阿玉台式土器を出土したもの1軒、加曾利E式土器を出土したもの5軒である。残りは明確な時期の決定を欠くが、住居跡の形態的な特徴に着目した分類を加味すると、始期3軒、初期から盛期にかけて16軒、不明4軒という結果になる。後期の住居跡は確認されていないため、末期は0軒である。

また、竪穴住居跡の平面形から見た特徴としては、方形1軒（1号竪穴住居跡）、円形7軒（2・3・4・7・11・13・14号竪穴住居跡）、長方形3軒（8・16・17号竪穴住居跡）、不整形12軒（5・6・9・10・15・18・19・20・21・22・23・24号竪穴住居跡）である。不整形とした竪穴住居跡は掘り込みも浅く、炉跡と柱穴の配置状況から復元したものであり、本来は円形の平面形をとっていたと考えられるものである。

長方形を呈する3軒についても、いずれも阿玉台Ⅲ式からⅣ式の時期に属するものと考えられ、特に8号竪穴住居跡では2段掘り込み住居跡の構造をもち、内側の段ぎわに4本と推定される柱穴を配置するなど、該期の典型的な様相を示している。同様に16号竪穴住居跡では長軸に沿って6本の柱



第11図 縄文時代住居跡時期別分布図

穴と炉跡が設置されている。斜面部に構築した小規模な17号住居跡では東壁が失われているものの、長方形の平面形と4本の柱穴が確認されている。

表2 繩文時代住居跡一覧表

遺構番号	形態	規模・長×幅×深(m)	炉	柱穴	時期	備考
1号住	方形	4.6×4.4×0.18	なし	4本不整形配置	中期	
2号住	円形	8.7×6.0×0.08	地床炉	12本円形配置	加曾利E II式	住居抜張あり
3号住	円形?	5.6× - × 0.10	石突い炉	9本不整形配置	加曾利E II式	
4号住	円形	4.4×3.9×0.05	地床か	6本円形配置	加曾利E II式	
5号住	不整形	4.9× - × -	地床炉	4本不整形配置	加曾利E II式	
6号住	不整形	8.0×6.3×0.25	石突い炉	9本円形配置	加曾利E II式	
7号住	円形	7.1×5.2×0.35	埋葬炉	11本円形配置	加曾利E II式	
8号住	長方形	9.1×5.8×0.28	不明	4本方形配置?	阿玉台式	段掘り面硬化あり
9号住	不整形	8.5×7.3× -	地床炉	14本以上円形?	加曾利E II式	かは重複あり
10号住	不整形	7.0×5.5×0.15	地床炉	12本円形配置	加曾利E式	
11号住	円形	7.1×5.3×0.18	埋葬炉	11本円形配置	加曾利E II式	
12号住	-	-	-	-	-	欠番
13号住	円形	4.9×5.1×0.17	地床炉	10本円形配置	加曾利E式	
14号住	円形	5.1×4.6×0.15	地床炉	5本円形配置	加曾利E II式	炉に土師器の擾乱
15号住	不整形	6.1×6.0× -	不明	9本以上	加曾利E式	
16号住	長方形	7.1×4.1×0.30	地床炉	6本方形配置	阿玉台式	
17号住	長方形?	4.8×2.8×0.10	不明	4本方形配置	阿玉台式	
18号住	不整形	-	地床炉	5本以下	加曾利E式	
19号住	不整形	-	地床か	9本以上	不明	
20号住	不整形	-	炉石のみ	12本以上	不明	磨石出土
21号住	不整形	-	地床か	5本以上	不明	
22号住	不整形	-	埋葬石突い炉	4本以上	加曾利E式	
23号住	不整形	-	埋葬炉	7本以上	加曾利E式	
24号住	不整形	-	地床炉	14本以上円形?	不明	

2. 土坑（付図1 図版3-4）

発見された土坑は総数398基である。このうち阿玉台式土器を出土するもの69基、同じく中峰～加曾利E I式を出土するものの59基、加曾利E II式を出土するもの219基、加曾利E III式を出土するもの4基、称名寺・堀之内I式を出土するものの20基である。このほか、小破片のみの出土で加曾利E式としか判明しないもの19基、中期とのみ判明したもの8基が加わる。したがって、先の区分に従えば始期69基、初期59基、盛期219基、末期24基という数値になる。

土坑は集落内を環状にめぐるように分布していて、中央部と南西部は空白地帯となっている。また、土坑は同一地点に複数相次いで構築される傾向があり、土坑どうしが複数回重複を繰り返している。この為、土坑の原形を把握することや、構築時期を決定することが難しい状況であった。しかし、集落の南側部分では比較的単独所在の土坑も多く、重複関係も少なかったため、形態や時期の把握は容易であった。

発見された土坑の形態は、浅い円筒状のたらい形と擴部が拡がりになるフラスコ状形の2形態が観察された。両形態の土坑とも底部は平坦で中央ないし、縁際に小ビットが穿たれることが多い。フラスコ状形態の土坑は300・309・328・469・538・553・571・586号に認められるが比較的少数である。この形態の土坑は集落内の特定地点に偏在することもなく、特定時期に偏って構築されることもないようである。

3. 炉跡（付図1 表3 図版3）

発見された炉跡のうち、縄文時代に属する炉跡は16基である。この炉跡のなかには4・12号のように埋葬炉の形態をとり、堅穴住居跡に含めたほうが良いと思われるものもあるが、大半は単独の炉跡と考えられるものである。炉の周囲には大小のビット群や硬化した床面などが確認されていない。調査された阿玉台式期の堅穴住居跡には炉が附属していないものもあり、特に始期の段階ではその傾向が顕著であるといわれてい

るので、堅穴住居跡と対になる屋外炉もこのなかに含まれている可能性が高い。しかし、これ以外にも何らかの目的により、集落内で単独に火を焚いた遺構も存在していたものと思われる。炉跡は楕円形を呈した地床炉の形態をとるもののが14基と多く、残り2基が埋壠炉の形態をとっている。このうちの1基では片岩製の炉石も併用された形態をとっている。いずれの炉跡も焼土は厚く堆積していて、長期間の使用を窺わせるものである。土器、炭化物はあまり含まれていない。炉は十坑群と同じく、ほぼ環状に集落内を巡っている。土坑群の構築されない広場の部分と南西側の開口部分には同じように構築されず、空白地帯となっている。また、炉跡には土坑群の内周部分に所在しているものと、土坑群の外周部分に所在するものとがみられ2重に巡っていた可能性もうかがえる。炉跡1・2号は外周部分に属し、土坑群から距離を隔てた北隅に独立して所在している。

表3 炉跡一覧表

遺構番号	形態	構造	時期	備考
1号炉	楕円形	地床炉	時期不明	焼土基部のみ遺存
2号炉	長楕円形	地床炉	時期不明	焼土基部のみ遺存
3号炉	円形	地床炉	時期不明	
4号炉	円形	埋壠炉	中期	焼石混入
5号炉	円形	地床炉	時期不明	土坑に切られる
6号炉	円形	地床炉	時期不明	周囲に6本小ピット
7号炉	円形	地床炉	時期不明	
8号炉	楕円形	地床炉	加曾利E II式	9号炉と重複
9号炉	楕円形	地床炉	加曾利E II式	ピットに切られる
10号炉	円形	地床炉	時期不明	
11号炉	円形	地床炉	時期不明	
12号炉	円形	埋壠炉	中期	ピットに切られる
13号炉	円形	地床炉	時期不明	
14号炉	楕円形	地床炉	時期不明	ピット内蔵
15号炉	楕円形	地床炉	時期不明	ピット内蔵
16号炉	楕円形	地床炉	時期不明	

4. 土製品（表4）

本遺跡からは土器片錐37点が出土している。いずれも中期阿玉台式から加曾利E式の破片を軸としたもので、後期の土器は1片も含まれていない。形態的には方形のものが大部分を占め、円形のものがこれに次ぎ、三角形、五角形のものが少数存在する。規模的には小形が多く、中形・大形は少ない。紐掛け部は長軸方向に2カ所切ったものがほとんどを占め、短軸方向のもの4点、長短両方向に設けたものが2点ある。

表4 出土土錐一覧表（1）

遺構番号	時期	利用部位	規格	形態	切口部位	切口数
7号住	中期？	胴部	小形	円形	長軸	2
11号住	中期	口縁部	中形	円形	長軸	2
55号土坑	中期？	胴部	小形	円形	短軸	2
103号土坑	加曾利E式	胴部	大形	方形	長軸	2
119号土坑	中期	胴部	小形	方形	長軸	2
130号土坑	摩拭	胴部	小形	3角形	短軸	1
156号土坑	加曾利E式	胴部	小形	方形	長軸短軸	3
205号土坑	加曾利E式	胴部	大形	円形	長軸	2
205号土坑	加曾利E式	口縁部	大形	二角形	2辺	2
205号土坑	加曾利E式	口縁部	大形	方形	長軸	2
205号土坑	加曾利E式	口縁部	大形	方形	長軸	2
217号土坑	加曾利E式	口縁部	大形	方形	長軸	2
289号土坑	加曾利E式	胴部	小形	方形	長軸	2
308号土坑	中期	口縁部	小形	方形	長軸	2
311号土坑	中期	胴部	小形	円形	長軸	2
313号土坑	中期	胴部	中形	方形	短軸	1
341号土坑	中期	胴部	小形	方形	長軸短軸	3
390号土坑	中期	胴部	小形	方形	長軸	2

表5 出土土錘一覧表（2）

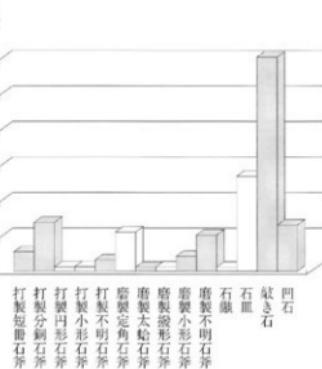
遺構番号	時期	利用部位	規格	形態	切日部位	切日数
390号土坑	中期	頭部	小形	方形	長輪	2
396号土坑	中期	頭部	小形	方形	長輪	2
416号土坑	中期	頭部	小形	円形欠損	長輪	1
437号土坑	中期	口縁部	中形	方形	長輪	2
453号土坑	阿玉台式	頭部	小形	楕円形	長輪	2
469号土坑	中期	口縁部	小形	方形	長輪	2
514号土坑	中期	頭部	小形	三角形	2 近	2
515号土坑	中期	頭部	中形	円形	長輪	2
552号土坑	中期	頭部	小形	方形	長輪	2
570号土坑	阿玉台式	頭部	小形	方形	長輪	2
570号土坑	加曾利E式	頭部	大形	方形	長輪	1
579号土坑	中期？	頭部	小形	方形	長輪	1
591号土坑	中期	頭部	小形	円形	長輪	2
591号土坑	中期	頭部	大形	方形	短輪	2
591号土坑	中期	口縁部	中形	円形	長輪	2
591号土坑	中期	頭部	中形	方形	長輪	1遺存
592号土坑	中期	頭部	大形	方形	長輪	2
M-6 グリッド	加曾利E式	頭部	大形	方形	長輪	2
J-16 グリッド	中期	頭部	小形	円形	長輪	1遺存

5. 石器（第12・13・14図 表6-7・8）

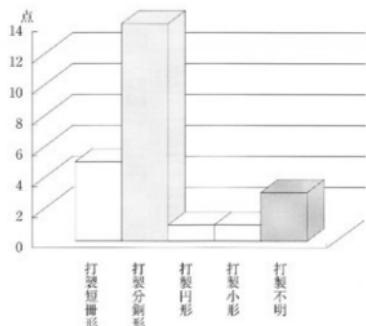
本遺跡から発見された石製品は305点であり、表6の石斧・石鎌・石皿・敲き石・凹石・フレークのほか、加熱を受けた石・原石の8種類に区別される。特に遺跡内で目立つのは扁平な筑波石の破片の多さである。この石材の産地が近いこともあるのであろうが、集落内に搬入された大形品は炉石や熱を受ける部分の使用材として、小形品は打製石斧の素材として利用されている例が多い。本遺跡出土の打製石斧はこの石材以外の素材を利用した例は見受けられない。フレークでは黒曜石が見られず、チャート質のものが多い。上記8種から加熱を受けた石・原石・フレークを除いた、いわゆる石器のみの組成状況は第12図に示したとおりである。石斧と石皿・敲き石の割合が多く、石礫は少ないことが知られる。中でも敲き石の割合が多く、石器全体の約43%を占めている。これに対応するかのよ

うに石皿片が多く、全体の20%を占めている。石礫の割合は1%以下であるから、この組成比率から見るに、本集落は狩猟よりは植物質食物の獲得に主軸をおいた生産内容であったものと思われる。

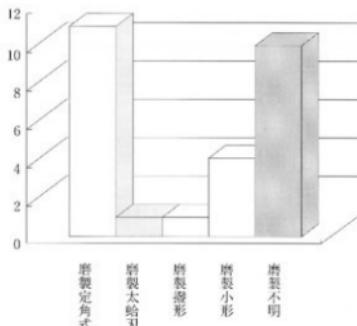
出土した55点の石斧を細分してみたものが第13・14図である。これによれば打製石斧では分角形の突出していることが知られる。打製石斧中の58%が分角形で占められていて、そのほかの形態のものは分角形の3分の1以下という割合になっている。また、磨製石斧では定角式石斧が全体の40%を占めていて、大形の太形船刃石斧は1点のみしか出土していない。小形磨製石斧も少量見ることができる。のことから本遺跡の主体となる石斧は分角形石斧と中形の定角式石斧であったといえよう。



第12図 遺跡における石器の組成



第13図 打製石斧の形態と出土比率



第14図 磨製石斧の形態と出土比率

表6 出土石器一覧表（1）

(単位：点)

造構番号	打製石斧	磨製石斧	石錐	石皿	敲き	凹石	フレーク	備考
4号土坑	打製1	磨製1						打製石斧は短彫形
6号土坑								黒曜石1
14号土坑					1			
26号土坑	打製1							打製石斧は分銅形
35号土坑						1		門石は片岩製
63号土坑	打製1							打製石斧は分銅形
67号土坑					2			
79号土坑					1			
87号土坑	打製1	磨製1			1			打製石斧は短円形
90号土坑	打製1							打製石斧は小形
101号土坑		磨製1						磨製石斧は定角式
103号土坑				1	1			
104号土坑				1				
108号土坑						チャート2		
110号土坑					1			
126号土坑	打製1							打製石斧は分銅形
129号土坑						チャート4		
143号土坑					1			
150号土坑						黒曜石1チャート5		
156号土坑		磨製1			1			磨製石斧は小形
174号土坑					2			
181号土坑				2		チャート1	墨石2	

表7 出土石器一覧表(2)

(単位:点)

遺構番号	打製石斧	磨製石斧	石 嵌 石 盆	凹 き 四 石	フレーク	備 考
184号土坑			1	2		
188号土坑	打製1					打製石斧は分側形
189号土坑	打製1					打製石斧は分側形
202号土坑	打製1					打製石斧は分側形
205号土坑		磨製1		1	チャート3	磨製石斧は楔形
219号土坑			1		チャート1	
225号土坑		磨製1		1		
239号土坑			1	1		
248号土坑	打製1					打製石斧は分側形
254号土坑					フレーク2	
257号土坑	打製1					打製石斧は分側形
267号土坑				1		
269号土坑		磨製1			チャート1	磨製石斧は小形品
276号土坑	打製1			2	チャート1	打製石斧は分側形
277号土坑	打製1			1		打製石斧は分側形
286号土坑		磨製2				磨製石斧は小形と定角式
287号土坑				1		
289号土坑				2		
293号土坑				1		
301号土坑		磨製1				磨製石斧は太始形
313号土坑				1		
324号土坑					チャート1	
325号土坑			1		黒曜石1	石皿表面に凹石
337号土坑			1	1		
341号土坑					黒曜石	
345号土坑					石英1	
348号土坑				1		凹石は片岩製
357号土坑				2		
366号土坑	打製1			1	頁岩1石英1	
367号土坑					石英1	
375号土坑				1		
390号土坑					石英5	
392号土坑				1		
403号土坑	打製1				チャート1	打製石斧は分側形
409号土坑		磨製1			1	凹石は片岩製
414号土坑	打製1	磨製1			1	打製石斧は切削形
419号土坑		磨製1			2	磨製石斧は定角式
420号土坑		磨製1		3	1	磨製石斧は定角式
428号土坑					1	
435号土坑		磨製1				
448号土坑				3		磨製石斧は大形1、小形1
449号土坑		磨製2				凹石は片岩製
453号土坑					1	
469号土坑		磨製1				磨製石斧は定角式
471号土坑					石英2ア1	

表8 出土石器一覧表(3)

(単位:点)

遺構番号	打製石斧	磨製石斧	石 器	石 皿	敲 き	凹 石	フレーク	備 考
472号土坑					1			
474号土坑		磨製1						
476号土坑					2		チャート1	
477号土坑					1			
481号土坑						1		凹石は片岩製大形
484号土坑							チャート1頁岩1	
502号土坑						1		凹石は片岩製
513号土坑							石英3	
514号土坑				1		1		凹石は片岩製
518号土坑					1			石皿の裏面に凹石
519号土坑							水晶1	
520号土坑						1		
522号土坑	打製1				1	1		打製石斧は塊形
523号土坑		磨製1						磨製石斧は定角式
525号土坑	打製1				1			打製石斧は分銅形
539号土坑				1				石皿の裏面に凹石
547号土坑							1 チャート1	凹石は片岩製
553号土坑		磨製2					石英22	磨製石斧は定角式
559号土坑	打製1							打製石斧は塊形
564号土坑					2			
568号土坑					1			
574号土坑		磨製1						磨製石斧は定角式
584号土坑							チャート1頁岩1	
586号土坑					2			块状耳飾り破損品
591号土坑					1			
593号土坑							チャート1	
609号土坑							石英1チャート1	
612号土坑					1			石皿裏面が凹石
617号土坑	打製1				1			分銅形打製斧
625号土坑		磨製1						小形磨製斧、定角式
627号土坑							黒曜石2	
629号土坑	打製1							分銅形打製斧
2号住				2	1			凹石2加熱受ける
3号住							黒曜石1	凹石1加熱
4号住		磨製2			1	1	黒曜石1チャート2	
5号住					1			
6号住				2	3	1		石皿1凹石1加熱
7号住				1	3		チャート1石英1	石皿1加熱
8号住	木製品2				2			凹石1加熱
9号住	打製2							
11号住	木製品1			1			チャート4砂岩3	
13号住							チャート1	砾石1
14号住							黒曜石1	
16号住	打製1				1			綠泥片岩製打製斧
17号住					1			

6. 集落の変遷（第15・16・17・18図）

扇ノ台遺跡の立地する台地は南東方向に延びる舌状台地で、北側と東側が傾斜の急な斜面となっている。南西側のみが支谷の谷頭に臨んでいて、緩やかな斜面を形成している。この谷頭部分にはかつて湧水が出ていたとの伝承もあり、生活環境としては良好であったものと思われる。

本集落は最終的な形態として馬蹄形を描き、開口部を谷頭のある南西方向に向いている。集落の中央部には東西15m、南北75mの楕円形の広場が形成されている。また、開口部の幅は約20mとなっている。

集落は中期の阿玉台Ⅲ式～Ⅳ式期に居住が開始され、後期の壇之内Ⅰ式期まで継続して営まれたものと思われる。今回の出土遺物中には前期の块状耳飾りも含まれており、近隣には同時期の集落が所在している可能性も疑われる。

発見された遺構は23軒の堅穴住居跡と398基の土坑、16基の炉跡である。堅穴住居跡の時期は阿玉台式期に属するもの3軒、本遺跡での特性により中弐式から加曾利EⅠ式を経て同Ⅲ式までの時期に該当するもの20軒となる。後期の堅穴住居跡は確認されていない。

阿玉台式期の住居は8号堅穴住居跡に見られるごとく、長楕円形を呈し、2段掘りの床と周囲に掘られた柱穴を特徴としている。類型は16・17号堅穴住居跡にも認められ、これにより8・16・17号堅穴住居跡の3住居跡が該期の住居跡となる。時期の確定出来ない20軒のうち、1号堅穴住居跡のみが隅丸方形を呈し、柱穴の位置が不規則に設けられている。これ以外の住居は略円形ないしは円形の平面形を呈し、壁に沿って巡る柱穴を設けている。井のあるものはほぼ床の中央に位置している。阿玉台式期にみられた2段掘りの床は認められない。集落内の住居跡は、阿玉台式期には中央の広場を開き南部、東部、北西部の3地点に1軒づつが構築されていて、北西部に所在する8号堅穴住居跡が最大の規模を有している。次の加曾利E式期を主体とする段階に至ると、東部に10軒、北西部に10軒と同数が向かい合い、南部は消滅して0軒となってしまう。つまり集落全体が台地上を南から北に移動していくことになる。本段階の各堅穴住居跡の規模は各軒ともほぼ平均化していく変化なく、代わりに堅穴どうしが重複する例が増加していく。また、広場の内側部分に構築される住居跡と外側部分に構築される住居跡とが認められ、あたかも広場を取り囲む2重の住居群が存在したかのような感を受ける。

本遺跡の遺構の主体となる土坑は、阿玉台式の時期に69基が馬蹄形の線上に並び、円周をほぼ3分割するように所在していた。それは次の3群にまとまっている。集落の南部にあたる17号堅穴住居跡の北側の1群、東部の16号堅穴住居跡の西側の1群、北西部の8号堅穴住居跡の南西側に所在する1群である。構築数は次の中弐、加曾利EⅠ式期段階に入てもほぼ同数の59基となっている。ところが加曾利EⅡ式期に入ると219基となり、約3倍に増加している。しかし、それ以降加曾利EⅢ式期から後期にかけては大幅に減少していく傾向が見られる。集落内の分布では、馬蹄形をほぼ3分割するという原則は保たれているようであるが、南部の減少が激しく、代わりに東部が大きく増加する傾向が認められる。北西部ではさほど変化がないため、土坑群は次第に南から北東方向へと移動していくよう見受けられる。中期末から後期初頭にかけての土坑の凋落は甚だしく、馬蹄形の円周上に小土坑が点在するのを見るのみである。しかし、特徴的のこととしては前の段階で土坑の減少が顕著であった南部に土坑や小ピットが復活してくることである。

最後に本集落は阿玉台式期から開始され、加曾利EⅠ、加曾利EⅡ式期になると飛躍的に発展し、称名寺式期以降に至ると急速に衰退する。発見された遺構のうち約93%を占めるのが土坑であり、本集落は貯蔵のための集落という様相を呈している。また、集落内では南から北へ向かう住居や土坑の移動がみられ、加曾利EⅡ式期以降の段階では広場を挟んだ南部の地点にはほとんど遺構が所在していないという状況が出現していたものと思われる。



第15図 桶文時代集落の展開（始期）

0 20m



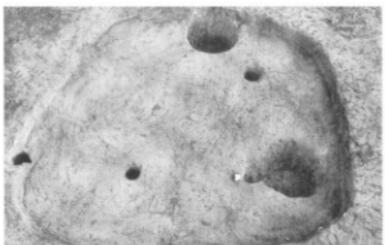
第16図 繩文時代集落の展開（初期）



第17図 縄文時代集落の展開（盛期）

0 20m





1. 1号住居跡（西より）



2. 2号住居跡（西より）



3. 同 遺物出土状況（西より）



4. 8号住居跡遺物出土状況（北より）



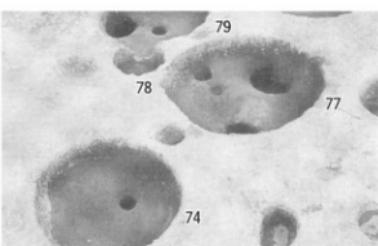
5. 16号住居跡（北より）



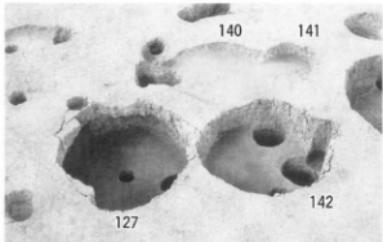
6. 1号炉跡（北より）



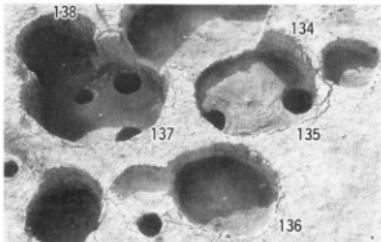
7. 9号炉跡（東より）



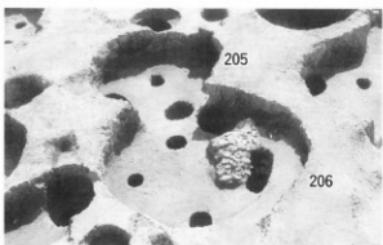
8. 74・77・78・79号土坑（北より）



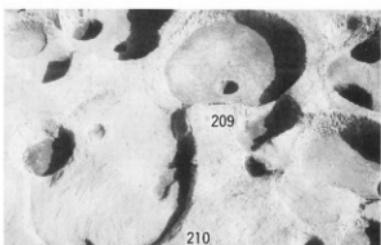
1. 127・140・141・142号土坑（南東より）



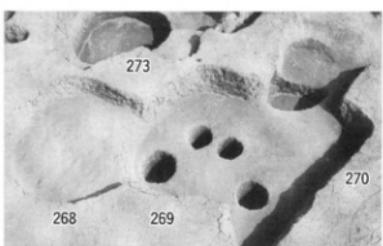
2. 134～138号土坑（東より）



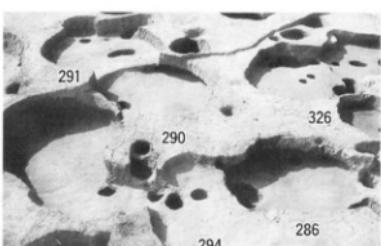
3. 205・206号土坑（北より）



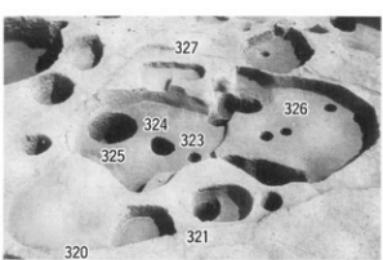
4. 209・210号土坑（北より）



5. 268・269・270・273号土坑（西より）



6. 286・290・291・294・326号土坑（東より）



7. 320・321・323～327号土坑（西より）



8. 539号土坑（南より）



第19図 奈良・平安時代遺構全体図 (1/400)

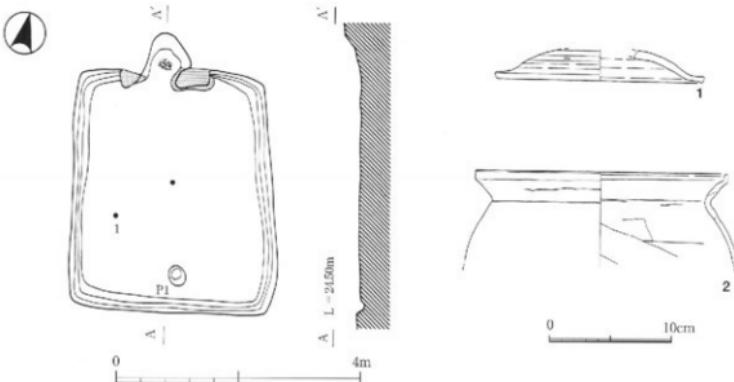
第2節 奈良・平安時代

今回の調査によって検出された当該期遺構は、堅穴式住居51軒、掘立柱建物57棟、柵列2条、溝2条、井戸3基であり、営まれた期間は8世紀前半から10世紀前半に亘る。これらの遺構は各期において、その配置関係及び主軸方向（棟方向）から強い相互関連が予想され、かつ計画的・企画的に構築されている。

1. 堅穴式住居跡

1号住居跡（第20図 表9-77 図版4-19）

調査区域南端のL17グリッドに位置し、主軸はN-18°-Wを示す。平面形は長方形を呈し、規模は長軸3.70m、短軸2.80m、深さ0.15m、床面積約10.36m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから約30cm外寄りに位置する。主柱穴は無く、周溝は全周し、南壁中央から内寸で20cmの位置に出入り口ピット（P1）が検出された。遺物は須恵器蓋、土師器壺が出土している。



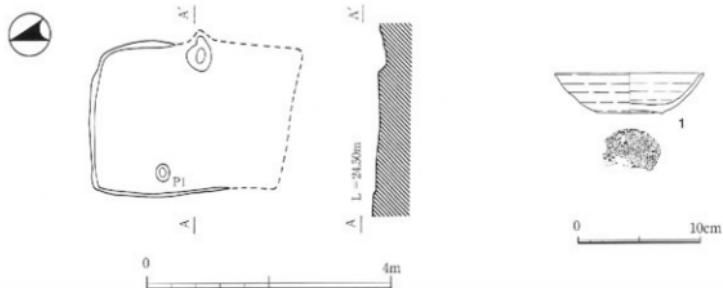
第20図 1号住居跡・出土遺物

表9 1号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼度	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	口(17.0) 鉢 高	外面 体部輪郭整形、天井部右回転施削 内面 体部輪郭整形。	①細砂粒、白色或、裸 ②灰色 ③透光焰	1/5残存。	
2	土師器 壺	口(20.6) 底 高	外面 口縁部横振で、胴部施削。 内面 口縁部横振で、胴部横位施削。	①細砂粒、白色或、裸 ②橙色 ③普通	口縁部1/8残存。	

2号住居跡（第21図 表10-77 図版4-19）

K・L15グリッドに位置し、主軸はN-95°-Eを示す。カマド中軸線以南の壁は削平されているが床面は遺存しており、平面形は長方形と判断される。推定規模は長軸3.30m、短軸2.55m、深さ0.05m、床面積8.40m²である。カマドは東壁中央に付設されている。主柱穴と周溝は無く、西壁の中央北寄りから内寸で18cmの位置に出入り口ピット（P1）が検出された。遺物は土師器壺が出土した。



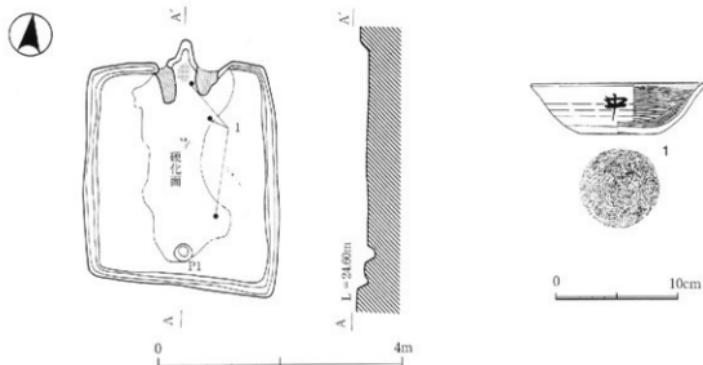
第21図 3号住居跡・出土遺物

表10 2号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器 器 種	出 土 レ ベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土器 环	口(12.2) 底(5.6) 高 3.3		外面 体部輪郭整形、底部右回転系切り。 内面 体部輪郭整形。	①細砂粒、白色 ②褐色 ③液化焰	1/4残存。

3号住居跡 (第22図 表11-77 図版4-19-27)

L15グリッドに位置し、主軸は N-9°-W を示す。平面形は長方形を呈し、規模は長軸3.25m、短軸2.75m、深さ0.15m、床面積約8.93m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから僅かに内側に寄っている。主柱穴は無く、周溝は全周し、南壁中央から内寸で20cm の位置に出入り口ピット(P1)が検出された。遺物は土器器環が出土している。



第22図 3号住居跡・出土遺物

表11 3号住居跡出土遺物観察表

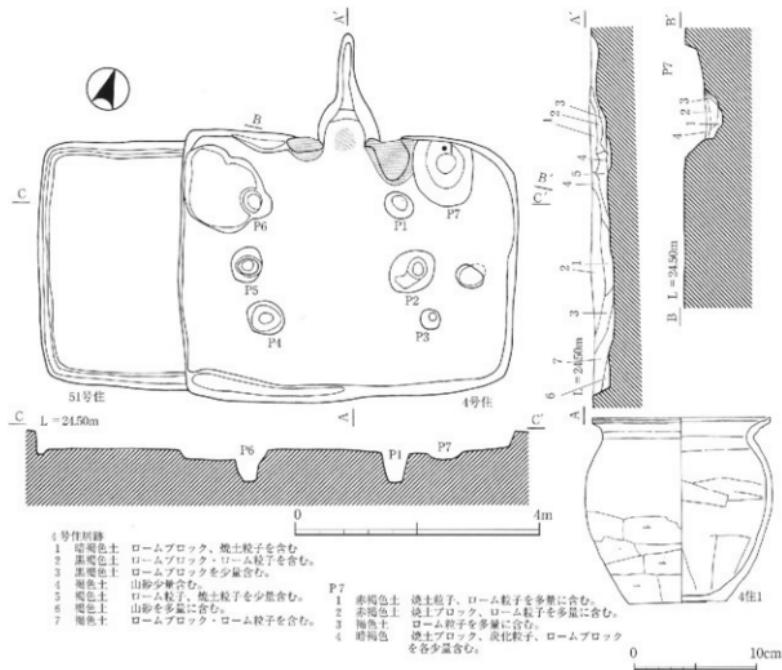
番号	種類 器 器 種	出 土 レ ベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土器 环	床	口 14.2 底 6.4 高 4.3	外面 体部輪郭整形、底部右回転系切り。 後周辺部手持ち跡前り。 内面 体部横位施錆き後黒色処理。	①細砂粒、白色 ②褐色 ③液化焰	3/4残存。 「中」の墨書き。

4号住居跡（第23図 表12-77 図版4・19）

M・N14・15グリッドに位置し、主軸はN-18°-Wを示す。51号住居跡と重複しており、新旧関係は本遺構が新しい。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸5.30m、短軸3.74m、深さ0.35m、床面積約19.82m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ライン上に位置し、煙道は1.20mと長い。柱は6本主柱（P1～6）であり、周溝は北壁と南壁の西側の一部に確認されている。カマドの東脇には梢円平面の土坑（P7）が設けられており、規模は径1.05～1.15m、深さ0.73mである。遺物はP7から土師器甕が出土している。

51号住居跡（第23図 表78 図版4）

M・N14・15グリッドに位置する。住居跡の東側約半分は4号住居跡に切り込まれており、カマド及び規模等の詳細は不明瞭である。平面形は方形あるいは長方形と推察され、規模は東西2.20m以上、南北3.55m、深さ0.30～0.35m、床面積7.81m²以上である。周溝は確認される限りでは全周する。



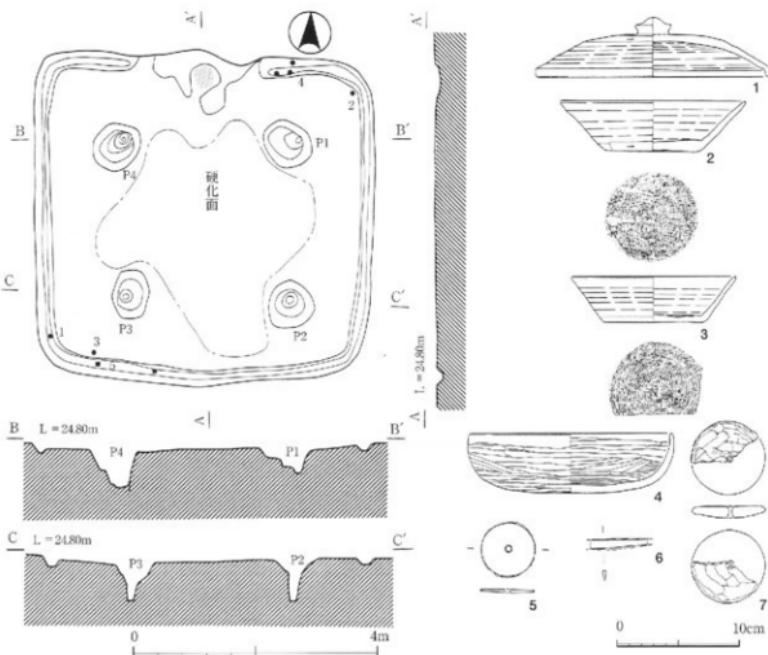
第23図 4・51号住居跡・出土遺物

表12 4号住居跡出土物観察表

番号	種類 器 類	出 土 レ ベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成		残存状態 備 考
					①胎土 ②粘土 ③焼成	①胎土 ②粘土 ③普通	
1	土器 小形甕	P7覆土	口 14.6 底 8.0 高 15.3	外面 口縁部横撫で、底部上平撫で、下半横位施削り。 内面 口縁部横撫で、底部直撫で。	1. 赤褐色土 2. 黄褐色土 3. 黑褐色土 4. 暗褐色土	1. 未焼成 2. 烧成 3. 烧成 4. 未焼成 5. 黄褐色土 6. 绿色土 7. 黑褐色土	1/4欠損。底部 に木炭痕。

5号住居跡（第24図 表13・14・77 図版4・19）

115グリッドに位置し、主軸はN-6°-Eを示す。平面形は方形を呈し、規模は東西5.30m、南北5.10m、深さ0.05m、床面積約27.00m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床面と袖基部が辛うじて遺存しており、火床部の中心は北壁ラインから内寄りに位置する。主柱穴は4本（P1～4）で、周溝は全周する。遺物は須恵器蓋・环、土師器环、鉄製刀子・紡錘車が出上している。



第24図 5号住居跡・出土遺物

表13 5号住居跡出土遺物観察表（1）

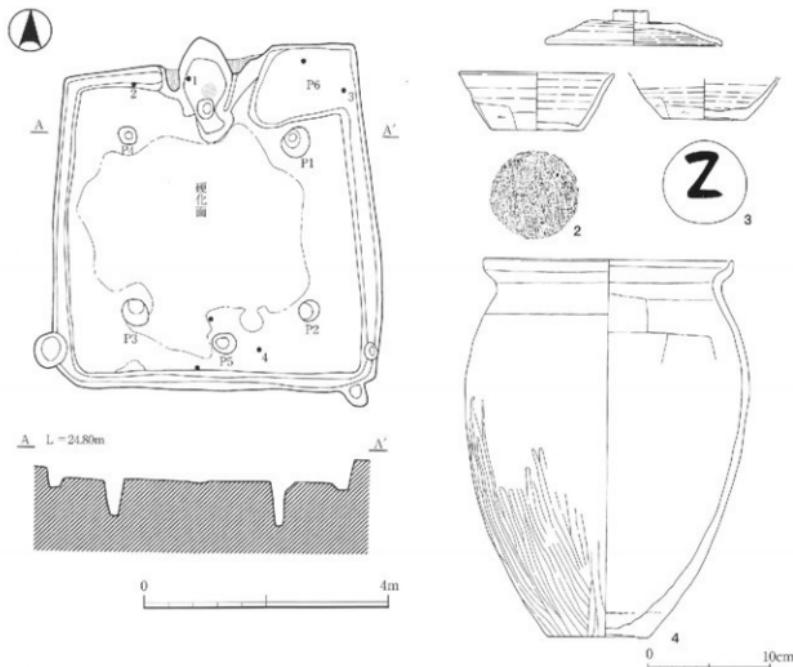
番号	種類 器 種	山 土 レベ ル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①粘土 ②色調 ③焼成 ④細砂粒、白色粒、雲母 ⑤灰色 ⑥透光端	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	床	口 18.8 底 3.0 高 4.9	外面 体部横幅整形、天井部右回転施削 り。 内面 体部横幅整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③透光端	3/5残存。
2	須恵器 环		口 15.3 底 8.0 高 4.2	外面 体部横幅整形、下半部横幅施削り、 底部一方斜手持ち施削り。 内面 体部横幅整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰白～灰黄色 ③透光端、やや歓賞	2/3残存。
3	須恵器 环		口(13.4) 底 8.0 高 3.8	外面 体部横幅整形、底部右回転施削り。 内面 体部横幅整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③透光端	1/3残存。

表14 5号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	種類 器 類	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特質	①粘土 ②色済 ③焼成 ④細砂粒、褐色粒 ⑤褐色 ⑥普通	残存状態 備考
4	土師器 环	口 底	16.4 4.9	外面 口縁部横撫で、底部横位置磨き。 内面 口縁部横撫で、体部横位置磨き。	①粘土 ②色済 ③焼成 ④細砂粒、褐色粒 ⑤褐色 ⑥普通	2/3残存。
5	铁製品 纺錘車			直径4.5cm、孔径0.5cm、厚さ0.3cm		
6	铁製品 刀子			残存長4.7cm、幅0.8cm、厚さ0.3cm、茎部分、先端部は欠損。		
7	土製品 纺錘車			直径6.1cm、厚さ1.0cm、土器底部の転用。 外表面撫で、内面撫で。	①細砂粒、白・黒色粒 ②にい褐色 ③普通	3/5残存。

6号住居跡（第25図 表15-77 図版5-19-27）

J14・15グリッドに位置し、主軸はN-7°-Wを示す。平面形は方形を呈し、規模は東西4.65m、南北4.60m、深さ0.25~0.30m、床面積約21.30m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから内寄りに位置する。主柱穴は4本（P1~4）で、南壁中央から内寸で25cmの位置に入出入口ピット（P5）が検出された。周溝は全周し、カマドの東脇に付設されたP6と連結している。P6は略方形平面を呈し、底面は概ね平坦に整形され、深さは周溝とはほぼ同様の0.22~0.25m程度である。遺物はP6と北壁周辺を中心に、須恵器蓋・坏・椀、土師器甕が出土している。

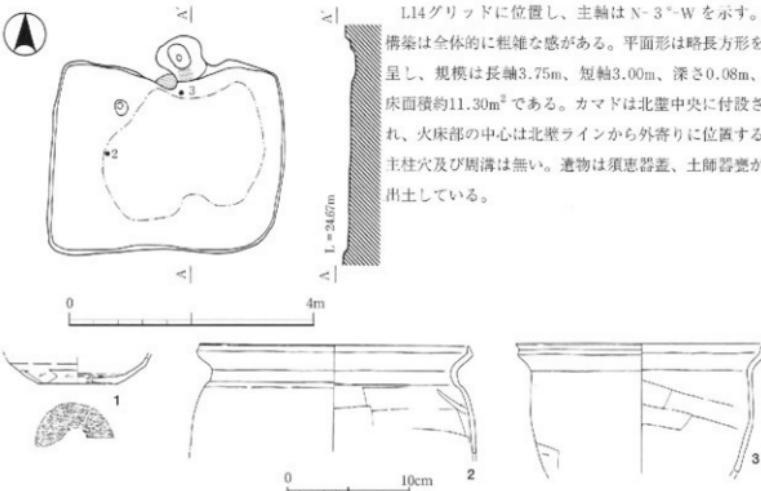


第25図 6号住居跡・出土遺物

表15 6号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	カマド 覆土	口 14.4 底 2.9 高 3.0	外面 体部輪縫整形、天井部右回転窓削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒多、石英 ②灰色 ③還元焰	完形。
2	須恵器 环	覆土	口(12.6) 底 7.4 高 4.7	外面 体部輪縫整形後、下半部横位窓削り、底部一方向手持ち窓削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒多、石英 ②灰色 ③還元焰	1/2残存。
3	須恵器 碗	覆土	口 10.0 底 6.9 高 —	外面 体部輪縫整形後、下半部横位窓削り、底部回転窓切り、後手持ち窓削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰白色 ③還元焰	口縁部欠損。 底部外側に墨書き。「卍」
4	土師器 甕	床	口 20.2 底 8.0 高 31.1	外面 口縁部横撫で、肩部部で後下半縦位窓削き底部一部手持ち窓削り。 内面 口縁部横撫で、底部横位窓削で。	①細砂粒、白色粒、雲母、釋 ②橙色 ③普通	一部欠損。底部 に木葉痕。

7号住居跡 (第26図 表16-77 図版6-19)



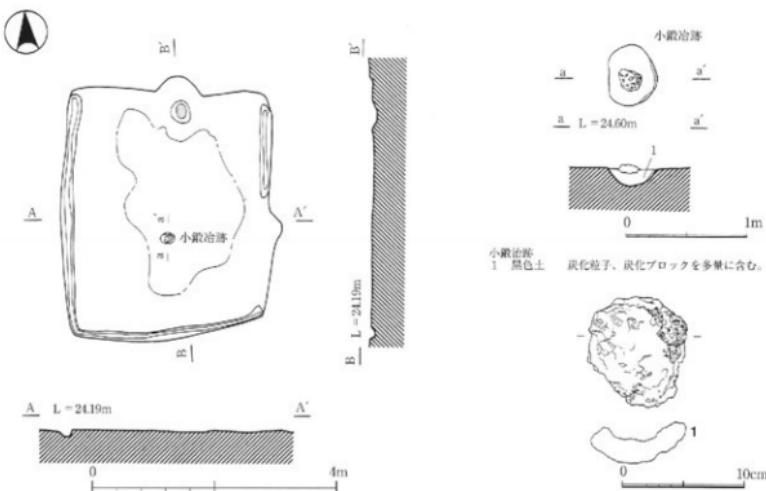
第26図 7号住居跡・出土遺物

表16 7号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 环		口 — 底 6.4 高 —	外面 体部輪縫整形後、下位横位窓削り、底部一方向手持ち窓削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい黄橙色 ③還元気味	1/3残存。
2	土師器 甕	床	口(22.0)	外面 口縁部横撫で、肩部部で、底部横位窓削で。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②青色 ③普通	口縁部1/2残存。
3	土師器 甕		口 20.4 底 — 高 —	外面 口縁部横撫で、肩部部で。 内面 口縁部横撫で、肩部部横位窓削で。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②青色 ③普通	口縁部1/3残存。

8号住居跡（第27図 表17-77 図版6-19）

L14グリッドに位置し、主軸はN-3°-Eを示す。平面形は長方形を呈し、規模は長軸3.95m、短軸2.95m、床面積約11.60m²である。カマドは東壁中央と北壁中央に確認されており、調査状況から北カマドが廃絶した後に東カマドが付設されたものと推察される。主柱穴は無く、周溝は北壁と東カマドの南側を除いて巡る。また、床面中央から小鍛治跡である半球形ポール型炉が確認されており、規模は長径0.52m、短径0.40m、深さ0.15mである。同炉は、埋土（施設土）は炭化物を多量に含む黒色土の單層であり、内壁は部分的に赤色に酸化し、埋土上面から椀形滓が検出されている。



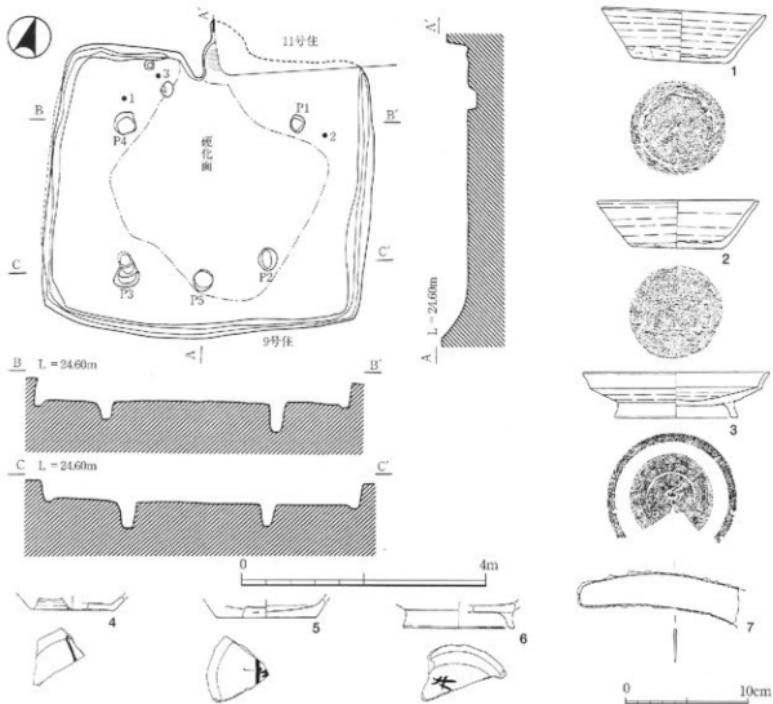
第27図 8号住居跡・出土遺物

表17 8号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技術の特徴	①貯土	②色調	残存状態 備考
					③焼成	④焼成	
1	鉢滓		長さ9.1cm、幅8.0cm、厚さ2.0cm、楕円形。				

9号住居跡（第28図 表18-77 図版6-19-27）

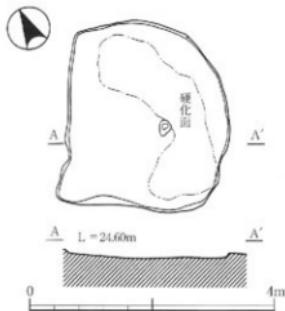
L13～14グリッドに位置し、主軸はN-15°-Wを示す。11号住居跡と重複しており、新旧関係は本造構が古い。平面形は長方形を呈し、規模は長軸4.80m、短軸4.30m、深さ0.30m、床面積約20.60m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ライン上に位置する。主柱は4本（P1～4）で、出入り口ピット（P5）が南壁中央から内寸で50cmの位置に検出された。周溝は11号住居跡に切り込まれた箇所を除き確認されている。遺物は須恵器壺・皿、鎌が出土している。



第28図 9号住居跡・出土遺物

表18 9号住居跡出土遺物観察表

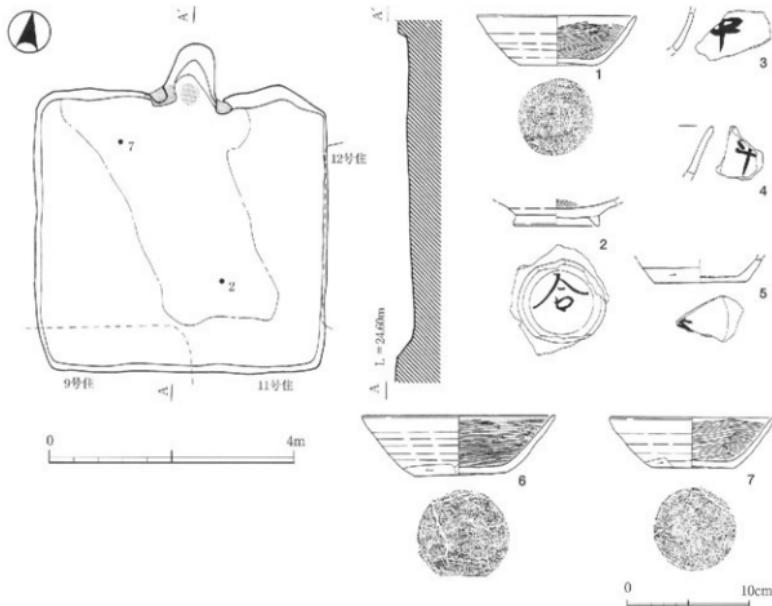
番号	種類 器	地 盤 レベ ル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 环	床	口 13.6 底 7.8 高 4.2	外面 体部輪縫整形、下位横位施削り、底部同軸施切り後手持ち施削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③還元焰	完形。
2	須恵器 环	覆土	口 13.3 底 7.4 高 5.0	外面 体部輪縫整形、下位横位施削り、底部同軸施切り後手持ち施削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒多 ②灰色 ③還元焰	1/8欠損。
3	須恵器 盤	覆土	口 15.2 底 10.1 高 3.8	外面 体部輪縫整形、底部右同軸施削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒、雜 ②灰色 ③還元焰	2/3残存。
4	須恵器 环		口 - 底(6.7)	外面 体部輪縫整形、底部手持ち施削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、黒色粒、雲母 ②灰色 ③還元焰	底部1/5残存。 底部外面に墨書き。
5	須恵器 环		口 - 底(8.0)	外面 体部輪縫整形、下位横位施削り、底部手持ち施削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③還元焰	底部1/4残存。 底部外面に墨書き。
6	須恵器 碗		口 - 底(9.2)	外面 体部輪縫整形、底部右同軸施削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒、雜 ②灰色 ③還元焰	底部1/4残存。 底部外面に墨書き。
7	鉄製品 錠	覆土	残存長13.2cm、幅2.8cm、厚さ0.3cm。			



第29図 10号住居跡

11号住居跡 (第30図 表19-77 図版19-27)

M13・N14グリッドに位置し、主軸はN-15°-Wを示す。9号住居跡と重複しており、新旧関係は未達構が新しい。平面形は方形を呈し、規模は長軸4.75m、短軸4.55m、深さ0.20m、床面積約21.60m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ライン上に位置する。主柱穴及び周溝は確認されない。遺物は土師器壺が出土している。



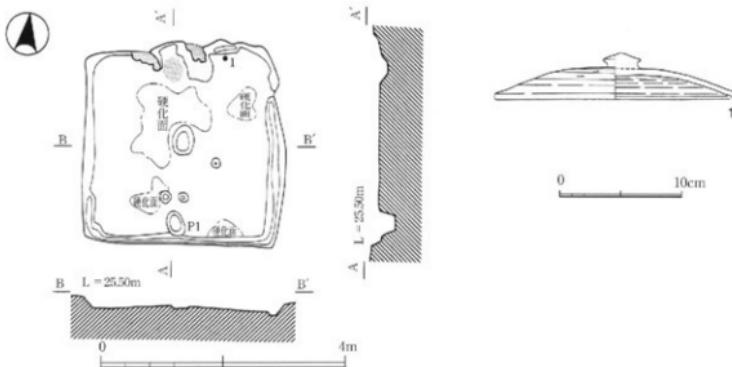
第30図 11号住居跡・出土遺物

表19 11号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器 器	出 土 レベ ル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土器 环	カマド 底面	口 13.0 底 6.2 高 4.2	外面 体部楕円形、底部石回転系切り 後、周辺部手持ち窪削り。 内面 斜傾位窪削き。	①細砂粒、白色粒 ②橙色 ③酸化焰	完形。内面に赤 色塗彩。
2	黑色土器 环		口 6.8 底 6.8 高 4.2	外面 体部楕円形、底部石回転系切り。 内面 体部斜傾位窪削き。	①細砂粒、白色粒 ②橙色 ③酸化焰	底部残存。底部 外面上に墨書 「合」。
3	黑色土器 环		口 一 底 一 高 一	外面 体部楕円形。 内面 体部横位窪削後黒色処理。	①細砂粒、白色粒 ②橙色 ③酸化焰	破片。外面に 「中」の墨書。
4	黑色土器 环		口 一 底 一 高 一	外面 体部楕円形。 内面 体部楕円形。	①細砂粒、白色粒 ②橙色 ③酸化焰	破片。体部外面 に墨書。 「中」？
5	須恵器 环		口 7.7 底 7.7 高 4.9	外面 体部楕円形後、下位横位窪削り、 底部回転系切り後手持ち窪削り。 内面 体部楕円形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③墨元端	破片。底部外面 に墨書。
6	黑色土器 环	カマド 底面	口 15.9 底 7.4 高 4.9	外面 体部楕円形、下位横位窪削り、 底部右側系切り後周辺部手持ち窪削り。 内面 体部横位窪削後黒色処理。	①細砂粒、白色粒 ②橙色 ③酸化焰	1/5欠損。
7	黑色土器 环		口 13.4 底 6.8 高 4.2	外面 体部楕円形。下位横位窪削り、 底部右側系切り後周辺部手持ち窪削り。 内面 体部横位窪削。	①細砂粒、白色粒 ②橙色 ③酸化焰	1/3残存。

12号住居跡（第31図 表20-77 図版6-19）

M・N13グリッドに位置し、主軸はN-15°-Wを示す。平面形は方形を呈し、規模は長軸2.95m、短軸2.85m、深さ0.25m、床面積約8.40m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから約20cm内寄りに位置する。主柱穴は無く、周溝は東壁と南壁を巡り、南壁中央に近接した位置に出入り口ピット（P1）が確認されている。遺物は須恵器蓋が出土している。



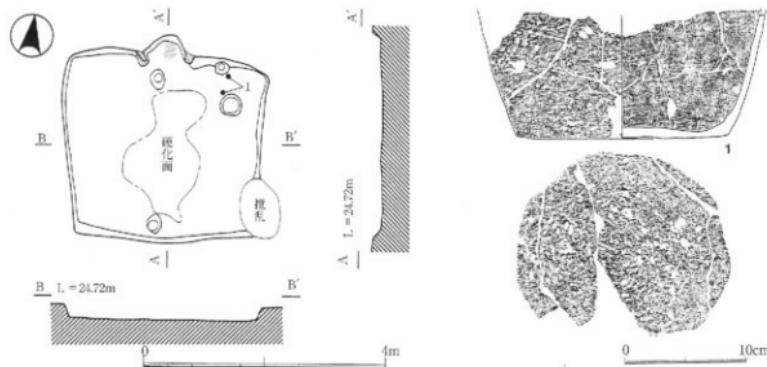
第31図 12号住居跡・出土遺物

表20 12号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器 器	出 土 レベ ル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	覆土 上	口 19.8 紐 3.1 高 3.8	外面 体部楕円形、天井部右回転窪削 り。 内面 体部楕円形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③墨元端	2/3残存。

13号住居跡（第32図 表21-77 図版7-20）

H・1グリッドに位置し、主軸はN-14°-Wを示す。平面形は略方形を呈し、規模は長軸3.05m、短軸2.95m、深さ0.22m、床面積約8.99m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから外寄りに位置する。主柱穴及び周溝は無く、南壁中央から内寸で15cmの位置に出入り口ピット（P1）が確認された。遺物は須恵器壺が出土している。



第32図 13号住居跡・出土遺物

表21 13号住居跡出土遺物観察表

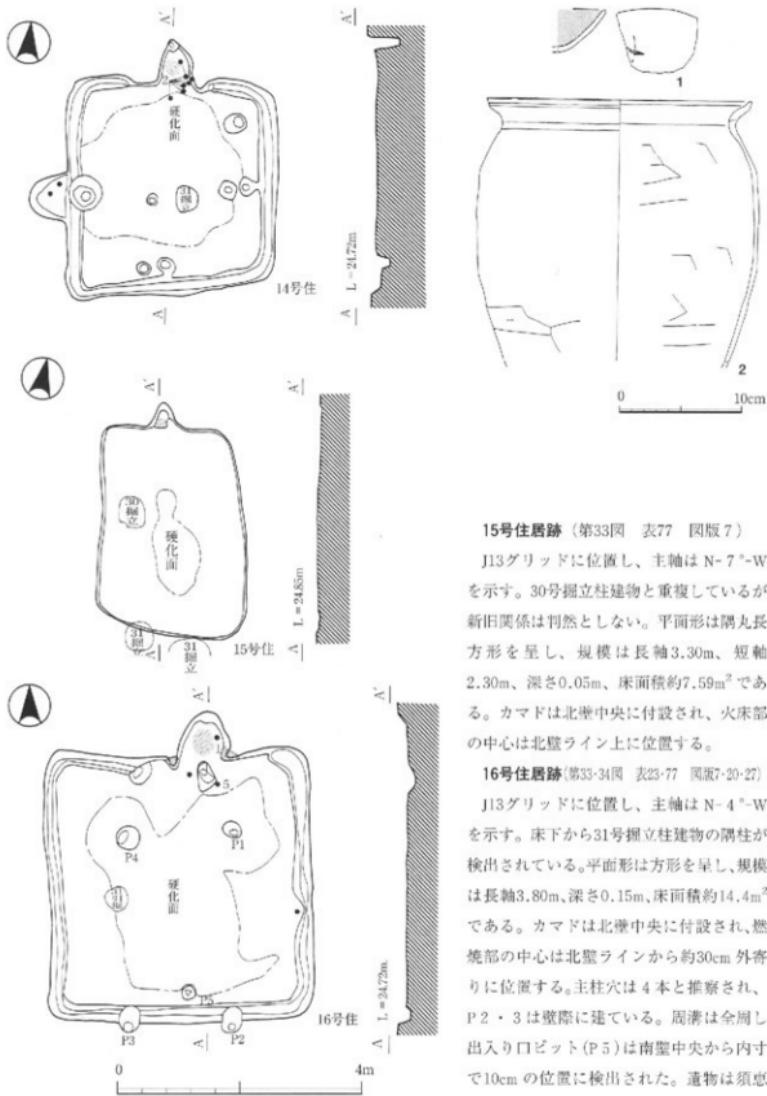
番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・彫形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
I	須恵器 壺	口 - 底 17.2 高 -		外面 前部中位格子彫き、下位窓削り。 内面 前部横位窓削り。	①細砂粒、白色粒、石英 ②灰～黄褐色 ③焼成気味	前部下位～底部 4/5残存。

14号住居跡（第33図 表22-77 図版7-20-27）

H13グリッドに位置し、主軸はN-12°-Wを示す。31号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形は方形を呈し、規模は長軸3.25m、短軸2.95m、深さ0.23m、床面積約9.58m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから外寄りに位置する。床面上から検出された複数基の柱穴状のピットの内、P1は梯子柱穴と考えられるが、他は当造構を切り込んでいる。主柱穴は無く、周溝は全周している。遺物は土師器壺・壺が出土している。

表22 14号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・彫形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 壺	口 - 底 - 高 -		外面 純整形。 内面 突起き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒 ②にぶい褐色 ③焼成	破片。外面に墨書き。
2	土師器 壺	カマド 覆土	口(21.6) 底 - 高 -	外面 口縁部横撫で、胴部上半撫で、中位横位窓削り。 内面 口縁部横撫で、胴部横位窓削り。	①細砂粒、白色粒、黃母 ②褐色 ③普通	口～胴部中位 1/3残存。



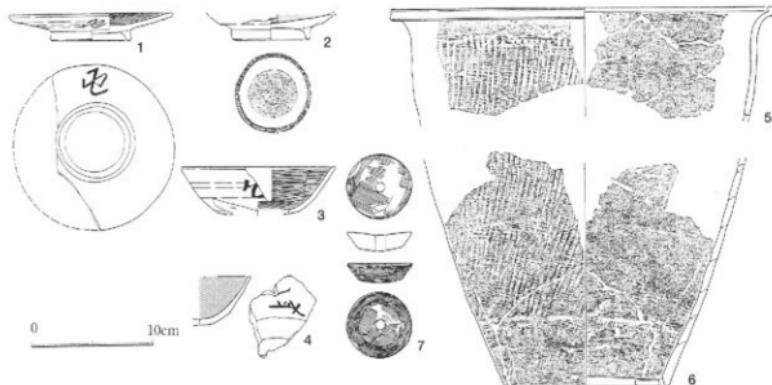
第33図 14号住居跡、出土遺物、15・16号住居跡

15号住居跡 (第33図 表77 図版7)

J13グリッドに位置し、主軸は N-7°-W を示す。30号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.30m、短軸2.30m、深さ0.05m、床面積約7.59m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ライン上に位置する。

16号住居跡 (第33-34図 表25-77 図版7-20-27)

J13グリッドに位置し、主軸は N-4°-W を示す。床下から31号掘立柱建物の隅柱が検出されている。平面形は方形を呈し、規模は長軸3.80m、深さ0.15m、床面積約14.4m²である。カマドは北壁中央に付設され、燃焼部の中心は北壁ラインから約30cm 外寄りに位置する。主柱穴は4本と推察され、P2・3は壁際に建っている。周溝は全周し、出入り口ピット(P5)は南壁中央から内寸で10cm の位置に検出された。遺物は須恵器、土師器壺・皿が出土している。



第34図 16号住居跡出土遺物

表23 16号住居跡出土遺物観察表

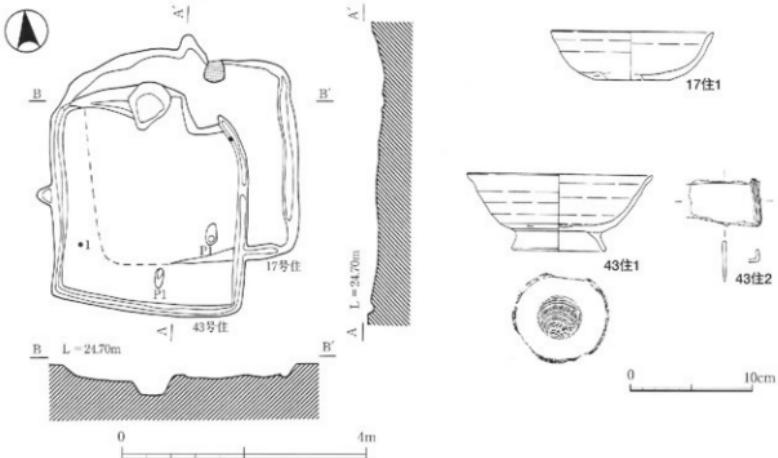
番号	種類 器 皿	出 土 レ ベ ル	計 画 寸 寸 寸	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色薗 ③焼成 ④細砂粒、海綿骨針 ⑤焼色 ⑥酸化焰 ⑦粗砂粒、白色粒、雲母 ⑧黄褐色 ⑨酸化焰	残存状態 備 考
1	土師器 皿	口 底 高	13.4 6.4 2.2	外面 体部鍛錆整形、底部回転削り。 内面 体部斜傾化焼成後黒色處理。	①細砂粒、海綿骨針 ②焼色 ③酸化焰	2/3残存。外面に「記」の墨書き。
2	土師器 椀	口 底 高	— — —	外面 体部鍛錆整形、底部回転削り。 内面 体部先端3段後黒色處理。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②黄褐色 ③酸化焰	底部残存。外面に墨書き。
3	土師器 环	口 底 高	12.6 — —	外面 体部鍛錆整形後、下位横立施削り、 底部手持ち施削り。 内面 体部焼成後黒色處理。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②黄褐色 ③酸化焰	1/2残存。外面に「記」の墨書き。
4	土師器 环	口 底 高	— — —	外面 体部鍛錆整形後、下位横立施削り、 底部先端3段後黒色處理。 内面 体部焼成後黒色處理。	①細砂粒、白色粒 ②灰質褐色 ③酸化焰	破片。外面に「記」の墨書き。
5	須恵器 瓶	口 底 高	(31.6) — —	外面 口縁部施削り、剥離空子印き。 内面 口縁部施削り、剥離空子印き。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰褐色 ③酸化焰	口縁部1/5残存。
6	須恵器 瓶	口 底 高	— — 13.4	外面 前部中位格子印き、下位窓削り。 内面 前部横位格子印き。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰一暗灰色 ③酸化焰	前部中位-底部1/3残存。
7	土製品 紡錘草	—	直径5.4cm、下径3.5cm、厚さ1.3cm、全面施磨。	①細砂粒、白・黒色粒 ②はげ完形。 ③にぶい黄褐色④普通	はげ完形。	

17号住居跡 (第35図 表24-77 図版16-20)

J14グリッドに位置し、主軸はN-8°-Wを示す。43号住居跡に切り込まれ、北壁と東壁を除き消滅し、平面形及び規模は不明瞭である。カマドは北壁中央に付設されている。主柱穴は無く、周溝は東壁と南壁の一部に巡り、出入り口ピット(P1)は南壁中央から内寸で20cmの位置に検出された。遺物は須恵器環が出土している。

43号住居跡 (第35図 表25-78 図版16-25)

J14グリッドに位置し、主軸はN-2°-Wを示す。17号住居跡と重複しており、新旧関係は本遺構が新しい。平面形は略方形を呈し、規模は長軸2.95m、短軸2.85m、深さ0.15m、床面積約8.40m²である。カマドは北壁中央の東寄りに付設されているが、攪乱により大半が消滅している。主柱穴は無く、周溝は北壁を除いて巡る。出入り口ピット(P1)は南壁中央から内寸で25cmの位置に検出された。遺物は土師器椀、鎌が出土している。



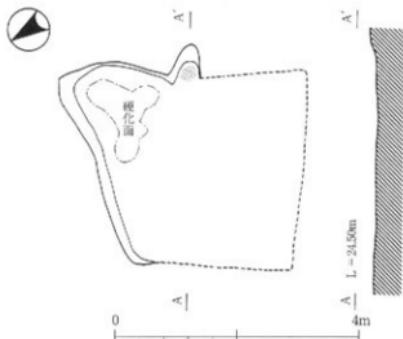
第35図 17・43号住居跡・出土遺物

表24 17号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 基盤 構造	出士 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①土色 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 環	床	口(13.4) 底 6.0 高 4.0	外面 体部楕円整形後、下位横位施削り、 底部手持ち施削り。 内面 体部無縫整形。	①細砂粒、白色粒、雲母、褐色 ②褐色 ③焼化粧	1/6残存。

表25 43号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 基盤 構造	出士 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①土色 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 碗	床	口(15.2) 底 7.6 高 6.3	外面 体部楕円整形後、下位右回転施削り、 底部右回転系切り後周辺部高凸貼付 時回転施削。 内面 体部無縫整形。	①細砂粒 ②褐色 ③焼化粧	1/3残存。
2	鉄製品 鎌		長さ(6.5)cm、幅3.7cm、厚さ0.4cm			



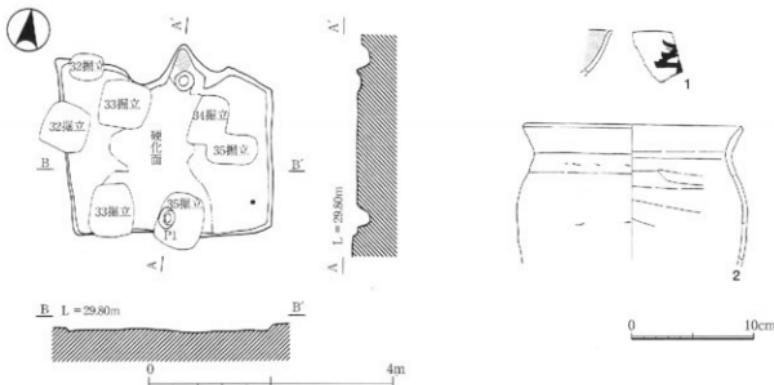
18号住居跡 (第36図 表27 図版7)

M10・11グリッドに位置し、主軸は N-118°-E を示す。大きな削平を受けており、全体の平面プラン及び規模は不明瞭であるが、遺存する僅かな壁高や床面と地山の色調差から、平面プランは台形状と推察される。カマドは東壁中央に付設され、火床部の中心は東壁ライン上から外寄りに位置する。主柱穴と周溝は無い。

第36図 18号住居跡

19号住居跡（第37図 表26-77 図版20-27）

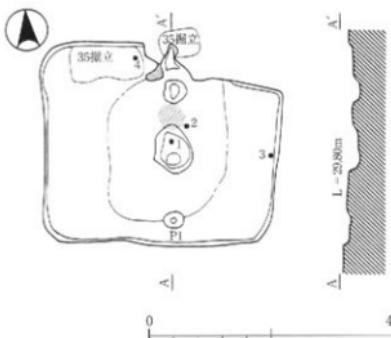
H・H2グリッドに位置し、主軸はN=14°-Wを示す。32～35号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は本遺構が新しい。平面形は長方形を呈し、規模は長軸3.30m、短軸2.55m、深さ0.18m、床面積約8.41m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから外寄りに位置する。主柱穴及び周溝は無く、南壁中央に出入り口ピットP1が近接して検出された。遺物は土師器壺、甕が出土している。



第37図 19号住居跡・出土遺物

表26 19号住居跡出土遺物観察表

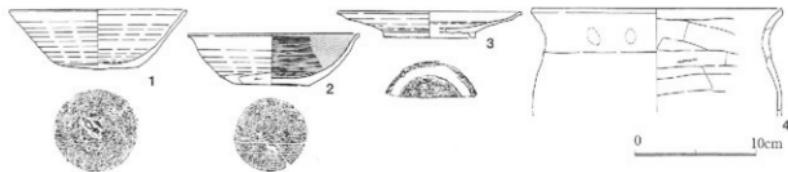
番号	種類 種類	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①粘土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 壺	口 底 高	- - -	外面 体部輪廻整形。 内面 体部磨き後黒色処理。	①繊維粒、白色粒 ②黄褐色 ③酸化塗	体部破片。 外面に墨書き。
2	土師器 甕	床	口 17.6 底 - 高 -	外面 口縁部横塗で、胴部横位撫で。 内面 口縁部横塗で、胴部横位荒撫で。	①繊維粒、白色粒 ②橙色 ③普通	口～胴部中位 3/4残存。



第38図 20号住居跡

20号住居跡（第38-39図 表27-77 図版7-20）

H2グリッドに位置し、主軸はN=2°-Eを示す。35号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は本遺構が新しい。同掘立柱建物と重複しているカマドの西側壁は、カマドの東側壁に比して約0.55m張り出しており、楕円状施設と推察される。平面形は長方形を呈し、規模は長軸3.70m、短軸2.45m、深さ0.12m、床面積約9.06m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ライン上からやや内寄りに位置する。主柱穴及び周溝は無く、南壁中央から内寸で20cmの位置に出入り口ピット(P1)が検出された。遺物は須恵器壺、土師器壺、灰釉陶器皿が出土している。



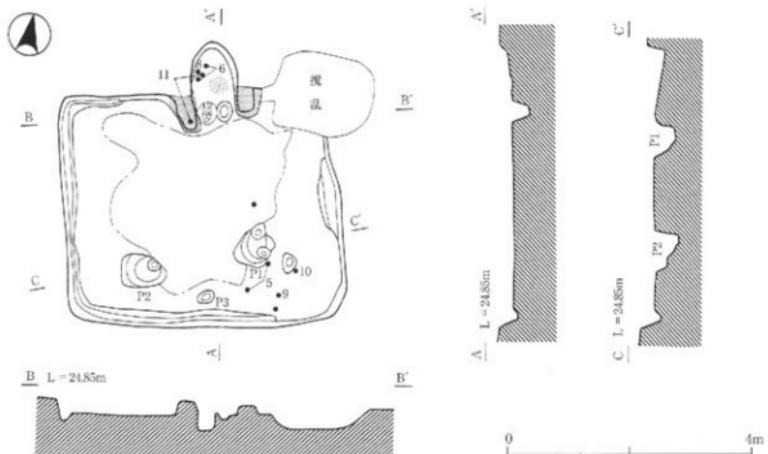
第39図 20号住居跡出土遺物

表27 20号住居跡出土遺物観察表

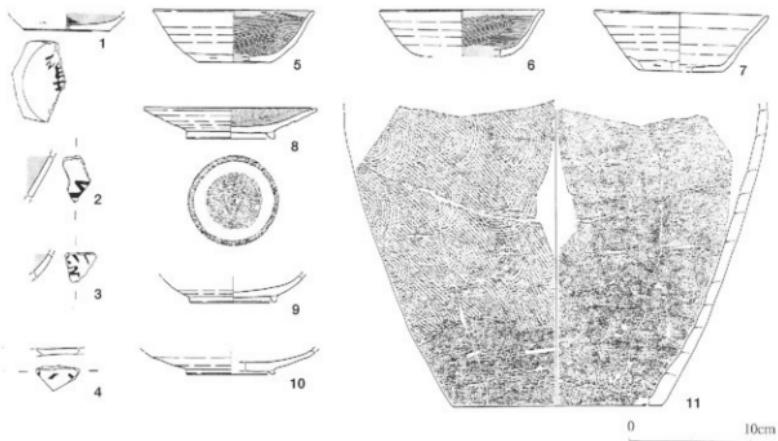
番号	種類 名	出 土 レ ベル	計 測 値 (cm)	成・整形技術の特徴	①輪上 ②色調 ③焼成	残存状態 考
1	須恵器 环	口(14.4) 底 7.5 高 5.0	外面 体部橢円整形、底部回転切り後 周辺手持ち造削り。 内面 体部橢円整形。	①織砂粒、雲母 ②にぶい黄橙-黒色 ③酸化窓	1/2残存。	
2	土師器 环	口 14.2 底 6.0 高 4.2	外面 体部橢円整形後、下位横位施前り、 底部一方手持ち造削り。 内面 体部橢円整形後黒色處理。	①織砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい橙色 ③酸化窓	1/3残存。	
3	灰釉陶器 碗	口(14.8) 底(7.4) 高 2.2	外面 体部橢円整形、底部回転切り。 内面 体部橢円整形。	①白、無色粒 ②灰白-オリーブ灰色 ③酸化窓	1/3残存。内外 面刷毛塗り施 加。	
4	土師器 碗	口(20.4) 底 一 高 一	外面 口縁部横擦で、胴部擦で。 内面 口縁部横擦で、胴部擦後無擦で。	①織砂粒、白色粒、雲母 ②無色 ③普通	□-胴部上位 1/3残存。	

21号住居跡 (第40・41図 表28-77 図版8-20-28)

L12グリッドに位置し、主軸はN-12°-Wを示す。12号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は本遺構が新しい。東壁は搅乱坑によって消滅している。平面形は長方形を呈し、規模は長軸4.10m、短軸3.35m、深さ0.25m、床面積約13.73m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ライン上から外寄りに位置する。柱穴は南壁側に2本(P1・2)確認されているが、2本主柱か否かは判然としない。周溝は西壁と東壁に巡り、南壁中央から内寸で12cmの位置に出入り口ピット(P3)が検出された。遺物は須恵器環・甕、土師器環・皿、灰釉陶器碗・皿が出土している。



第40図 21号住居跡



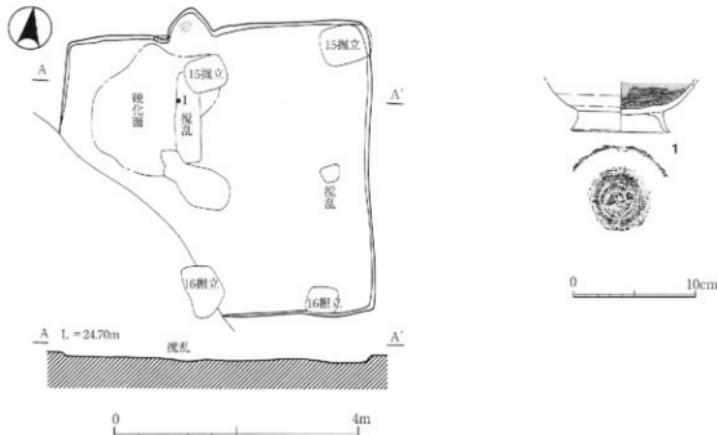
第41図 21号住居跡出土遺物

表28 21号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 土器 等	出士 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土器 等	口 底 高	一 (7.0) —	外面 体部機械整形後、下位横位窓削り、 底部手持ち窓削り。 内面 体部斜削位窓削き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒 ②にい褐色 ③酸化焰	底部破片。外面 に墨書き。
2	土器 等	口 底 高	— — —	外面 体部機械整形。 内面 体部旋削さ後黒色処理。	①細砂粒、白色粒 ②にい褐色 ③酸化焰	体部破片。外面 に墨書き。
3	土器 等	口 底 高	— — —	外面 体部機械整形。 内面 体部旋削さ後黒色処理。	①細砂粒、白・黒色粒 ②橙色 ③酸化焰	体部破片。外面 に墨書き。
4	土器 等	口 底 高	— — —	外面 武部窓削り。 内面 窓削き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒 ②にい褐色 ③酸化焰	底部破片。外面 に墨書き。
5	土器 等	口 底 高	13.1 5.8 4.3	外屋 体部機械整形後、下位横位窓削り、 底部手持ち窓削り。 内面 体部斜削位窓削き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②橙色 ③酸化焰	3/4残存。
6	土器 等	カマド 覆土	13.4	外屋 体部機械整形。 内面 体部斜削位窓削き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にい褐色 ③酸化焰	底部欠損。
7	須恵器 等	口 底 高	14.2 6.8 4.8	外屋 体部機械整形後、下位横位窓削り、 底部手持ち窓削り。 内面 体部機械整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②深 ③黒色 ④酸化焰	1/2残存。
8	土器 等	カマド 覆土	(14.0)	外屋 体部機械整形、底部右回転窓削り。 内面 体部斜削位窓削き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒 ②にい褐色 ③酸化焰	1/2残存。
9	灰釉陶器 椀	覆土	7.2 2.5	外屋 体部機械整形、底部回転窓削り。 内面 体部窓削形。	①黑色粒 ②灰白～オリーブ灰色 ③慶元窓	体部下位～底部 1/4残存。 内面残存。
10	灰釉陶器 皿	覆土	(6.8) 14.0	外屋 体部機械整形、底部回転窓削り。 内面 体部窓削形。	①黑色粒 ②にい黄褐色 ③慶元窓	体部下位～底部 1/4残存。 内面残存。
11	須恵器 甕	カマド 袖内	— (17.0) —	外屋 制型中位平行印記、下位窓削り。 内面 制型横位窓削り。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰～灰黃色 ③慶元窓	制型1/4残存。

22号住居跡（第42図 表29-77 図版8-20）

L11グリッドに位置し、主軸はN-8°-Wを示す。15・16号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は未確定が新しい。平面形は方形を呈し、規模は長軸5.05m、短軸4.95m、深さ0.05m、床面積約25.99m²である。カマドは北壁中央西寄りに付設され、火床部の中心は北壁ラインから外寄りに位置する。主柱穴及び周溝は確認されない。遺物は土師器碗が出土している。



第42図 22号住居跡・出土遺物

表29 22号住居跡出土遺物観察表

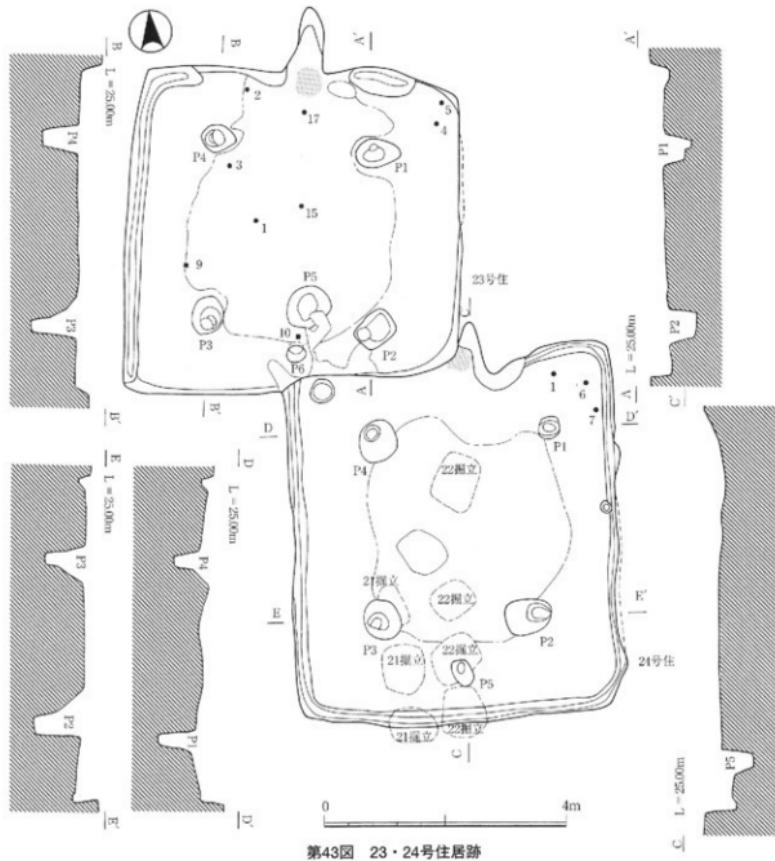
番号	種類 器 械	出 土 レ ベル	計測値 (cm)	成・変形技法の特徴	①土 ②色 調	残存状態 備 考
					③透 底	
1	土師器 壺	口一 底(8.0) 高一	外部 内部	体部楕円整形、底部回転施切り。 体部斜横位施磨き後黒色処理。	①新砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい褐色 ③液化粧	体部下位～底部 2/3残存。

23号住居跡（第43-44-45図 表30-77 図版8-20-28）

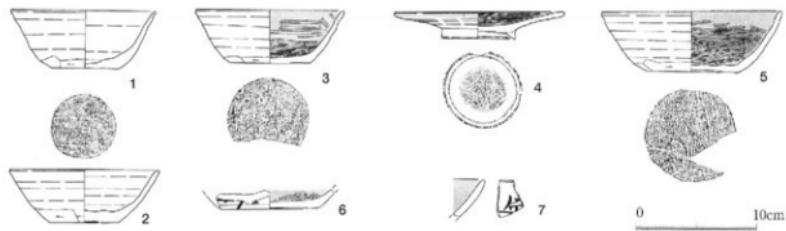
J9グリッドに位置し、主軸はN-4°-Eを示す。24号住居跡の北西壁を切り込んで構築している。平面形は方形を呈し、規模は長軸5.15m、短軸5.05m、深さ0.33m、床面積約26.00m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ライン上から約20cm内側に位置し、煙道は0.95mと長い。主柱は4本(P1～4)で、P3とP4の間に支柱(P5)を持つ。出入り口ピットP6は南壁中央に近接して検出されており、その周辺にはカマドの構材と考えられる山砂が置かれていた。周溝は西壁と北壁の一部に巡る。遺物は須恵器蓋、土師器壺・皿、古鏡、馬具等が出土している。

24号住居跡（第43-46図 表31-77 図版8-21）

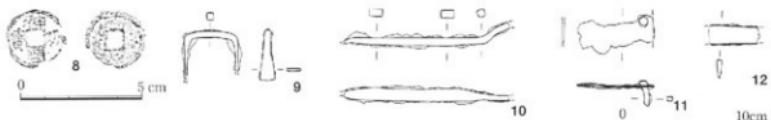
J・K9・10グリッドに位置し、主軸はN-1°-Wを示す。カマド中央以西の北壁は23号住居跡に切り込まれて消滅し、床下から21・22号掘立柱建物が検出されている。平面形は長方形を呈し、規模は長軸5.55m、短軸4.95m、深さ0.35m、床面積約27.47m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ライン上に位置する。主柱は4本(P1～4)で、南壁中央から内寸で35cmの位置に出入り口ピット(P5)が検出された。周溝は周囲している。遺物は須恵器蓋・环・皿、土師器壺が出土した。



第43図 23・24号住居跡



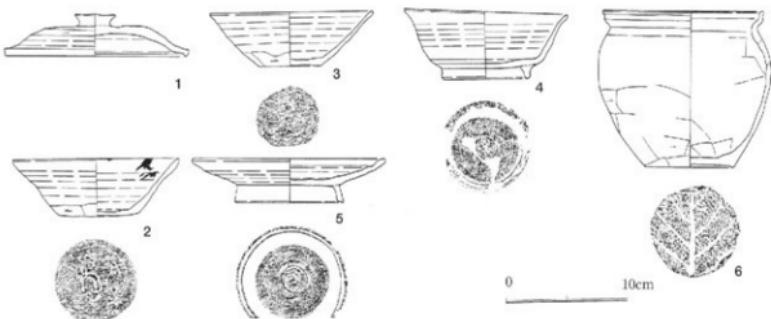
第44図 23号住居跡出土遺物(1)



第45図 23号住居跡出土遺物(2)

表30 23号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 類型	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①土色 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 环		口 11.8 底 5.4 高 4.8	外面 体部輪縁整形、下位横位施削り、 底部一方手持ち施削り。 内面 体部斜稜整形。	①細砂粒、白色粒 ②褐色 ③酸化焰	1/2残存。
2	須恵器 环	覆土	口 12.0 底 5.6 高 4.4	外面 体部輪縁整形後下位横位施削り、 底部一方手持ち施削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰一灰白色 ③還元焰	1/2残存。底部 器脚剥離。
3	土器器 环	覆土	口 12.2 底 6.6 高 4.4	外面 体部輪縁整形、下位横位施削り、 底部一方手持ち施削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、薄 ②褐色 ③酸化焰	1/2残存。
4	土器器 皿	覆土	口 14.0 底 6.0 高 2.2	外面 体部輪縁整形、底部手持ち施削り。 内面 体部斜位施削き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、石 英、長石 ②褐色 ③酸化焰	4/5残存。
5	土器器 环	覆土	口 14.8 底 7.5 高 5.0	外面 体部輪縁整形後下位横位施削り、 底部右回転系切り後一方手持ち施削り。 内面 体部斜位施削き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②褐色 ③酸化焰	4/5残存。
6	土器器 环		口 - 底(4.0) 高 -	外面 体部輪縁整形後、下位横位施削り、 底部右回転系切り後一方手持ち施削り。 内面 体部斜位施削き後黒色処理。	①細砂粒、雲母 ②褐色 ③酸化焰	底部1/4残存。 外壁に墨書き。
7	土器器 环		口 - 底 - 高 -	外面 体部輪縁整形後、下位横位施削り。 内面 体部斜位施削き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②褐色 ③酸化焰	体部破片。外壁 に「漆」の墨書き。
8	古鏡 神功開寶 銘鉄製品 馬具	床	直径2.5cm、厚さ0.15cm。			765年初鑄。
9	鉄製品 不明		幅4.4cm、厚さ0.6cm、鋸に付く鉄具。			
10	鉄製品	覆土	長さ(13.6)cm、幅1.1cm、厚さ0.7cm、両端部欠損。			
11	鉄製品 不明		長さ(6.2)cm、幅(1.9)cm、厚さ0.2cm、一ヶ所に錆が残存する。			
12	鉄製品 刀子		残存長4.3cm、幅(1.6)cm、厚さ0.4cm、刀部の一部。			



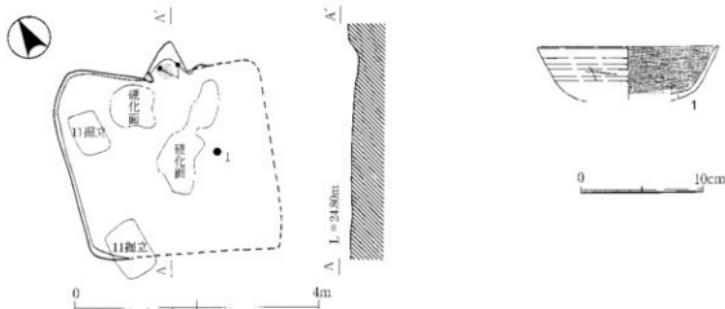
第46図 24号住居跡出土遺物

表31 24号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	出士 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成		残存状態 備考
					外面	内面	
1	須恵器 壺	床	口 14.8 鉄 3.4 高 3.5	外面 体部輪縫整形、大井部右回転施削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒、繩 ②灰色 ③還元焰		完形。
2	須恵器 壺		口 13.6 底 6.8 高 4.8	外面 体部輪縫整形後、下位横位施削り、 底部右回転施削り後手持ち箆削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③還元焰		口縁一部欠損、内面油煙付着。
3	須恵器 壺	床	口 13.6 底 5.0 高 4.4	外面 体部輪縫整形後、下位横位施削り、 底部右回転施削り後手持ち箆削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰		2/3残存。
4	須恵器 高台壺	覆土	口 13.4 底(7.0) 高 5.4	外面 体部輪縫整形後、下位横位施削り、 底部右回転施削り後手持ち箆削り、高台點付 時四軸撤し。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒 ②暗灰黄色 ③酸化氣味		3/4残存。
5	須恵器 壺		口 15.8 底 8.8 高 3.6	外面 体部輪縫整形、底部右回転施削り 後右同輪削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒、雲母、繩 ②黑色 ③還元焰		3/4残存。
6	土器部 小形壺	覆土	口(13.0) 底 7.2 高 13.9	外面 口縁部横削で、胴部上半撫で、下 半横位施削り。 内面 口縁部横削で、胴部横位施削で。	①細砂粒、白色粒 ②橙一黒色 ③普遍		1/2残存。

25号住居跡 (第47図 表32-77 図版9-21)

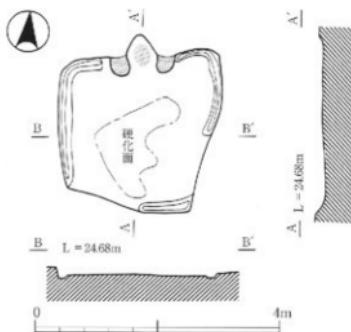
L13グリッドに位置し、主軸はN-5°-Eを示す。11号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は本遺構が新しい。南壁と東壁は削平されているが、床面は平うじて遺存している。平面形は略方形を呈し、規模は長軸3.25m、短軸2.95m、深さ0.03m、床面積約9.58m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから外寄りに位置する。主柱穴及び周溝は無い。遺物は土器器壺が出土している。



第47図 25号住居跡・出土遺物

表32 25号住居跡出土遺物観察表

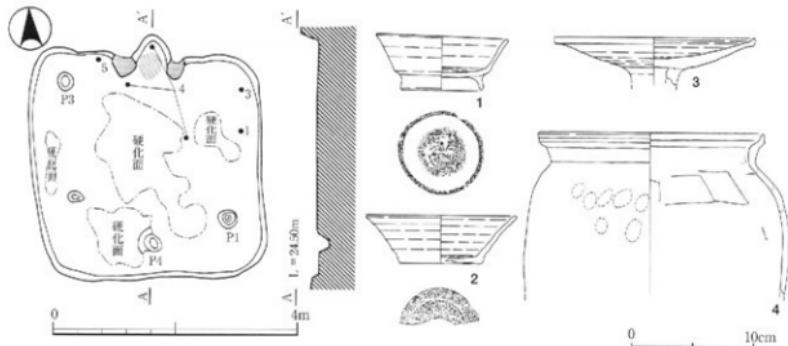
番号	種類 器種	出士 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成		残存状態 備考
					外面	内面	
1	黑色土器 壺	床	口(14.8) 底 高	外面 体部輪縫整形。外面に焼成前の線 制 内面 体部横位施削後墨色処理。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②橙色 ③酸化焰		口一部部1/2残存。



第48図 26号住居跡

27号住居跡 (第49図 表33-77 図版9-21)

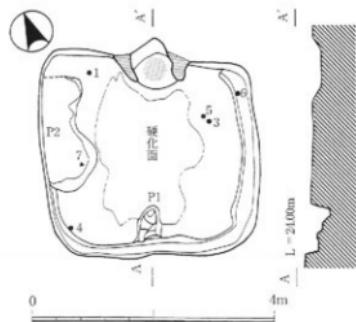
O・P9グリッドに位置し、主軸はN-3°-Wを示す。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸3.65m、短軸3.47m、深さ0.13m、床面積約12.66m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ライン上に位置する。柱穴は3基(P1～3)確認されているが、本来は4本柱であったと思われる。周溝はなく、南壁中央から内寸で35cmの位置に入り口ピット(P4)が検出された。遺物は須恵器壺・碗・皿、土師器甕が出土している。



第49図 27号住居跡・出土遺物

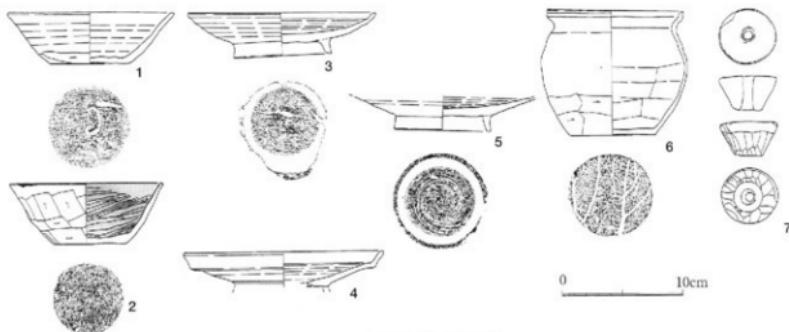
表33 27号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器 種 別 レベル	出土 位置	計測値 (cm)	成形技術の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成 ④細砂粒、白色粒、雲母、石片 ⑤灰黄～灰色 ⑥炭化層	残存状態 考
1	須恵器 高台壺	覆土	口 10.8 底 6.4 高 4.6	外面 体部輪廻整形、底部石回転窓削り。 内部 体部輪廻整形。	①細砂粒、白色粒、雲母、石片 ②灰黄～灰色 ③炭化層	4/5残存。
2	須恵器 壺	覆土	口(12.4) 底(6.6) 高(4.0)	外面 体部輪廻整形、底部石回転窓削り。 内部 体部輪廻整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③炭化層	1/4残存。
3	須恵器 高環 壺	覆土	口 16.4 底 一 高 一	外面 体部輪廻整形。 内部 体部輪廻整形。	①細砂粒、白色粒多、石片 ②灰色 ③炭化層	环部残存。
4	土師器 甕	カマド 覆土	口(18.4) 底 一 高 一	外面 口縁部横削で、胴部削で。 内部 口縁部横削で、胴部横位窓削で。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②褐色 ③普通	口～胴部中位 1/2残存。



28号住居跡（第50図 表34・77 図版10・21）

P6グリッドに位置し、主軸はN-6°-Eを示す。西壁に接して略長方形平面の土坑（P2）が検出されている。平面形は方形を呈し、規模は長軸3.10m、短軸2.95m、深さ0.12m、床面積約9.14m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから内寄りに位置する。主柱穴は無く、南壁中央に近接して出入口ピット（P1）が検出された。周溝は北壁及びP2を除いて巡る。遺物は須恵器壊・盤、土師器壊・甕が出土している。



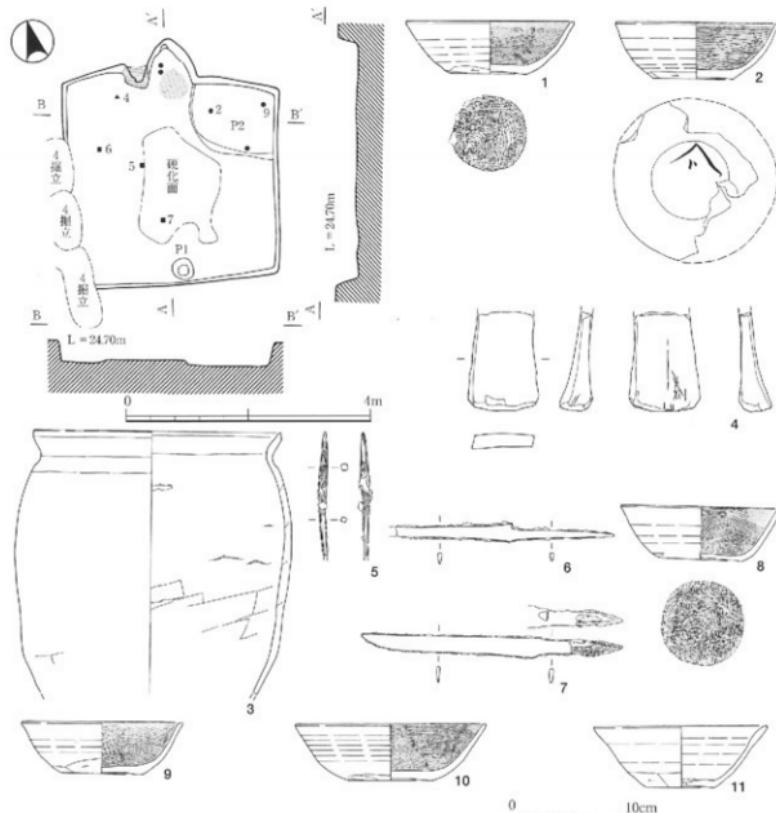
第50図 28号住居跡・出土遺物

表34 28号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器 類	出 土 レ ベル 床	計測値	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 信 考
1	須恵器 壊	床	口13.6 底6.4 高4.3	外面 体部縦横整形後下位横位窓削り、 底部右回転窓切り後一方向手持ち窓削り。 内面 体部縦横整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい黄褐色 ③通常	口縁部1/4残存。
2	土器器 壊	床	口12.6 底5.8 高5.1	外面 口縫部横削りで、体部下位横位窓削り、 上位縱位窓削り、底部一方向手持ち 窓削り。 内面 口縫部横削りで、体部斜 傾位窓削き後黒色處理。	①細砂粒、白色粒 ②褐色 ③良好	完形。
3	須恵器 壊	覆土	口15.4 底8.0 高3.6	外面 体部縦横整形、底部右回転窓削り。 内面 体部縦横整形。	①細砂粒、白色粒、雲 母、漆 ②黒褐色 ③還元焰	口縁部1/3欠損。
4	須恵器 壊	床	口16.4 底— 高—	外面 体部縦横整形、底部回転窓削り。 内面 体部縦横整形。	①細砂粒、白色粒、雲 母、漆 ②黒褐色 ③還元焰	高台部欠損。
5	須恵器 壊	覆土	口— 底7.8 高—	外面 体部縦横整形、底部右回転窓削り。 内面 体部縦横整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい黄褐色 ③還元焰	口縁部欠損。
6	土器器 小形甕	床	口(11.0) 底7.0 高10.3	外面 口縫部横削りで、胴部上平腹で、下 位横位窓削り。 内面 口縫部横削りで、胴部横位窓削り後 窓削り。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい黄褐色 ③普通	口縁部3/4欠損。 底部に木葉灰。
7	土器品 軽量車		直径4.6cm、孔径2.4cm、厚さ2.8cm。 窓削り後瓦崩き。		②褐色 ③普通	ほぼ完形。

29号住居跡（第51図 表35-77 図版11-21-28）

M7グリッドに位置し、主軸はN-5°-Eを示す。4号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は本遺構が新しい。平面形は方形を呈し、規模は長軸3.35m、短軸3.23m、深さ0.36m、床面積約10.82m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインの内寄りに位置する。カマドの東脇に位置する方形土坑（P2）は、長軸1.44m、短軸1.21m、深さ約0.08mを測り、底面は平坦に整形されている。主柱穴及び周溝は無く、南壁中央に近接して出入り口ピット（P1）が検出された。遺物は土師器壊・甕、刀子・不明鉄製品が出土している。



第51図 29号住居跡・出土遺物

表35 29号住居跡出土遺物観察表(1)

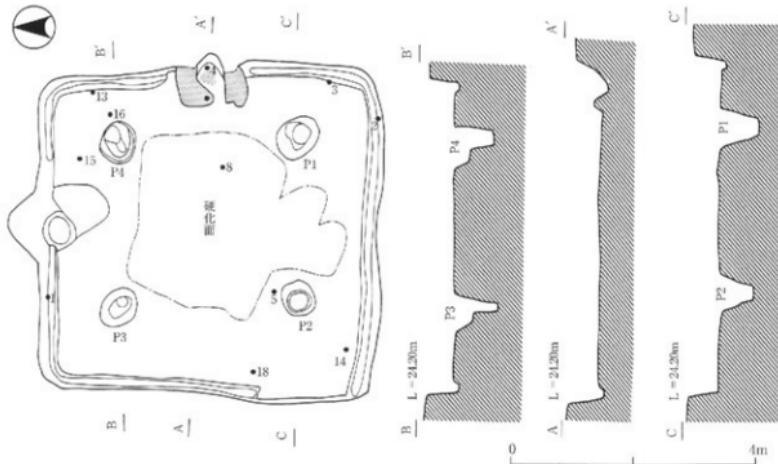
番号	種類 器種 レベル	出土 位置 計画値 (cm)	成・整形技法の特徴	①焼土	②色調	残存状態 備考
				③焼成	④褐色 ・白色粒	
1	土師器 甕	口 13.6 底 6.1 高 4.3	外面 体部總體整形後、下位横位施削り、 底部右側余切り後一方手持ち窓削り。 内部 体部斜削後磨き後黒色処理。	①褐色 ・白色粒 ②口に赤い黄褐色 ③焼成	④褐色 ・白色粒	完形。

表36 29号住居跡出土遺物観察表（2）

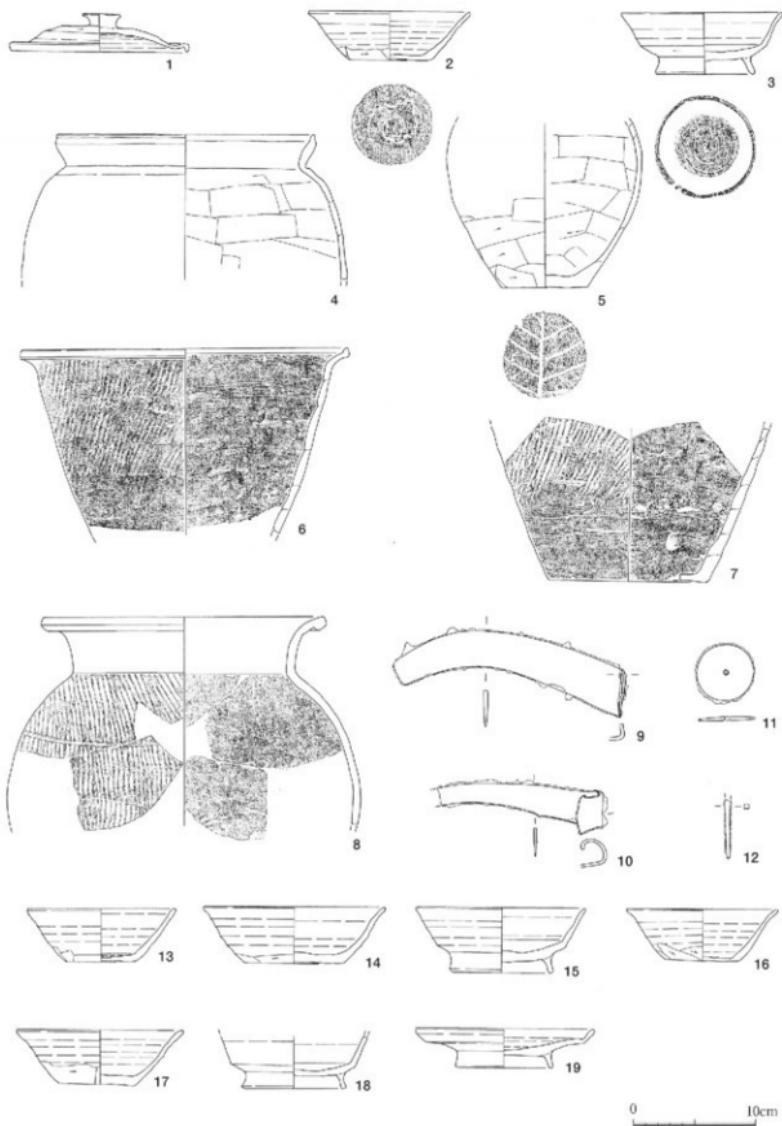
番号	種類 器 具	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色漬 ③焼成	残存状態 備考
2	土師器 壺	覆土	口 13.2 底 6.6 高 4.6	外面 体部陶體整形後、下位横位施削り、 底部手持ち窪削り。 内面 体部横位施削り後黒色処理。	①細沙粒、白色粒 ②明黄褐色 ③焼化焰	1/2残存。底部 外面墨書き。
3	土師器 壺		口(21.2) 底 - 高 -	外面 □縁部横削で、胴部上位から中位 撫で、下位縱位窪削り。 内面 □縁部横削で、胴部横位施削で後 撫で。	①細沙粒、白色粒、雲母 ②橙色 ③油漆	口 → 脱部下位 1/4残存。
4	石製品 砥石		長さ(8.1)cm、最大幅5.8cm、最大厚2.6cm。 4面使用、線条痕あり。			
5	鉄製品 不明	覆土	残存長10.2cm、厚さ0.6cm。木質が残存する。			
6	鉄製品 刀子	覆土	残存長18.1cm、刃部残存長9.6cm、幅0.9cm、厚さ0.35cm。茎部長さ8.5cm、幅 0.7cm、厚さ0.3cm、刀部の先端部を欠く。			
7	鉄製品 刀子	覆土	全長21.7cm、刀部長さ14.3cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm。茎部長さ7.4cm、幅 1.1cm、厚さ0.35cm。茎に木質が残存する。			
8	土師器 壺		口(13.2) 底 6.7 高 4.4	外面 体部陶體整形後、下位横位施削り、 底部右回転糸切り後一方向手持ち窪削り。 内面 体部窪削き後黒色処理。	①細沙粒、白色粒、雲 母 ②橙色～黒色 ③焼化焰	1/2残存。
9	土師器 壺		口(13.2) 底 6.6 高 4.3	外面 体部陶體整形後、下位窪削り、底 部右回転糸切り後一方向窪削り。 内面 体部窪削き後黒色処理。	①細沙粒、白色粒 ②橙色～黒色 ③焼化焰	2/5残存。
10	土師器 壺		口(15.6) 底(6.6) 高 4.6	外面 体部陶體整形後、下位窪削り、底 部手持ち窪削り。 内面 体部窪削き後黒色処理。	①細沙粒、白色粒 ②にぶい褐色～黒色 ③焼化焰	1/2残存。
11	須恵器 壺		口(14.2) 底 5.8 高 5.0	外面 体部陶體整形後、下位横位施削り、 底部一方向窪削り。 内面 体部窪削き後黒色処理。	①細沙粒、白色粒、雲母 ②橙色～黃褐色 ③焼化焰	1/3残存。

30号住居跡（第52・53図 表37-77 図版12-22）

N 6 グリッドに位置し、南北軸は N 4°W を示す。平面形は方形を呈し、規模は長軸5.15m、短軸5.05m、深さ0.38m、床面積約26.00m²である。カマドは北壁中央と東壁中央に確認されているが、同時に機能したものではなく、北カマドの後、東カマドとしている。柱は4本主柱（P1～4）であり、柱擺布は略方形平面を呈する。周溝は西壁の南端を除き周囲する。遺物は須恵器蓋・壺・輪・壺・鉢・土師器甕、鐵製紡錘車・鎌・銅が出土している。



第52図 30号住居跡



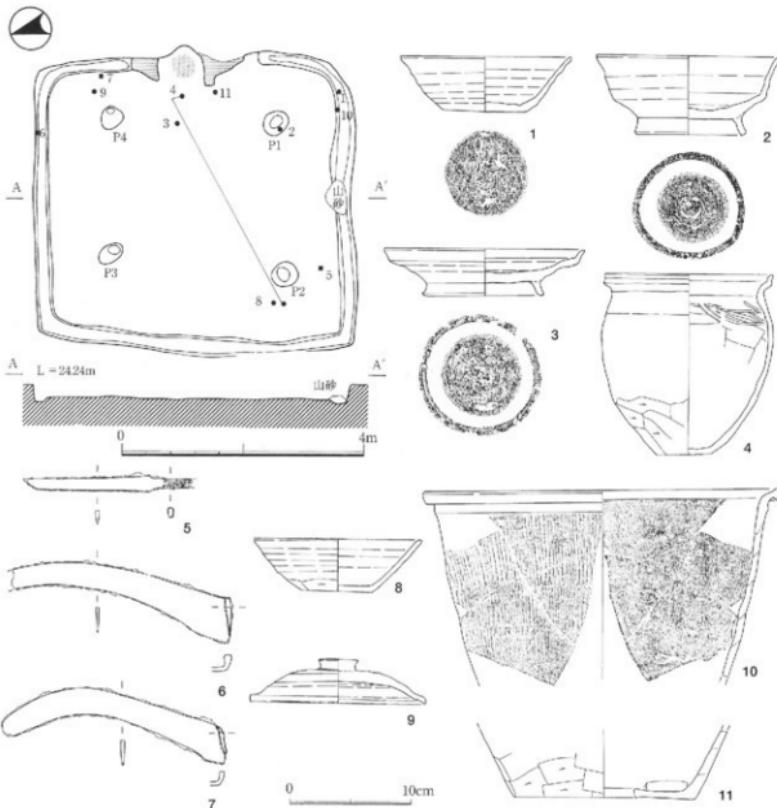
第53図 30号住居跡出土遺物

表37 30号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成 ④細砂粒、白色粒、雲母、礫 ⑤灰色 ⑥還元焰	残存状態 備考
1	須恵器 壺		口 14.5 底 3.2 高 3.1	外面 体部輪縁整形、天井部石同軸施削 り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、雲母、礫 ②灰色 ③還元焰	2/3残存。
2	須恵器 壺		口 13.2 底 6.7 高 4.0	外面 脚部輪縁整形後下位横位施削り、 底部右回転施切り後一方向旋削で。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、雲母、礫 ②灰色 ③還元焰	完形。
3	須恵器 椀		口(13.2) 底 8.0 高 5.1	外囲 体部輪縁整形後下位右回転施削り、 底部右回転施切り後全面回転削で。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、雲母、礫 ②灰色 ③還元焰	3/4残存。
4	土器器 壺		口(20.8) 底 一 高 一	外面 口縁部横削で、脚部削で。 内面 「U」縁部横削で、脚部削が残削で。	①細砂粒、白色粒、雲母、礫 ②橙色 ③普通	口～脚部上位 1/5残存。
5	土器器 壺		口 一 底 7.0 高 一	外面 口縁部横削で、脚部中位削で、下 位横位施削り。 内面 「U」縁部横削で、脚部横位削で。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい褐色 ③井通	脚部中位～底部 4/5残存。
6	須恵器 鉢		口(26.6) 底 一 高 一	外面 口縁部横削で、脚部平行叩き。 内面 「U」縁部横削で、脚部削で。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②黃褐色 ③還元焰	口～脚部下位 1/4残存。
7	須恵器 鉢		口 一 底 13.0 高 一	外面 脚部中位平行叩き、下位横位削削 り。 内面 脚部削で。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰黄褐色 ③還元焰	脚部中位～底部 1/4残存。
8	須恵器 壺	覆土	口 23.0 底 一 高 一	外面 口縁部輪縁彫形、脚部平行叩き。 内面 「U」縁部輪縁整形、脚部横位施削で。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②暗灰色 ③還元焰	口～脚部中位 1/2残存。
9	鉄製品 鋸	床	長さ19.2cm、幅3.7cm、厚さ0.4cm			
10	鉄製品 鋸			残存長13.4cm、幅3.1cm、厚さ0.3cm、先端部を欠く。		
11	鉄製品 紡錘車			直径4.7cm、孔径0.4cm、厚さ0.3cm。		
12	鉄製品 棒状鉄製 品			残存長4.9cm、幅0.5cm、厚さ0.4cm。		
13	須恵器 壺		口(12.0) 底 5.8 高 4.4	外面 体部輪縁整形、下位横位施削り、 底部右回転施切り後一方向施削り。 内面 体部輪縁整形。	①にぶい黄褐色 ③還元焰	1/2残存。
14	須恵器 壺	覆土	口(15.0) 底(8.0) 高 4.7	外面 体部輪縁整形、下位横位施削り、 底部右回転施切り後、底で。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰白色～灰色 ③還元焰	1/3残存。
15	須恵器 椀	覆土	口(13.9) 底 7.9 高 5.4	外面 体部輪縁整形、底部右回転施切り 後、回転削で。 内面 体部輪縁整形、 底部高台貼付削で。	①細砂粒、白色粒、石英、雲母、礫 ②灰色 ③還元焰	1/2残存。
16	須恵器 壺		口 12.4 底 6.0 高 4.3	外面 体部輪縁整形、下位横位施削り、 底部右回転施削り後、肩部手持ち施削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②闇灰色 ③還元焰	1/2残存。
17	須恵器 壺	覆土	口(13.6) 底 6.1 高 4.4	外面 体部輪縁整形、下位横位施削り、 底部回転施切り後一方向手持ち施削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、雲母、礫 ②灰色 ③還元焰	2/3残存。
18	須恵器 椀	覆土	口 一 底7.8 高 一	外面 体部輪縁整形、底部右回転施削り。 内面 体部輪縁整形、底部高台貼付時削 で。	①細砂粒、白色粒、礫 ②火色 ③還元焰	体部下位～底部 残存。
19	須恵器 盤	覆土	口(14.6) 底 7.5 高 3.2	外面 体部輪縁整形、底部右回転施削り。 内面 体部輪縁整形、底部高台貼付時削 り。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい黄褐色 ③還元焰	1/2残存。

31号住居跡（第54図 表38-39-77 国版13-22）

O5・6グリッドに位置し、主軸はN 95°Eを示す。平面形は長方形を呈し、規模は長軸4.75m、短軸4.23m、深さ0.18m、床面積約20.09m²である。カマドは東壁中央に付設され、火床部の中心は東壁ライン上に位置する。柱は4本主柱で、周溝は全周する。遺物は須恵器壺・椀・土師器壺・鎌・刀子が出土している。



第54図 31号住居跡・出土遺物

表38 31号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	種類 須恵器 環	出士 部位 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①粘土 ②色調 ③透底	残存状態 備考
1			口 14.0 底 6.6 高 4.6	外面 体部輪郭整形、底部回転窓切り後 手持ち施加。 内面 体部輪郭整形。	①新砂紋、白色釉、雲母 ②黄褐色 ③漫元焼、やや軟質	口縁部1/4欠損。
2	須恵器 高台环		口 15.0 底 8.6 高 6.5	外面 体部輪郭整形、底部石回転窓切り。 内面 体部輪郭整形。	①新砂紋、白色釉、纏 ②灰オリーブ色 ③漫元焼	3/5残存。

表39 31号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	種類	出土地点	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①粘土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
3	須恵器 盤	床	口 16.5 底 9.4 高 3.9	外面 体部輪轍整形、底部右回転削り。 内面 体部輪轍彫形。	①粘土粒、白色粒多、7 美 ②にい黄褐色 ③酰化気味	2/3残存。
4	土師器 小形器	覆土	L1 13.6 底 4.5 高 14.9	外面 口縁部横挽で、胴部上・中位撫で、 下位斜横挽更彎り。 内面 口縁部横挽で、底部撫位迄挽で。	①粘土粒、白色粒、雲母 ②橙褐色 ③橙一黒色 ④普通	7/8残存。
5	鉄製品 刀子			残存長13.6cm、刀部長さ10.7cm、幅1.1cm、厚さ0.35cm、生部残存長2.9cm、 幅0.8cm、厚さ0.5cm、掌部に木質残存。		
6	鉄製品 鎌	覆土		残存長18.1cm、3.7cm、厚さ0.3cm、先端部を欠く。		
7	鉄製品 鎌	覆土		残存長18.3cm、幅3.0cm、厚さ0.4cm、先端部を僅かに欠く。		
8	須恵器 壺		口(13.8) 底 5.8 高 4.4	外面 体部輪轍整形、下位施削り、底部 一方内窓削り。 内面 体部輪轍彫形。	①粘土粒、白色粒、雲 母、石英 ②灰青褐色 一橙色 ③酰化気味	1/2残存。
9	須恵器 壺		L1(14.4) 底 3.2 高 3.5	外面 体部輪轍整形、天井部右回転削削 り。 内面 体部輪轍彫形。	①粘土粒、白色粒、黑 色粒、雲母、石英 ②灰色 ③澁元塗	3/5残存。
10	須恵器 瓶		口(29.0) 底 一 高 一	外面 脇部平行叩き。 内面 脇部横挽迄挽で、素文のアテ具痕 横挽施削で。	①粘土粒、白色粒、雲 母 ②黒褐色～にい 褐色 ③澁元塗	L1～側部上位 1/6残存。
11	須恵器 盤		L1 一 底 15.0 高 一	外面 脇部下位横挽施削り、底部黒調査、 5孔式。 内面 脇部横挽迄挽で。	①粘土粒、白色粒、雲 母 ②黒褐色～にい 褐色 ③澁元塗	底部下位～底部 1/4残存。

32号住居跡（第35図 表40-77 図版14-23）

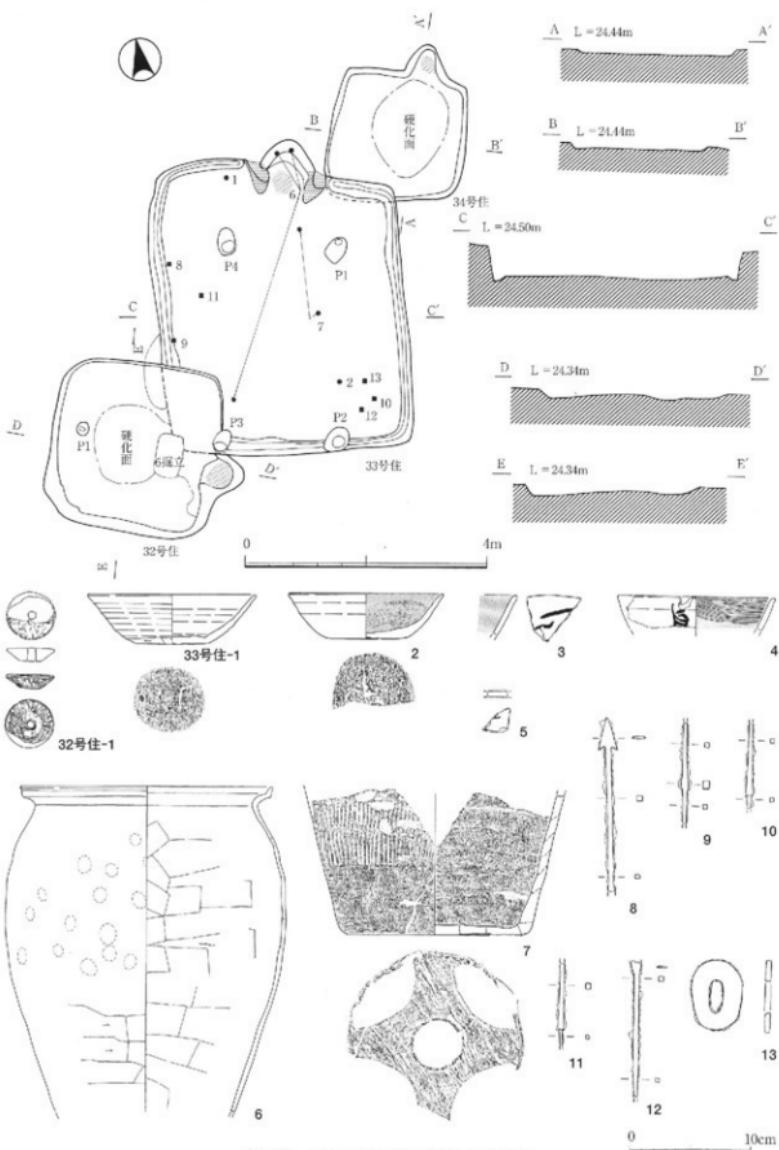
M 6・7グリッドに位置し、主軸は N-97°-E を示す。33号住居跡及び 6号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は本造構が新しい。平面形は方形を呈し、規模は長軸2.53m、短軸2.50m、深さ0.15m、床面積約6.32m²である。カマドは東壁中央に付設され、火床部の中心は西壁ラインから外寄りに位置する。主柱穴及び周溝は無く、西壁中央から内寸で28cmの位置に出入り口ピット（P1）が検出された。

33号住居跡（第55図 表41-77 図版14-23・28）

M 6グリッドに位置し、主軸は N-4°-W を示す。32・34号住居跡と重複しており、新旧関係は本造構が32号住居跡より古く34号住居跡より新しい。平面形は長方形を呈し、規模は長軸4.45m、短軸3.63m、深さ0.48m、床面積約16.15m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから内側に位置する。柱は4本主柱（P1～4）であり、P2・3は壁際に建てている。周溝は余周している。遺物は須恵器壺・瓶、土師器壺・甕、鉄鎌・鍔が出土している。

34号住居跡（第55図 表41-77 図版14）

M 6グリッドに位置し、主軸は N-8°-E を示す。33号住居跡によって南西壁が消滅している。平面形は略方形を呈し、規模は長軸2.03m、短軸1.97m、深さ0.08m、床面積約4.99m²である。カマドは北壁中央の東寄りに付設され、火床部の中心は北壁ラインから外寄りに位置する。主柱穴及び周溝は無い。遺物は土師器甕の細片が出土している。



第55図 32・33・34号住居跡・出土遺物

表40 32号住居跡出土遺物観察表

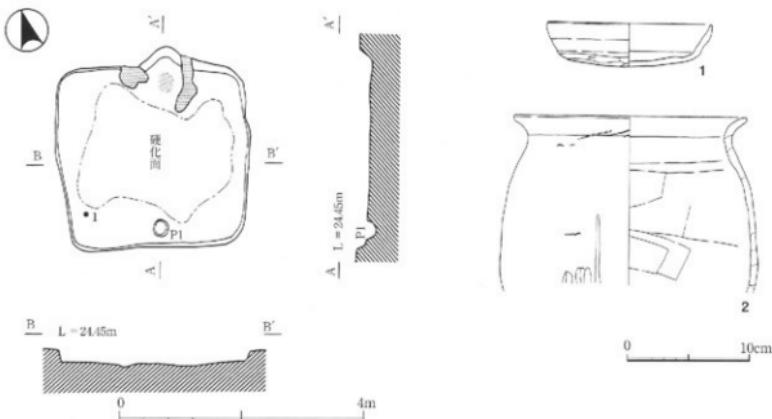
番号	種類	出土位置	計測値	剖面像	残存状態 備考
	器種	レベル			
1	石製品 紡錘車	床	直径4.0cm、下径1.5cm、厚さ1.1cm。		滑石製。

表41 33号住居跡出土遺物観察表

番号	種類	出土位置	計測値	成・断形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
	器種	レベル	(cm)			
1	須恵器 壺	覆土	口 13.8 底 5.8 高 4.1	外面 体部輪轍整形、下位横位窓削り、 底部凹部切り後一方手持ち更削り。 内面 体部輪轍整形。	①細砂粒、白色粒、雲母、繊維 ②灰~にぶい黄褐色 ③酸化焰	口縁一部欠損。
2	土師器 壺	覆土	口 12.6 底 6.8 高 3.7	外面 体部輪轍整形、底部は器皿が荒れ て調査不明。 内面 体部斜横位窓削き後黑色處理。	①細砂粒、雲母 ②にぶい黒~黒色 ③酸化焰	1/3残存。
3	土師器 壺		口 - 底 - 高 -	外面 体部輪轍整形。 内面 体部旋削後黑色處理。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい黄褐色 ③酸化焰	体部破片。外面に墨色。
4	土師器 壺		口(13.1) 底 - 高 -	外面 体部輪轍整形。 内面 体部横位施磨き後黑色處理。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい黄褐色 ③酸化焰	口縁部残存。 外面に墨色。 「盛」?
5	土師器 壺		口 - 底 - 高 -	外面 底部右同軸系切り後無で。 内面 范解き後黑色處理。	①細砂粒、白色粒 ②にぶい黄褐色 ③酸化焰	底部破片。外面に墨色。
6	土師器 壺	覆土	口 20.4 底 - 高 -	外面 口縁部横削で、胴部上位削で、下位横位窓削り、上位に指顧印痕。 内面 口縁部横削で、胴部横位窓削で。 底部は5孔式。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②橙~黒色 ③普通	口~胴部下位 1/4残存。
7	須恵器 瓶		口 - 底 14.2 高 -	外面 瓶部中位平行叩き、下位窓削り。 内面 瓶部横削で、胴部横位窓削で。 底部は5孔式。	①細砂粒、白色粒、雲母、繊維 ②にぶい褐色 ③酸化焰	2/3残存。
8	鉄製品 鍔	覆土	残存長14.3cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、施被長9.9cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm、基部残存長2.2cm、幅0.4cm、厚さ0.3cm。			
9	鉄製品 鍔		残存長8.4cm、施被残存長5.5cm、幅0.4cm、厚さ0.45cm、基部残存長3.9cm、幅0.35cm、厚さ0.35cm。			
10	鉄製品 鍔		残存長7.0cm、施被残存長6.1cm、幅0.35cm、厚さ0.3cm、基部残存長0.9cm、幅0.3cm、厚さ0.3cm。			
11	鉄製品 鍔		残存長6.7cm、施被残存長5.4cm、幅0.4cm、厚さ0.5cm、基部残存長1.3cm、幅0.25cm、厚さ0.3cm。			
12	鉄製品 鍔		残存長11.3cm、幅0.4cm、厚さ0.6cm。			
13	鉄製品 鍔	覆土	長さ5.8cm、横径4.3cm、厚さ0.5cm。			

35号住居跡 (第56図 表42-77 図版14-23)

N 5・6 グリッドに位置し、主軸は N-10°-E を示す。平面形は方形を呈し、規模は長軸3.05m、短軸2.95m、深さ0.22m、床面積約8.99m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから内側に位置する。主柱穴及び周溝は無く、南壁中央から内寸で10cmの位置に出入り口ピット(P 1)が検出された。遺物は土師器壺・壺が覆土下層の同じ位置から出土している。



第56図 35号住居跡・出土遺物

表42 35号住居跡出土遺物観察表

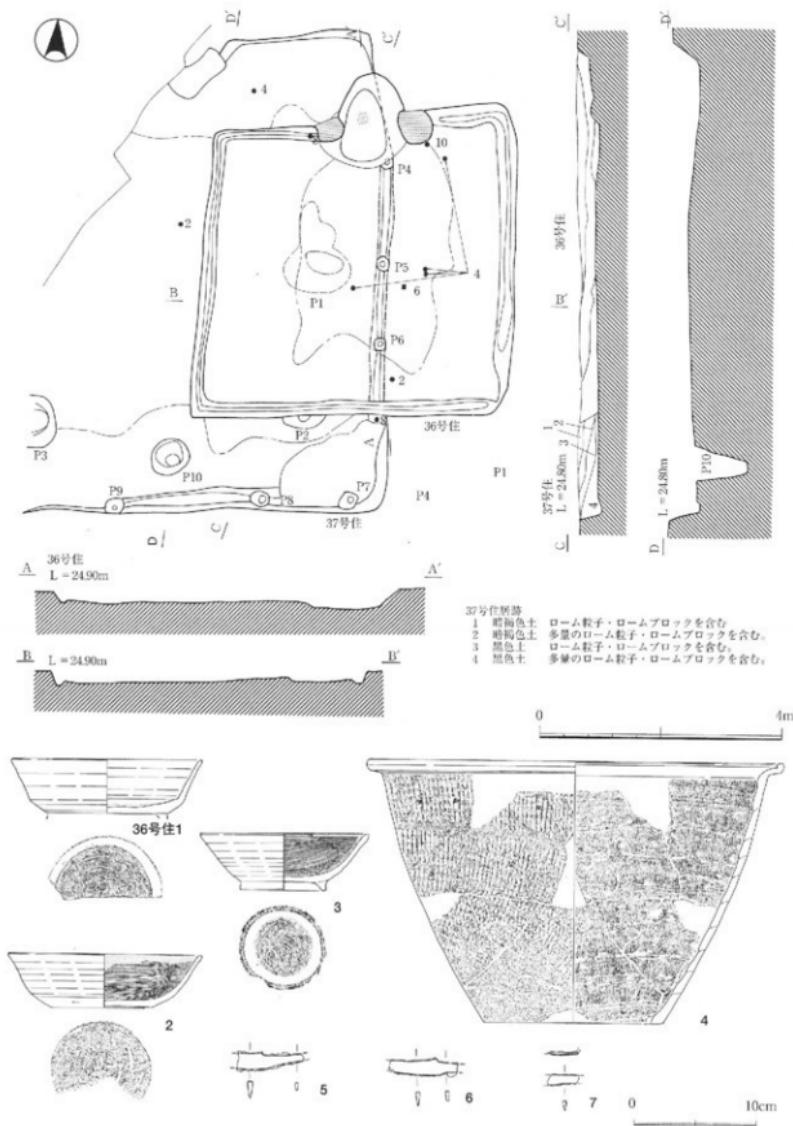
番号	種類 器 器 性 性 性	出士 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①治土 ②色済 ③焼成	残存状態 備考
1	土師器 环	覆土	口 13.4 底 - 高 3.6	外面 口縁部横撫で、底部横位施削り。 内面 口縁部横撫で、底部擦で。	①細砂粒、白色粒 ②墨色 ③良好	2/3残存。
2	土師器 甕	覆土	口(19.0) 底 - 高 -	外面 口縁部横撫で、底部上半撫で、中位縱位施削き。 内面 口縁部横撫で、底部横位施撫で。	①細砂粒、白色粒 ②墨～にぶい墨色 ③普通	口～胴部中位 1/8残存。

36号住居跡（第57図 表43-77 図版15・23）

J・K7グリッドに位置し、主軸はN-7°-Eを示す。37号住居跡を切り込んで構築している。平面形は整った方形を呈し、規模は長軸4.65m、短軸4.47m、深さ0.18m、床面積約20.78m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床部の中心は北壁ラインから外寄りに位置する。主柱穴は無く、周溝は全周する。遺物は須恵器椀・瓶、土師器環・甕、刀子が出土している。

37号住居跡（第57-60図 表44-77 図版15-23）

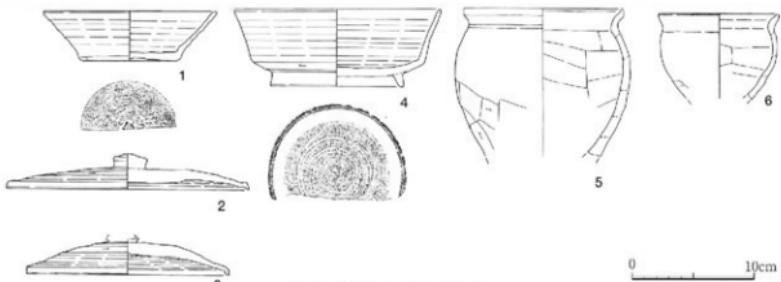
J・K7グリッドに位置し、主軸はN-2°-Wを示す。住居東側に36号住居跡が切り込み、同西側は現代の擾乱によって大きく削除されている。平面形は方形で、規模は東西5.70m以上、南北7.20m、深さ0.3m、床面積41.04m²以上である。カマドは北壁に付設されているが削除されており、袖部の一部が辛うじて残存している。主柱は3基（P1～3）が確認されているが、本来は4本主柱と推察され、それに壁柱（P4～9）が付帯している。周溝は東壁と南壁の一部に認められ、南壁から内寸で28cmの位置に出入り口ピット（P10）が検出された。遺物は須恵器蓋・瓶、土師器甕が出土している。



第57図 36・37号住居跡・出土遺物

表43 36号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	出士 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 壺		口(15.6) 底(9.8) 高一	外面 体部輪縫整形後、下位右回転削り、 底部右回転削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	1/3残存。
2	土師器 环		口 15.8 底 8.2 高 5.5	外面 体部輪縫整形後、下位回転削り、 底部右回転削り。 内面 体部横位窓き後黑色処理。	①細砂粒、白色粒、雲母、環 ②にぶい赤褐色 ③酸化焰	口縁一部欠損。
3	土師器 高台环		口 13.8 底 7.0 高 4.6	外面 体部輪縫整形、底部右回転削り。 内面 体部斜横位窓き後黑色処理。	①細砂粒、白色粒 ②橙色 ③酸化焰	口縁一部欠損。
4	須恵器 鉢		口(34.0) 底(15.0) 高 21.5	外面 口縁部横撫で、胴部上半格子風叩き、 下位横位窓削り。 内面 口縁部横撫で、胴部窓。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい黄褐色 ③酸化焰	1/3残存。
5	銛製品 刀子		残存長5.5cm、 刀部残存長2.5cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、 茎部残存長3.0cm、幅0.6cm、厚さ0.25cm。			
6	銛製品 刀子		残存長5.8cm、 刀部残存長幅4.3cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、 幅0.8cm、厚さ0.3cm。			
7	銛製品 不明		長さ(2.7)cm、闊0.9cm、厚さ0.4cm。			



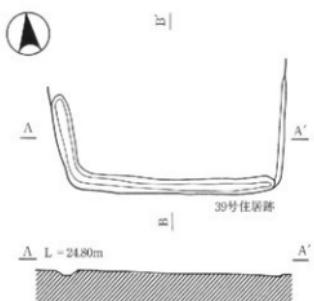
第58図 37号住居跡出土遺物

表44 37号住居跡出土遺物観察表

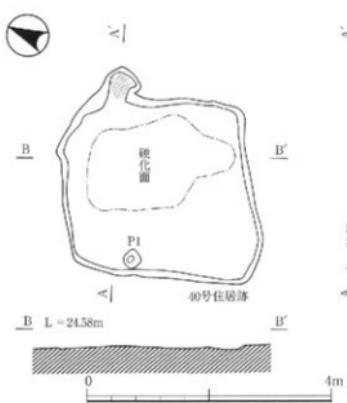
番号	種類 器種	出士 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 环	床	口(14.2) 底 7.7 高 4.1	外面 体部輪縫整形、下位横位窓削り、 底部回転窓切り後一方向手持ち窓削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰～暗青灰色 ③還元焰	1/3残存。
2	須恵器 蓋	床	口(20.0) 盤 2.7 高 2.8	外面 体部輪縫整形、天井部右回転窓削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白・黒色粒 ②灰色 ③還元焰	1/2残存。
3	須恵器 蓋	床	口(16.6) 盤一 高一	外面 体部輪縫整形、天井部右回転窓削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白・黒色粒 ②灰色 ③還元焰	2/3残存。
4	須恵器 高台环	床	口 17.0 底 11.0 高 6.4	外面 体部輪縫整形後下位右回転窓削り、 底部不回転窓削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②火色 ③還元焰	1/2残存。
5	土師器 小形甌		口(13.0) 底一 高一	外面 口縁部横撫で、胴部上位撫で、中 位斜横位窓削り。 内面 口縁部横撫で、胴部横位窓削り。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい赤褐色～明赤褐色 ③普通	口～胴部下位 1/3残存。
6	土師器 小形甌		口(9.8) 底一 高一	外面 口縁部横撫で、胴部上位無窓製、 下位横位窓削り。 内面 口縁部横撫で、胴部横位窓削り。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②橙色 ③普通	口～胴部下位 1/3残存。



38号住居跡 (第59図 表77 図版15)
K 6・7 グリッドに位置し、主軸は N-8°E を示す。平面形は方形を呈し、規模は長軸3.10m、短軸2.95m、深さ0.12m、床面積約9.14m²である。カマドは北壁中央に付設され、燃焼部の中心は北壁ラインから外寄りに位置する。主柱穴は無く、周溝は西壁及び南壁の一部に巡る。



39号住居跡 (第59図 表78 図版15)
K・L 6 グリッドに位置する。住居跡の北側大半が削平されており、確認されたのは南側の床面及び周溝のみである。南壁辺の長さは3.44mであり、平面形は北側に向かって僅かに開く方形平面と推察される。

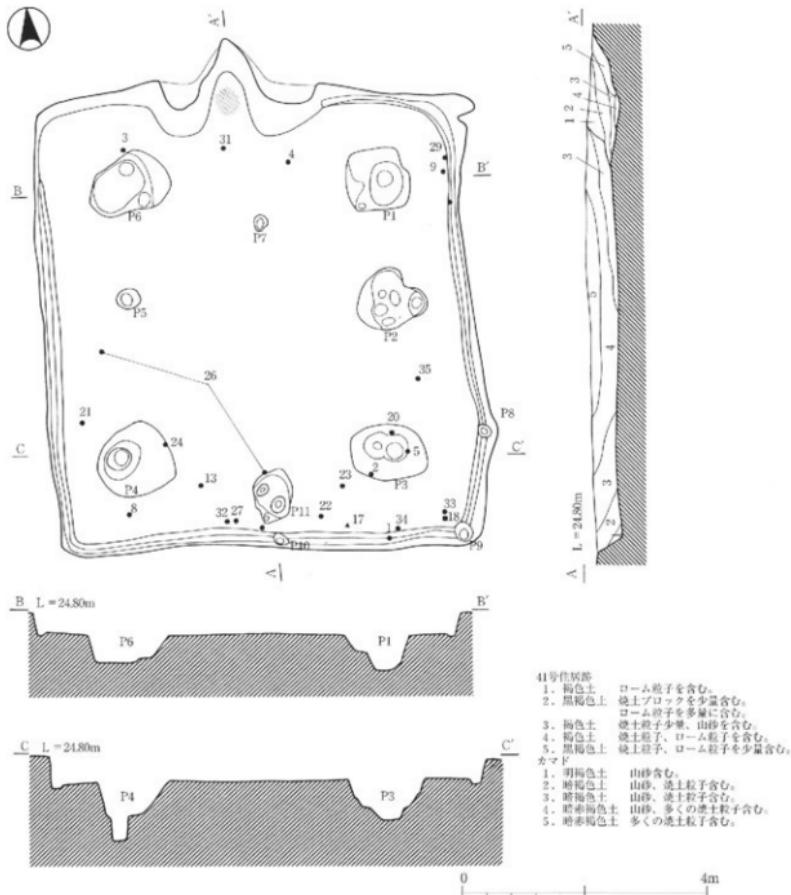


40号住居跡 (第59図 表78 図版15)
M 9・10 グリッドに位置し、主軸は N-63°-E を示す。平面形は略方形を呈し、長軸2.92m、短軸2.65m、深さ0.07m、床面積約7.73m²である。カマドは北東隅に付設され、火床部の中心は東壁ラインから外寄りに位置する。主柱穴及び周溝は無く、出入り口ピットと考えられる柱穴(P1)が西壁北寄に近接して検出された。

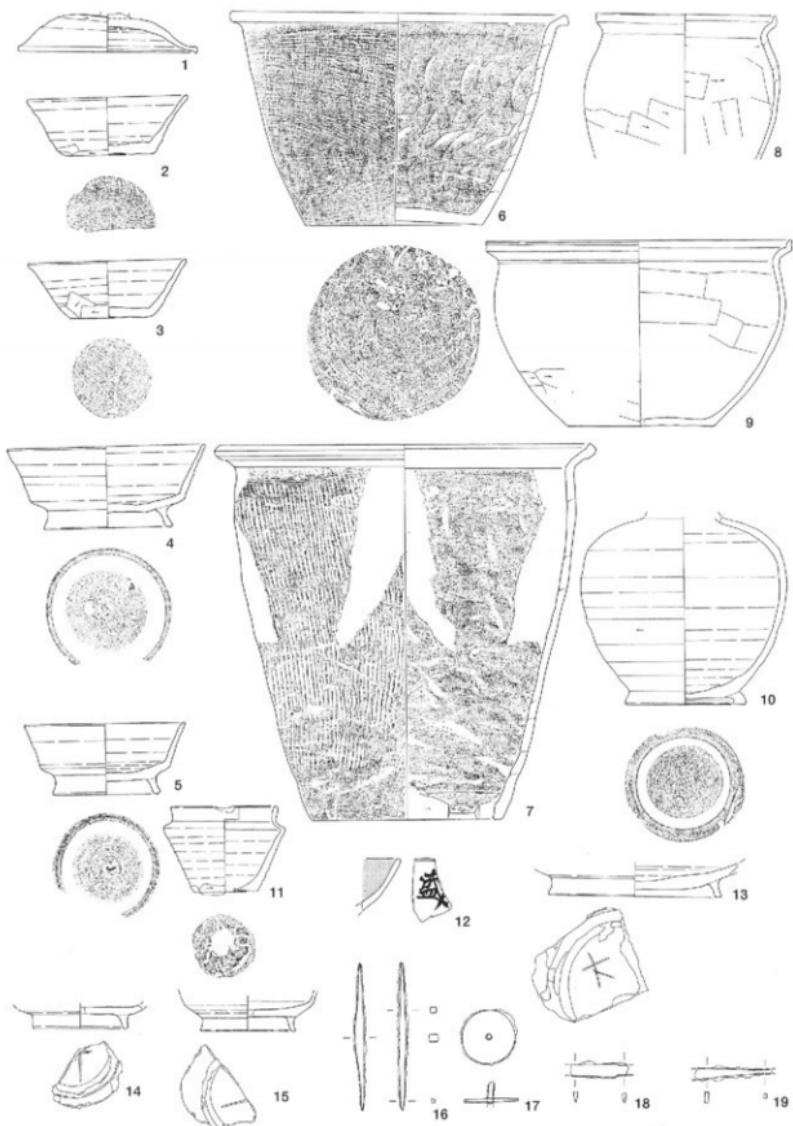
第59図 38・39・40号住居跡

41号住居跡（第60・61・62図 表45・46・47・78 図版15・16・24・25・28）

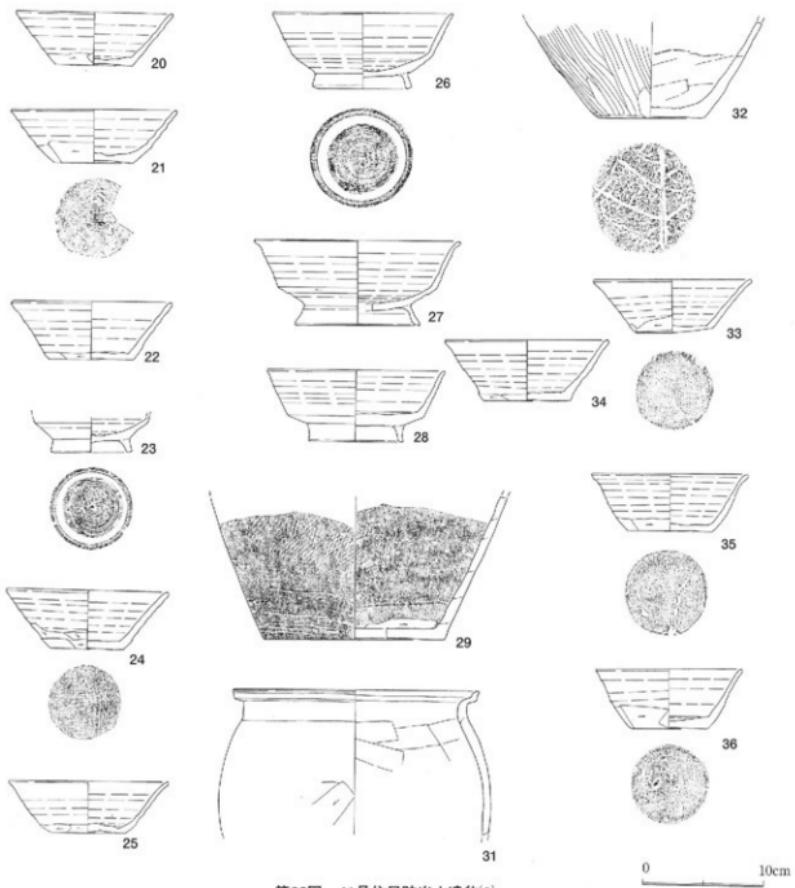
J・K 8・9 グリッドに位置し、主軸は N. 7° W を示す。本遺跡最大の堅穴式住居である。平面形は長方形を呈し、長軸7.15m、短軸6.55m、深さ0.37m、床面積約46.83m²である。カマドは北壁中央西寄りに付設され、火床部の中心は北壁ラインから僅かに内側に寄っている。柱は6本主柱（P1～6）であり、壁柱（P8～10）と支柱（P7）が付帯する。周溝は北西コーナーを除いて巡り、出入り口ピット（P11）は南壁中央から内寸で20cm の位置に検出された。遺物は須恵器蓋・坏・高台坏・甕・瓶・壺・壺・鉢、土師器甕・鉢、鐵製鍼錘車・刀子が出土している。



第60図 41号住居跡



第61図 41号住居跡出土遺物(1)



第62図 41号住居跡出土遺物(2)

表45 41号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	種類 器種 レベル	出土 層	計測値 (cm)	成・整形技術の特徴	①粘土 ②色調 ③焼成 ④細砂粒、白色粒、雜多 石英 ⑤灰褐色 ⑥還元焰	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	床	口 14.4 底 7.2 高 —	外面 体部輪廻整形、天井部右回転施削 り。 内面 体部輪廻整形。	④細砂粒、白色粒、雜多 石英 ⑤灰褐色 ⑥還元焰	2/3残存。
2	須恵器 环	覆土	口(13.0) 底 6.2 高 4.8	外面 体部輪廻整形、下位横位施削り、 底部右回転施削り後手持ち施削り。 内面 体部輪廻整形。	④細砂粒、白色粒、雲母 ⑤灰褐色 ⑥還元焰	2/3残存。
3	須恵器 环	覆土	口 12.8 底 6.2 高 4.7	外面 体部輪廻整形後、下位横位施削り、 底部一方向手持ち施削り。 内面 体部輪廻整形。	④細砂粒、白色粒、石英 ⑤灰褐色 ⑥還元焰	口縁部1/4欠損。

表46 41号住居跡出土遺物観察表（2）

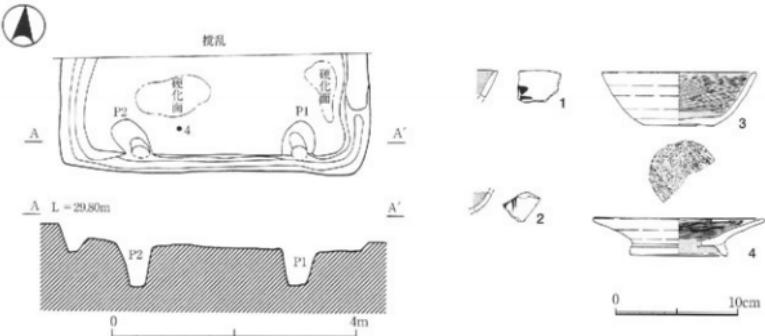
番号	種類	出土 階層	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
4	須恵器 碗	覆土	口 16.2 底 10.4 高 6.7	外面 体部輪縁整形、底部右回転窪削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、礫 ②灰色 ③還元焰	3/4残存。
5	須恵器 碗	覆土	口(13.0) 底 8.4 高 5.9	外面 体部輪縁整形、底部右回転窪切り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、礫 ②にぶい褐色 ③還元焰	1/2残存。
6	須恵器 鉢	床	口 27.4 底 14.6 高 17.5	外面 脚部七半平行叩き、下位横削り。 内面 脚部横位窪削で。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい褐色 ③還元焰	口脚部1/4欠損。
7	須恵器 瓶	覆土	口(30.0) 底 15.6 高 30.7	外西 口縁部輪縁整形、肩部上・中位平行叩き、下位横位窪削り。 内西 口縁部輪縁整形、肩部増位窪削で。	①細砂粒、白色粒、礫 ②灰色 ③還元焰	1/4残存。
8	土器群 小形甕	覆土	口 14.6 底 一 高 一	外面 口縁部横撫で、胴部上位撫で、中位斜傾位窪削り。 内面 口縁部横撫で、肩部横位窪削で。	①細砂粒、白色粒 ②橙一黒色 ③普通	口一肩部中位 2/3残存。
9	土器器 鉢	覆土	口(24.8) 底(11.8) 高 15.2	外面 口縁部横撫で、胴部上半撫で、下位横位窪削り。 内面 山縁部横撫で、胴部横位窪削で。	①細砂粒、白色粒、礫 ②橙一黒色 ③普通	1/3残存。
10	須恵器 壺	覆土	口 一 底 9.7 高 一	外面 脚部輪縁整形後、下半右回転窪削り、底部右回転窪削り。 内面 脚部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②にぶい黄褐色 ③還元焰	脚部一底部1/2 残存。
11	須恵器 短縁甕	覆土	口 8.6 底 5.0 高 7.1	外面 脚部輪縁整形後、下位横位窪削り、底部回転窪切り後手持ち窪削り。 内面 脚部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、礫 ②灰色 ③還元焰	7/8残存。底部 に焼成後の穿孔。
12	黑色土器 杯	覆土	口 一 底 一 高 一	外面 体部輪縁整形、内面 体部底部崩落後黒色処理。	①細砂粒 ②にぶい黄褐色 ③酸化焰	体部破片。外 に「盛」の墨書き。
13	須恵器 碗	覆土	口 一 底(14.3) 高 一	外面 体部輪縁整形、底部右回転窪削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②にぶい黄褐色 ③酸化焰	底部1/4残存。 外面に「丈」の 刻書。
14	須恵器 碗	覆土	口 一 底(7.8) 高 一	外面 体部輪縁整形、底部右回転窪削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②暗赤褐色 ③還元焰	底部1/4残存。 外面に刻書。
15	須恵器 碗	覆土	口 一 底(7.8) 高 一	外面 体部輪縁整形、底部右回転窪削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②褐色 ③還元焰	体部～底部。底 部外面に刻書。
16	鉄製品 不明	覆土	長さ(12.2)cm、幅0.6cm、厚さ0.6cm。			
17	鉄製品 防錆車	覆土	直径4.3cm、幅0.5cm、厚さ0.3cm。			
18	鉄製品 刀子	覆土	長さ(1.7)cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm。			
19	鉄製品 刀子	覆土	長さ(6.4)cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm。			
20	須恵器 环	覆土	口 12.8 底 6.2 高 4.3	外面 体部輪縁整形、下位横位窪削り、 底部右回転窪切り後一方向手持ち窪削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、雲母、礫、 黑色粒 ②灰色 ③還元焰	1/3残存。
21	須恵器 环	覆土	口(13.6) 底(6.4) 高 4.4	外面 体部輪縁整形、下位横位窪削り、 底部回転窪切り後手持ち窪削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、雲 母 ②灰色 ③還元焰	1/2残存。
22	須恵器 环	覆土	口(12.8) 底(7.0) 高 4.8	外面 体部輪縁整形、下位横位窪削り、 底部手持ち窪削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、雲 母 ②灰色 ③還元焰	1/4残存。
23	須恵器 碗	覆土	口 一 底 5.9 高く 2.9	外面 体部輪縁整形、底部右回転窪切り 後高台貼付。 内面 体部輪縁整形、底部高台貼付時掘 て。	①細砂粒、白色粒、雲 母 ②灰色 ③還元焰	底部残存。
24	須恵器 环	覆土	口 13.2 底 5.9 高 4.8	外面 体部輪縁整形、下位横位窪削り、 底部手持ち窪削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、雲 母 ②灰色 ③還元焰	1/2残存。

表47 41号住居跡出土遺物觀察表（3）

番号	種類	沿上 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①船上 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
25	須恵器 环	覆土	口 13.0 底 6.0 高 4.2	外面 体部橢円整形、下位横位施削り、底部同軸切り後一方向手持ち鋸削り。 内面 体部橢円整形。	①細砂粒、白色粒、雲母、石英 ②黒色 ③漫元焼	3/4残存。燒き重み顯著。
26	須恵器 碗	覆土	口(14.8) 底 7.2 高 6.2	外面 体部橢円整形、下位横位施削り、底部右回転切り。 内面 体部橢円整形、底部高台貼付時撻打。	①細砂粒、白色粒、雲母、石英 ②灰色 ③漫元焼	3/5残存。
27	須恵器 碗	覆土	口(16.8) 底(10.2) 高 7.9	外面 体部橢円整形、下位右回転施削り、底部右回転削前り。 内面 体部橢円整形、底部高台貼付時撻打。	①細砂粒、白色粒、雲母、石英 ②灰色 ③漫元焼	1/3残存。
28	須恵器 碗	覆土	口(14.6) 底(7.6) 高 5.9	外面 体部橢円整形、底部同軸撻打。 内面 体部橢円整形、底部高台貼付時撻打。	①細砂粒、白色粒、雲母、石英 ②灰色 ③漫元焼	2/5残存。
29	須恵器 盤	覆土	口 14.8 底 14.8 高 —	外面 置中火部平行削き、胴下半部施削り、底部無痕跡、5孔式。 内面 制記跡無撻打、素文アチ具痕。	①細砂粒、白色粒、石英 ②灰色～青い褐色 ③漫化気味	胴部下位～底部残存。
31	土師器 甕	覆土	口(20.0) 底 — 高 —	外面 口縁部横撻で、胴部上半部撻で、下半部削前り。 内面 口縁部横撻で、胴部撻打で。	①細砂粒、白色粒、雲母、石英 ②褐色 ③普通	口～胴部上位 1/3残存。
32	土師器 甕	覆土	口 — 底 8.6 高 —	外面 脇下半部剥磨す。 内面 脇下半部剥磨す。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②褐色～灰色 ③普通	胴部下位～底部 底部木葉痕。
33	須恵器 环	覆土	口 13.0 底 6.4 高 4.4	外面 体部橢円整形、下位横位施削り、底部同軸切り後一方向手持ち鋸削り。 内面 体部橢円整形。	①細砂粒、白色粒、石英 ②灰色 ③漫元焼	3/4残存。
34	須恵器 环	覆土	口(15.4) 底 7.2 高 5.0	外面 体部橢円整形、下位横位施削り、底部左回転切り後、手持ち鋸削り。 内面 体部橢円整形。	①細砂粒、白色粒、雲母、石英 ②灰色 ③漫元焼	1/2残存。
35	須恵器 环	覆土	口 12.8 底 6.8 高 4.7	外面 体部橢円整形、下位横位施削り、底部一方向手持ち鋸削り。 内面 体部橢円整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色～黒色 ③漫元焼	口縁部一部欠損。
36	須恵器 环	覆土	口(12.0) 底 6.2 高 4.9	外面 体部橢円整形、下位横位施削り、底部同軸切り後一方向手持ち鋸削り。 内面 体部橢円整形。	①細砂粒、白色粒、雲母、石英 ②灰色 ③漫元焼	3/4残存。

42号住居跡（第63図 表48-78 国版16・25・28）

M12・I3グリッドに位置する。カマドを含む構造の大半は擾乱によって消滅し、遺存するのは南側約1/3程度である。平面形は方形と判断され、規模は東西4.25mである。主柱は南壁の周溝内に2基（P1・2）検出されているが、本遺跡の事例（16・33号住居跡）から、本来は4本主柱であったと推察される。遺物は土師器壺・皿が出土している。



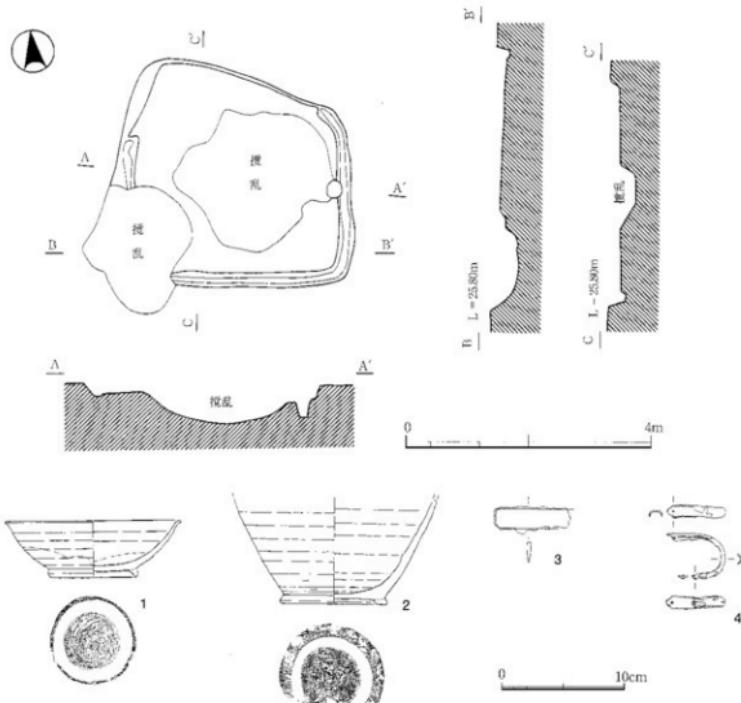
第63図 42号住居跡・出土遺物

表48 42号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴			①胎上 ②色离 ③焼成	残存状態 備考
				外面	内面			
1	土師器 壺	口 底 高	— — —	体部橢圓章形。 内面 体部施磨き後黒色処理。			①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい褐色-明褐色 ③酸化焰	体部破片。外面 に墨書。
2	土師器 壺	口 底 高	— — —	外側 体部橢圓章形。 内面 体部施磨き後黒色処理。			①細砂粒、白色粒、雲母 ②明褐色 ③酸化焰	体部破片。外面 に墨書。
3	土師器 壺	口 12.6 底 5.6 高 4.4		外側 体部橢圓章形後、下位横位施磨り。 底部右回転系切り後一方に向手持ち彫削り。 内面 体部斜横位施磨き後黒色処理。			①細砂粒、白色粒、雲母 ②橙色 ③酸化焰	1/3残存。
4	土師器 皿	口(14.0) 底(7.8) 高 3.0		外側 体部橢圓章形。 内面 体部横位施磨き後黒色処理。			①細砂粒、白色粒、雲母 ②橙色 ③酸化焰	1/3残存。

44号住居跡（第64図 表49-78 図版16-25）

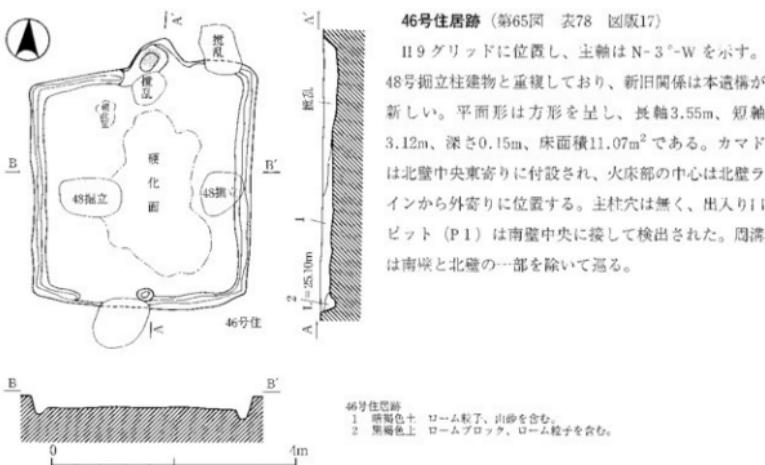
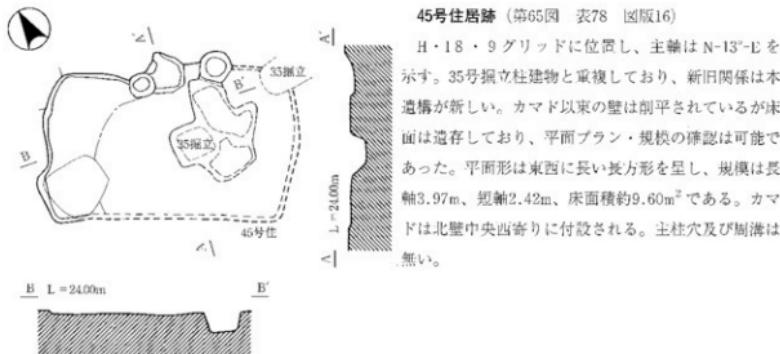
15グリッドに位置する。床面中央と南西隅に大きな掻乱穴が切り込んでいる。平面形は台形状を呈し、規模は東西3.30m、南北3.25m、深さ0.15m、床面積約10.72m²である。カマド及び主柱穴は無く、周溝は北壁を除き巡る。遺物は須恵器壺、灰釉陶器碗、刀子が出土している。



第64図 44号住居跡・出土遺物

表49 44号住居跡出土遺物観察表

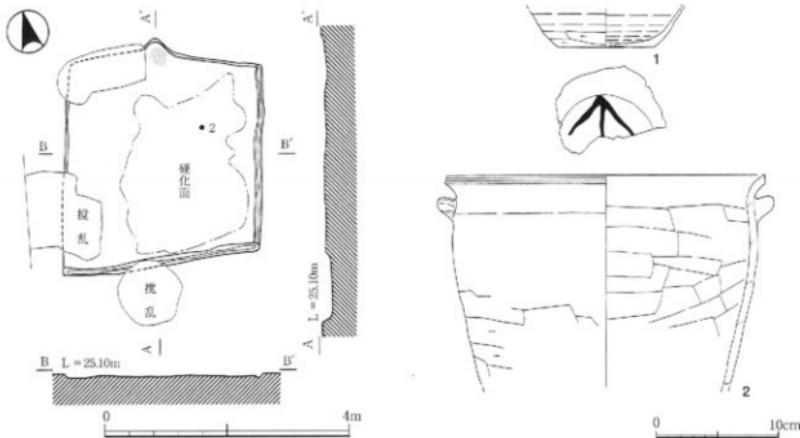
番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技術の特徴	①粘土、②色調 ③焼成	残存状況 備考
1	灰釉陶器 甕	床	口(14.2) 底 6.8 高 4.2	外面 体部輪郭整形成、底部右回転系切り。 内面 体部輪郭整形成。	①黒色粒 ②灰白色 ③還元焰	1/3残存。内外而済受け施釉。
2	灰釉陶器 甕	口	底 8.6 高 —	外面 刷毛輪郭整形成後、下位回転施削り、 底部圓弧系切り。 内面 刷毛輪郭整形成。	①細砂粒、白色粒 ②灰一灰オーライブ色 ③還元焰	胡部下位～底部 1/3残存。
3	鉄製品 刀子？		長さ(6.8)cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm。			
4	金銀製品 不明		長さ5.5cm、幅4.2cm、厚さ0.2cm。			



第65図 45・46号住居跡

47号住居跡（第66図 表50・78 図版17・25・28）

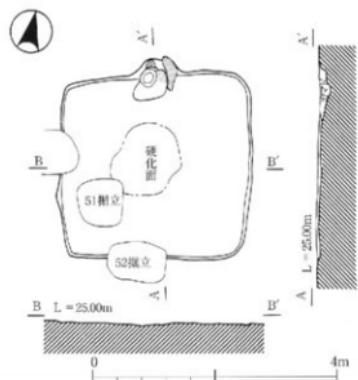
H9グリッドに位置し、主軸はN-4°-Eを示す。西壁と南壁に攪乱が切り込んでいる。平面形は方形を呈し、長軸3.28m、短軸3.10m、深さ0.06m、床面積約10.16m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床の中心は北壁ラインから僅かに内側に位置する。主柱穴は無く、周溝は東壁と南壁に巡る。遺物は須恵器壺・瓶が出土している。



第66図 47号住居跡・出土遺物

表50 47号住居跡出土遺物観察表

番号	種類	出土レベル	計測値(cm)	成・整形技法の特徴	①貼土	②色調	残存状態 参考
					③焼成		
1	須恵器壺	口一 底 8.0 高(3.2)	外縁部全体を削り、 底部一方向削り。 内縁部全体を削り。	①繊維状、白色粒、栗 色部物粒、黒 ②灰青色 ③漆元塗	裏部-体部1/4残 存。底部外縁に 「」の墨書き。		
2	土器縁瓶	口(26.0) 底 - 高 -	外縁部口縁部横溝で、一部剥離で、胴部 上位溝で下位横溝削り。 内縁部口縁部横溝で、胴部剥離。	①繊維状、白色粒、栗 色部物粒、黒 ②にぶい黄褐色-橙色 ③普通	口縁部-胴部 1/3残存。		



48号住居跡（第67図 表78 図版17）

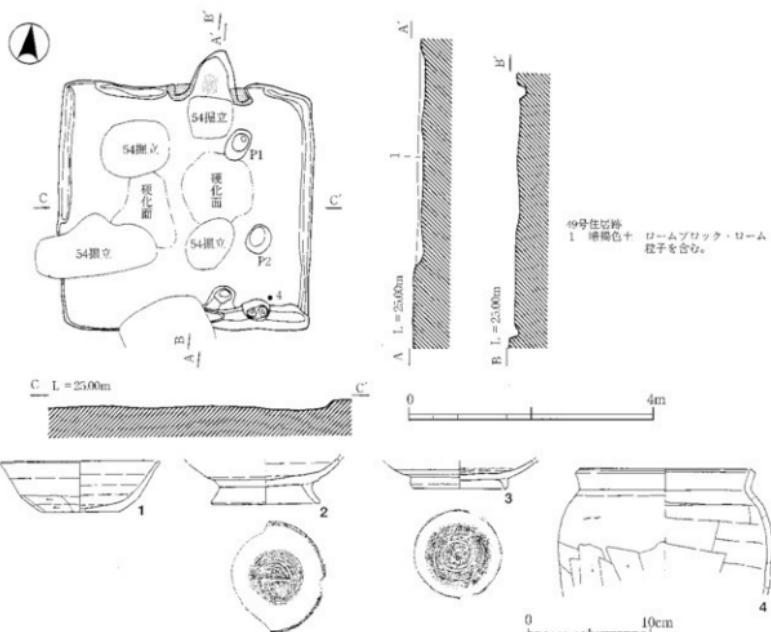
I・J8・9グリッドに位置し、主軸はN-13°-Wを示す。51号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形は方形を呈し、規模は長軸3.08m、短軸2.87m、深さ0.08m、床面積約8.83m²である。カマドは北壁中央に付設され、火床の中心は北壁ライン上に位置する。主柱穴及び周溝は無い。

48号住居跡
1 埋蔵色土　炭化粒子、ローム粒子を含む。

第67図 48号住居跡

49号住居跡（第68図 表51-78 図版17・25）

18グリッドに位置し、主軸はN-5°Wを示す。54号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は木造構が新しい。平面形は方形を呈し、規模は長軸4.05m、短軸3.82m、深さ0.13m、床面積約15.47m²である。カマドは北壁中央東寄りに付設され、火床部の中心は北壁ライン上に位置する。主柱穴は2本(P1・2)確認されているが本来は4本主柱であり、P1・2に対応する柱穴は54号掘立柱建物の柱振形内に存在していたと思われる。周溝は南西コーナー付近を除いて確認された。遺物は土器器坏・碗・壺、灰釉陶器碗が出土している。



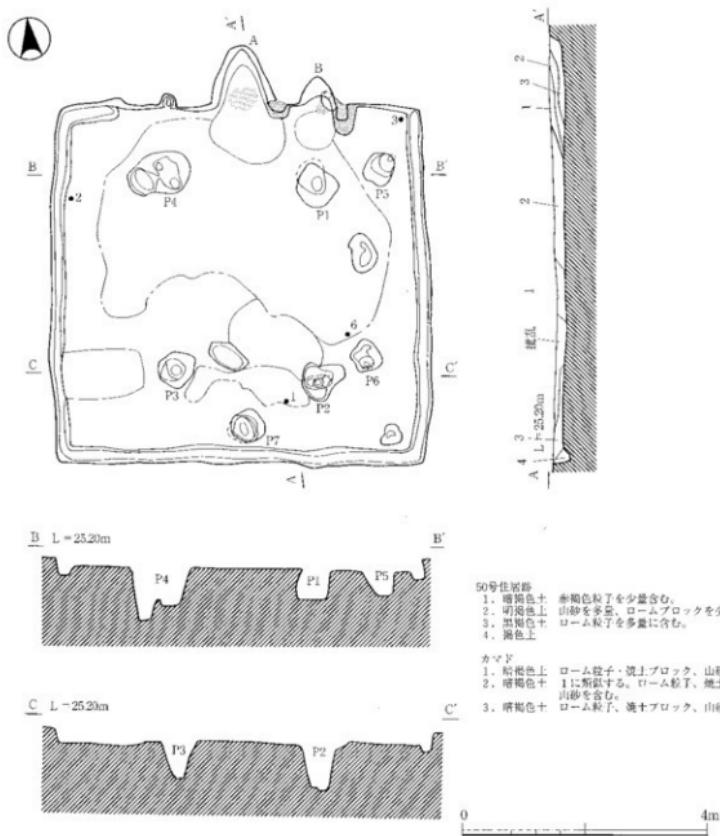
第68図 49号住居跡・出土遺物

表51 49号住居跡出土遺物観察表

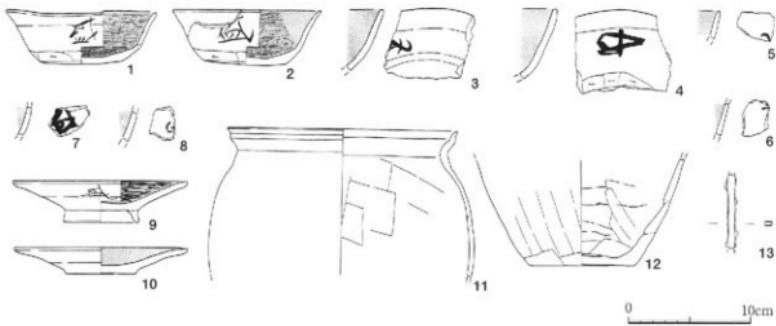
番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③施成	残存状態 備考
1	上部器 環		口(13.0) 底(6.4) 高4.2	外面 体部輪廓整形後、下位横位窓削り。 後底部手持ち窓削り。 内面 体部輪廓整形。	①細砂粒、白色粒 ②褐色-灰黃褐色 ③硬化焼	1/4残存。
2	土器器 碗		口11. 底 8.6 高 7.4	外面 体部輪廓整形、底部右回転系切り、 周辺部高白貼付時同板撫で。 内面 体部輪廓整形。	①細砂粒、白-褐色粒 ②褐色 ③硬化焼	口縁部欠損。
3	灰釉陶器 碗		口 - 底 7.4 高 -	外面 体部輪廓整形後、下位回転窓削り。 底部右回転窓削り。 内面 体部輪廓整形。	①黑色粒、黒 ②灰白色 ③還元焰	口縁部欠損。
4	土器器 壺		口(14.0) 底 - 高 -	外面 口縁部横撫で、肩部上位窓で、中 位窓位窓削り。 内面 口縁部横撫で、胴部横位窓拂で。	①細砂粒、白色粒、雲 母、輝 ②橙-灰黃褐 ③片消	口-肩部中位 1/3残存。

50号住居跡 (第69-70図 表52-78 図版25-28-29)

II 8 グリッドに位置し、主軸は N-2°-W を示す。平面形は方形を呈し、長軸5.78m、短軸5.56m、深さ0.18m、床面積約32.65m²である。カマドは北壁中央に2基(A・B)が付設されているが、新旧関係及び同時機能の有無は判然としない。しかし主柱配置より、カマドは A の後に B が付設され、同時あるいは交互に機能した可能性が高い。本柱穴は6基(P1～6)検出されているが、P5・6はカマド B が付設された段階での建て替えと推察され、基本的に4本主柱であったと思われる。周溝は北壁を除いて巡り、出入り口ピット(P7)は南壁中央に近接して検出された。遺物は土器器坏・皿・甕・鐵錐が出土している。



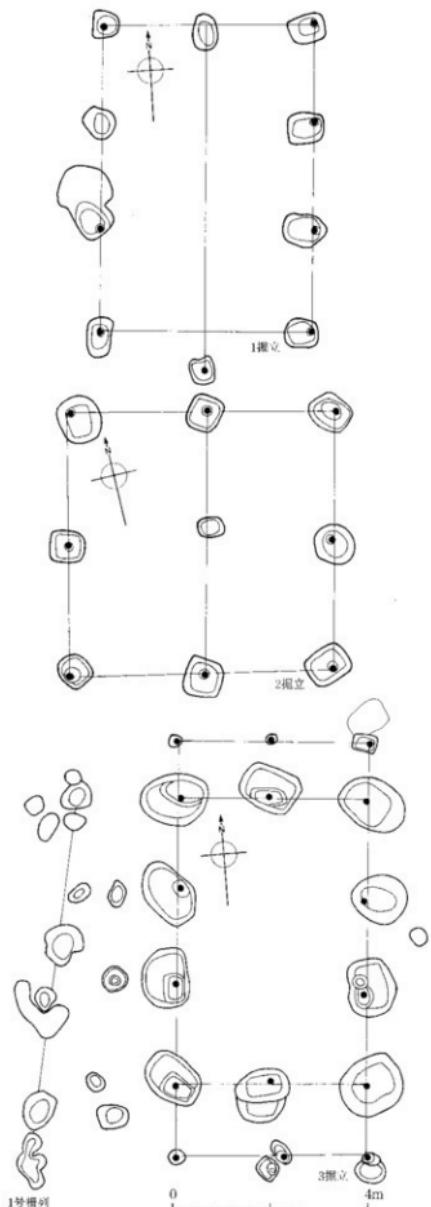
第69図 50号住居跡



第70図 50号住居跡出土遺物

表52 50号住居跡出土遺物観察表

番号	種類 器 形	出 土 レ ベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①粘土 ②色調 ③焼成	残存状態 備 考
1	土師器 环	覆土	口 12.2 底 6.8 高 4.2	外面 体部無輪整形後、下位横位施削り、 底部一方向削り。 内部 口縁部～底部施磨き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、黒 色鉱物粒、裸 ③酸化焰	完形。体部外面 に墨書「盛」。
2	土師器 环	覆土	口 12.2 底 6.8 高 4.4	外面 体部無輪整形後、下位横位施削り、 底部一方向削り。 内部 口縁部～底部施磨き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、裸 ②にぶい黄褐色 ③酸化焰	3/4残存。体部 外面に墨書 「盛」。
3	土師器 环	覆土	口 一 底 一 高 一	外面 蔊齒整形。 内部 施磨き後黒色処理。 ①細砂粒、白色粒、黒色粒、裸 ②橙色 ③酸化焰	1/5残存。体部外面に 墨書「盛」か。	
4	土師器 环	覆土	口 一 底 一 高 一	外面 蔊齒整形、体部下位横位施削り。 内部 施磨き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、裸 ②橙色 ③酸化焰	1/5残存。体部 外面に墨書 「中」？
5	土師器 环	覆土	口 一 底 一 高 一	外面無輪整形。 内部 施磨き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、裸 ②橙色 ③酸化焰	破片。
6	土師器 环	覆土	口 一 底 一 高 一	外面無輪整形。 内部 施磨き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、裸 ②橙色 ③酸化焰	破片。
7	土師器 环	覆土	口 一 底 一 高 一	外面無輪整形。 内部 施磨き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、裸 ②橙色 ③酸化焰	破片。
8	土師器 环	覆土	口 一 底 一 高 一	外面 蔊齒整形。 内部 施磨き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、裸 ②橙色 ③酸化焰	破片。
9	土師器 皿	覆土	口 14.3 底 5.8 高 3.4	外面 体部無輪整形後縦位指削り、底部 同軸削り。内部 体部斜横位施削ぎ。 内面 体部斜横位施削ぎ。	①細砂粒、白色粒、裸 ②橙色 ③酸化焰	2/3残存。体部 外面に墨書 「盛」。
10	土師器 皿	覆土	口 14.2 底 5.8 高 2.2	外面 体部無輪整形、底部不定方向手持ち 削削り。内部 体部斜横位施削ぎが風化 により不明瞭、黒色処理。	①細砂粒、白色粒、裸 ②橙色 ③酸化焰	口縁部～底部 1/4残存。
11	土師器 甕	覆土	口(18.8) 底 一 高 一	外面 口縁部横削り、崩形削り。 内部 口縁部横削り、崩形削り。	①細砂粒、白色粒、石 英、雲母 ②橙色 ③普通	口縁部1/3残存。
12	土師器 甕	覆土	口 一 底 8.6	外面 崩部施削り後撫で。 内部 崩部施削で。	①細砂粒、雲母、白 色粒 ②橙色～にぶい赤 褐色 ③普通	崩部下位～底部 残存。
13	鉄製品 瓶			残存長6.2cm、瓶被幅0.55cm、厚さ0.35cm、瓶身は梨形容、先端部は欠損。		



第71図 1・2・3号掘立柱建物

2. 掘立柱建物と柵列

造構

1号掘立柱建物 (第71図 表79)

N 8・9 グリッドに位置する側柱式南北棟建物。平面形式は桁行 3間(6.30m)、梁間 2間(4.20m)で、棟方向は N-3°-W を示す。南妻側の中央柱が妻側面から 0.80m 外側に出ており、片面独立棟持柱建物として復元される。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径 0.55～0.70m、短径 0.45～0.55m、深さ 0.35～0.42m である。柱間寸法は桁行、梁間とも 2.10m(7尺)の等間である。

2号掘立柱建物 (第71図 表79)

O 7 グリッドに位置する純柱建物。平面形式は方 2間(5.10m)で、南北軸は N-13°-W を示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、各柱列の隅柱は内方向に「ハの字」状に開き、規模は長径 0.95～0.55m、短径 0.70～0.45m、深さ 0.18～0.42m である。柱間寸法は 2.55m(8.5尺)の等間である。倉庫建物であろうか。

3号掘立柱建物 (第71図 表79)

M 8 グリッドに位置する側柱式南北棟建物。両妻側に庇が付く。母屋は桁行 3間(5.85m)、梁間 2間(3.90m)で、棟方向は N-3°-W を示す。建物の西面を木根風の柵列(1号柵列)が囲んでおり、塀の存在が予想される。柱掘形は母屋は隅丸長方形平面、庇は北東隅柱を除き円形平面を呈し、庇の柱穴は母屋に比して小さく掘り込まれている。規模は長径 0.55～0.75m、短径 0.42～0.50m、深さ 0.45～0.75m である。柱間寸法は桁行、梁間とも 1.95m(6.5尺)の等間であり、庇の出は北妻側 1.20m、南妻側 1.40m である。

4号掘立柱建物 (第72図 表79)

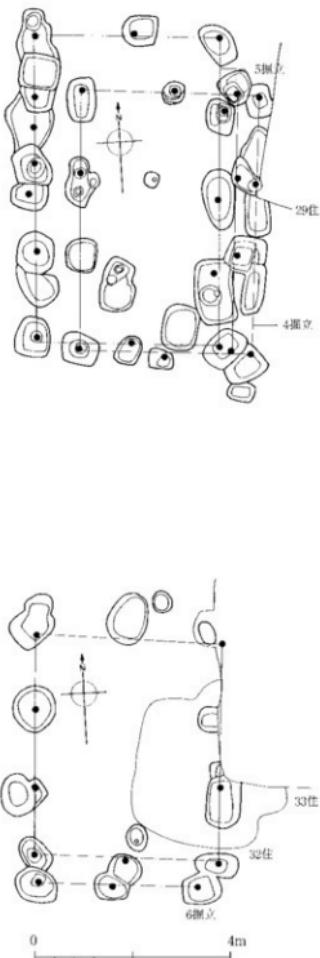
M7グリッドに位置する側柱式南北棟建物で、西平隅に庇が付く。5号掘立柱建物及び29号住居跡と重複しており、新旧関係は29号住居跡より古く、5号掘立柱建物とは判然としない。母屋は桁行3間(5.40m)、梁間2間(3.10m)で、棟方向はN-4°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.92~0.45m、短径0.53~0.43m、深さ0.23~0.50mである。柱間寸法は桁行、梁間とも不揃いであり、庇の出は0.60mと小さい。

5号掘立柱建物 (第72図 表79)

M7グリッドに位置する側柱式南北棟建物。平面形式は桁行4間(6.60m)、梁間2間(3.90m)で、棟方向はN-4°-Wを示す。西柱列は隣り合う柱間に浅く溝が掘り込まれており、いわゆる「溝もち」建物とも考えられるが、同柱列での建て替えゆえかもしれない。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.70~0.85m、短径0.55~0.73m、深さ0.22~0.45mである。柱間寸法は桁行、梁間とも少々バラツクが、各総長を等分すると桁行1.65m(5.5尺)、梁間1.95m(6.5尺)となる。

6号掘立柱建物 (第72図 表79)

M6・7グリッドに位置する側柱式南北棟建物で、南妻側に庇が付く。32・33号住居跡と重複しており、新旧関係は本遺構が古い。母屋は桁行3間(4.50m)、梁間2間(3.60m)で、棟方向はN-2°-Wを示す。柱掘形は不整形な長方形平面を呈し、規模は長径0.75~1.15m、短径0.72~0.52m、深さ0.13~0.38mである。柱間寸法は桁行1.50m(5尺)、梁間1.80m(6尺)の等間であり、庇の出は0.60mと小さい。



第72図 4・5・6号掘立柱建物

7号掘立柱建物 (第73・91図 表79 図版26)

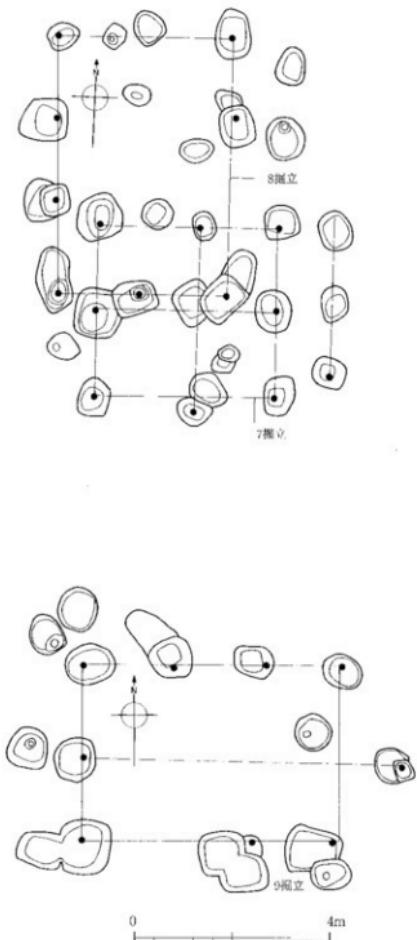
M6・7グリッドに位置する柱立建物で、東面に庇の可能性がある柱穴列が確認されている。8号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形式は東西2間(3.60m)、南北2間(3.60m)で、南北の中央柱は中心から東へ30cm寄っており、主軸は正方位を示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.98~0.78m、短径0.52~0.41m、深さ0.18~0.27mである。柱間寸法は東西で2.10m(7尺)と1.50m(5尺)、南北で1.80m(6尺)の等間となっている。遺物は土師器壺が出土した。

8号掘立柱建物 (第73図 表79)

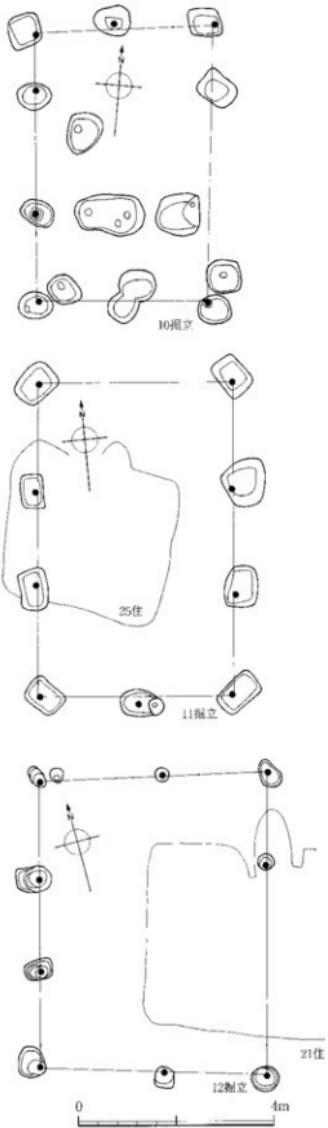
L・M5・6グリッドに位置する側柱式南北棟建物。平面形式は桁行3間(5.40m)、梁間2間(3.60m)で、棟方向は正方位を示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.97~0.65m、短径0.68~0.63m、深さ0.22~0.52mである。柱間寸法は桁行1.50m(5尺)、梁間1.80m(6尺)を基本としているが、少々バラツキがある。

9号掘立柱建物 (第73・91図 表79 図版26)

M・N5グリッドに位置する側柱式東西棟建物。平面形式は桁行3間(5.40m)、梁間2間(3.60m)で、棟方向はN-90°-Eを示す。東妻側の中央柱は妻側柱筋から1.5m外側に出ており、片面独立棟持柱建物として復元される。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.65~1.15m、短径0.95~0.67m、深さ0.18~0.32mである。柱間寸法は桁行、梁間とも1.80m(6尺)の等間である。遺物は須恵器の短頸壺が出士した。



第73図 7・8・9号掘立柱建物



第74図 10・11・12号掘立柱建物

10号掘立柱建物 (第74図 表79)

N5グリッドに位置する側柱式南北棟建物で、棟方向はN-5°-Eを示す。平面形式は桁行3間(5.40m)、梁間2間(3.60m)として復元したが、東柱筋には本来あるであろう柱穴1基が検出されていない。柱洞形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.70-0.78m、短径0.53-0.65m、深さ0.15-0.22mである。柱間寸法は桁行、梁間とも不揃いである。

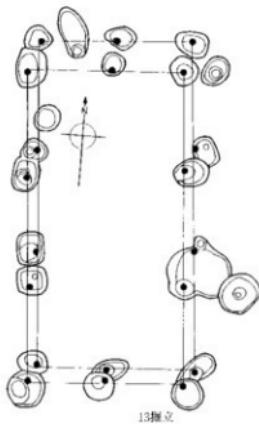
11号掘立柱建物 (第74・91図 表79 図版26)

L13・14グリッドに位置する側柱式南北棟建物。25号住居跡と重複しており、新旧関係は未査定が古い。平面形式は桁行3間(6.30m)、梁間2間(4.20m)で、主軸方向はN-3°-Wを示す。北妻側の中央柱が確認されていないが、南妻側の中央柱が妻側面から柱1本分外側に外れており、片面近接棟持柱建物と推察される。柱洞形は長方形平面を呈し、両妻側の隅柱は内方向に「ハの字」状に開いており、規模は長径0.72-0.92m、短径0.40-0.55m、深さ0.32-0.53mである。柱間寸法は桁行、梁間とも2.10m(7尺)の等間である。遺物は須恵器盤が出土した。

12号掘立柱建物 (第74図 表79)

K・L12グリッドに位置する側柱式南北棟建物。21号住居跡と重複しており、新旧関係は未査定が古い。平面形式は桁行3間(5.85m)、梁間2間(4.50m)で、主軸はN-13°-Wを示す。柱洞形は長方形を意図して掘られているが不整形で、規模は長径0.28-0.55m、短径0.23-0.48m、深さ0.28-0.53mである。柱間寸法は西平側で1.95m(6.5尺)、北妻側で2.25m(7.5尺)の等間となるが、北妻側の中央柱は東側に僅かに寄っている。

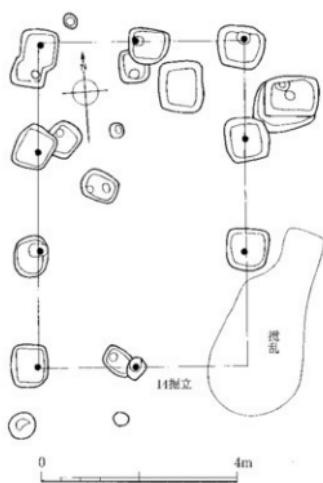
13号掘立柱建物 (第75・91図 表79 図版26)



K11・12に位置する倒柱式南北棟建物。ほぼ同位置で建て替えが行われており、建て替え後では当初より桁行長が約40cm前後縮小している。建て替え後の平面形式は桁行3間(6.30m)、梁間2間(3.30m)で、棟方向はN-3°-Eを示す。柱掘形は長方形を意図して掘られているが不整形であり、規模は長径0.81m、短径2.10m(7尺)、梁間1.65m(5.5尺)となる。遺物は須恵器壺が出土した。

14号掘立柱建物 (第75図 表79)

K・L11グリッドに位置する倒柱式南北棟建物で、攪乱によって南東隅柱が消滅している。平面形式は桁行3間(6.50m)、梁間2間(4.20m)で、棟方向はN-4°-Wを示す。柱掘形は略方形平面を呈し、規模は南妻側の中央柱が径0.35mと小さいが、他は径0.70~0.91m、深さ0.35~0.55mである。柱間寸法は桁行、梁間とも2.10m(7尺)の等間である。



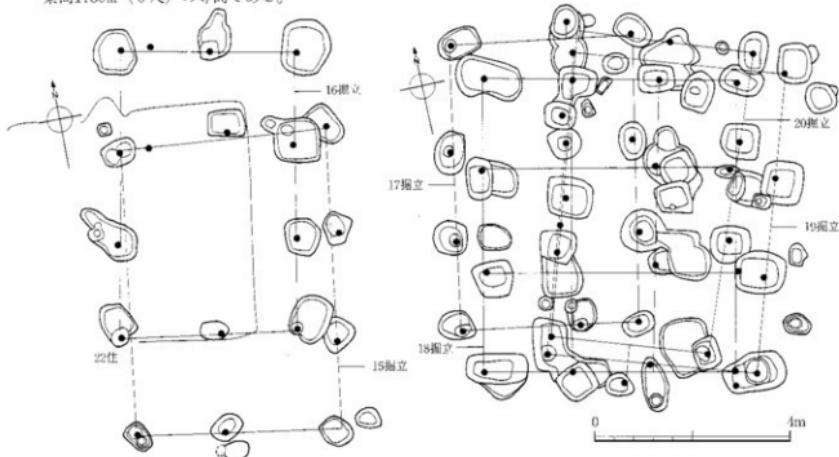
第75図 13・14号掘立柱建物

15号掘立柱建物 (第76・91図 表29)

L・M11・12グリッドに位置する側柱式南北棟建物。22号住居跡及び16号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は22号住居跡より古く、16号掘立柱建物とは判然としない。平面形式は桁行3間（5.85m）、梁間2間（4.20m）で、棟方向はN-10°-Wを示す。柱掘形は長方形を意図して掘られているが不整形で、規模は長径0.50-0.85m、短径0.42-0.58m、深さ0.22-0.55mである。柱間寸法は桁行、梁間とも不揃いである。遺物は須恵器蓋が出土した。

16号掘立柱建物 (第76図 表79)

L11グリッドに位置する側柱式南北棟建物。22号住居跡と重複しており、新旧関係は本遺構が古い。平面形式は桁行3間（5.85m）、梁間2間（3.60m）で、棟方向はN-8°-Wを示す。柱掘形は略方形平面を呈し、規模は長径0.75-1.10m、短径0.50-1.00m、深さ0.25-0.70mである。柱間寸法は桁行1.95m（6.5尺）、梁間1.80m（6尺）の等間である。



第76図 15・16・17・18・19・20号掘立柱建物

17号掘立柱建物 (第76図 表79)

J・K11グリッドに位置する側柱式南北棟建物。20号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形式は桁行3間（5.85m）、梁間2間（3.60m）で、棟方向はN-10°-Wを示す。棟筋は南北の中軸線から東へ0.60m寄っており、北妻側の柱跡は妻側面から約0.30m外側に外れている。したがって、近接棟持柱建物と考えられる。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.65-0.85m、短径0.4-0.55m、深さ0.23-0.35mである。柱間寸法は桁行1.95m（6.5尺）、梁行1.80m（6尺）の等間である。

18号掘立柱建物 (第76図 表79)

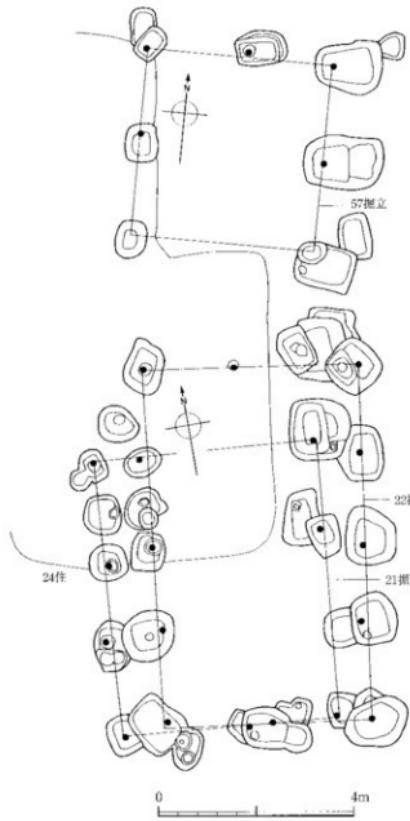
J・K11グリッドに位置する。純柱建物として復元した。19・20号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形式は東西3間（5.40m）、南北3間（5.85m）で、南北軸はN-5°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.85-1.28m、短径0.52-0.65m、深さ0.27-0.53mである。柱間寸法は僅かにバラツクが東西1.80m（6尺）、南北1.95m（6.5尺）を基本としている。

19号掘立柱建物 (第76図 表79)

K11グリッドに位置する側柱式南北棟建物。西柱筋が18号掘立柱建物の棟筋及び20号掘立柱建物の西柱筋と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形式は桁行3間(6.30m)、梁間2間(4.20m)で、棟方向はほぼ正方位を示す。柱掘形は略方形平面を呈し、径0.45~1.1m、深さ0.25~0.53mである。柱間寸法は不揃いであるが、各総長を等分すると桁行、梁間とも約2.10m(7尺)となる。

20号掘立柱建物 (第76図 表79)

K11グリッドに位置する側柱式南北棟建物。平面形式は桁行3間(6.30m)、梁間2間(3.30m)で、棟方向はN-3°-Eを示す。南妻側の中央柱が妻側面から約0.80m外側に外れており、独立棟持柱建物として復元可能である。柱掘形は略方形平面を呈し、規模は径0.5~0.65m、深さ0.18~0.32mである。柱間寸法は僅かに振れがあるものの、桁行2.10m(7尺)、梁間1.65m(5.5尺)となっている。



第77図 21・22・57号掘立柱建物

57号掘立柱建物 (第77図 表80)

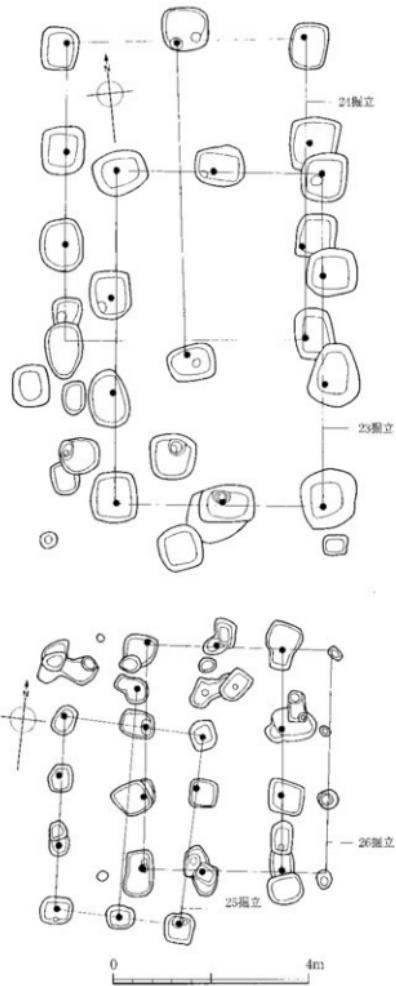
J・K9グリッドに位置する側柱式建物で、南北軸はN-5°-Eを示す。24号住居跡と重複しているが、新旧は判然としない。平面形式は桁方2間(3.90m)であり、南面の中央柱が彫認されていない。柱間寸法は1.95m(6.5尺)の等間である。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.72~1.65m、短径0.65~1.15m、深さ0.45~0.55mである。東側の柱掘形は外方向に長く掘り込まれ、柱位置は内側に寄った位置に建てられている。

21号掘立柱建物 (第77図 表79)

J・K10グリッドに位置する側柱式南北棟建物。22号掘立柱建物及び24号住居跡と重複しており、新旧関係は24号住居跡より古く、22号掘立柱建物とは判然としない。平面形式は桁行3間(5.85m)、梁間2間(4.50m)で、棟方向はN-5°-Wを示す。柱掘形は略方形平面で、規模は径0.43~0.78m、深さ0.22~0.63mである。柱間寸法は不揃いである。

22号掘立柱建物 (第77図 表80)

J・K10グリッドに位置する側柱式南北棟建物。24号住居跡と重複しており、新旧関係は本遺構が古い。平面形式は桁行4間(7.20m)、梁間2間(4.20m)で、棟方向はN-3°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、両妻側の隅柱は内方向に「ハの字」状に開き、規模は長径0.68~1.10m、短径0.55~0.83m、深さ0.55mである。柱間寸法は北妻側の中央柱が0.30m西側に寄っている他は、桁行1.80m(6尺)、梁間2.10m(7尺)の等間である。



第78図 23・24・25・26号掘立柱建物

26号掘立柱建物 (第78図 表80)

K・L9グリッドに位置する個柱式南北棟建物で、東平側に庇が付く。母屋は桁行3間(6.75m)、梁間2間(4.20m)で、棟方向はN-5°-Eを示す。柱振形は母屋で略長方形平面、庇で円形平面を呈し、規模は母屋が長径1.1~1.35m、短径0.6~0.85m、深さ0.3~0.65m、庇が径0.3~0.6m、深さ約0.25mである。柱間寸法は桁行2.25m(7.5尺)、北妻側2.10m(7尺)の等間であり、南妻側の中央柱は西側に0.3m寄って建てられている。

23号掘立柱建物 (第78図 表80)

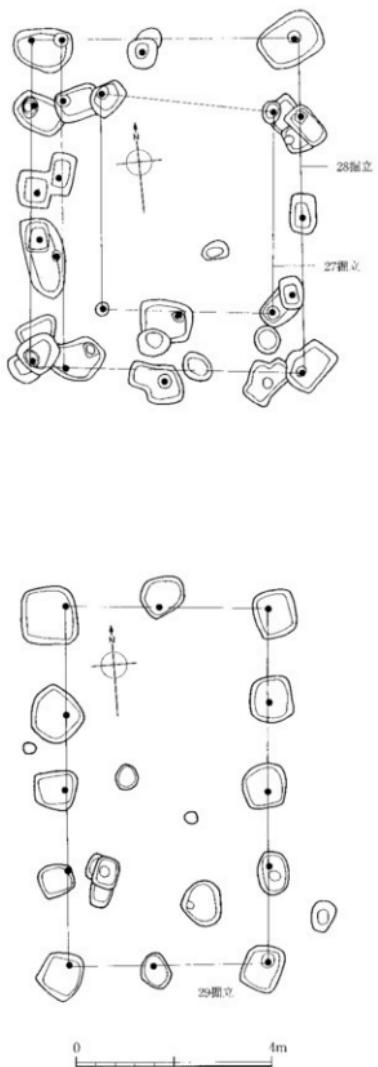
K・L10・11グリッドに位置する個柱式南北棟建物。24号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形式は桁行3間(6.75m)、梁間2間(4.20m)で、棟方向はN-3°-Wを示す。柱振形は略長方形平面を呈し、長径0.95~1.15m、短径0.7~0.85m、深さ0.55m前後である。柱間寸法は桁行2.25m(7.5尺)、梁行2.10m(7尺)の等間である。

24号掘立柱建物 (第78図 表80)

K・L10・11グリッドに位置する個柱式南北棟建物。平面形式は桁行3間(6.30m)、梁間2間(4.80m)で、棟方向はN-6°-Wを示す。北妻側の中央柱が妻側面から外方向へ0.30m外れており、片面近接棟持柱建物として復元される。柱振形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.90~1.10m、短径0.75~0.95m、深さ0.3~0.45である。柱間寸法は桁行2.10m(7尺)、梁行2.40m(8尺)の等間である。

25号掘立柱建物 (第78図 表80)

K・L9・10グリッドに位置する個柱式南北棟建物。26号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形式は桁行3間(5.85m)、梁間2間(4.20m)で、棟方向はほぼ正方位を示す。北妻側の中央柱は妻側面から外側へ1.20m外れており、片面独立棟持柱建物として復元される。柱振形は略方形平面を呈し、規模は径0.65~0.9m、深さ0.25~0.35である。柱間寸法は桁行1.950m(6.5尺)、梁間2.10m(7尺)の等間である。



27号掘立柱建物 (第79図 表80)

K・L 8・9 グリッドに位置する側柱式南北棟建物。28号掘立柱建物と面的に重複しているが、新旧関係は判然としない。28号掘立柱建物と別建物として取り扱ったが、位置関係から同建物の入側柱とも推察される。平面形式は東西2間（3.60m）、南北1間（4.20m）と考えたが、北面に中央柱が無い。

28号掘立柱建物 (第79図 表80)

K・L 8・9 グリッドに位置する側柱式南北棟建物。西側に庇の可能性がある柱穴列が確認されているが、柱痕位置が母屋柱位置と対応していない。母屋は桁行4間（7.00m）、梁間2間（4.80m）で、棟方向はN-3°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.75～1.32m、短径0.45～1.0m、深さ0.15～0.55mである。柱間寸法は桁行、梁間とも不揃いである。

29号掘立柱建物 (第79図 表80)

K・L 7・8 グリッドに位置する側柱式南北棟建物。平面形式は桁行4間（7.20m）、梁間2間（4.20m）で、棟方向はN-3°-Wを示す。柱掘形は略方形平面を呈し、規模は径0.62～1.15m、深さ0.18～0.35である。柱間寸法は不揃いであるが、各部長を等分すると桁行、梁間とも2.10m（7尺）となる。

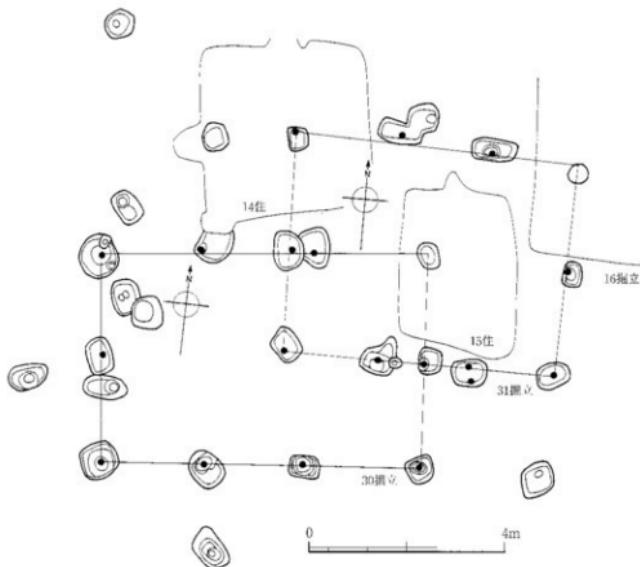
第79図 27・28・29号掘立柱建物

30号掘立柱建物（第80図 表80）

I・J13・14グリッドに位置する側柱式東西棟建物。31号掘立柱建物及び15号住居跡と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形式は桁行3間（6.30m）、梁間2間（4.20m）で、棟方向はN-82°-Eを示す。柱掘形は略方形平面を呈し、規模は長径0.45～0.85m、深さ0.25m前後である。柱間寸法は僅かにバラツクが桁行、梁間とも2.10m（7尺）を基準としている。

31号掘立柱建物（第80図 表80）

I・J13・14グリッドに位置する側柱式東西棟建物。北西隅柱が14号住居跡と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形式は桁行3間（5.40m）、梁間2間（4.50m）で、棟方向はN-3°-Eを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.45～0.74m、短径0.60～0.35m、深さ0.15～0.28mである。柱間寸法は僅かにバラツクが桁行1.80m（6尺）、梁間2.25m（7.5尺）となる。



第80図 30・31号掘立柱建物

32号掘立柱建物（第81・89図 表80 図版26）

H12グリッドに位置する側柱式南北棟建物。33・34号掘立柱建物及び19号住居跡と重複しており、新旧関係は19号住居跡と34号掘立柱建物より古く、33号掘立柱建物より新しい。平面形式は桁行4間（7.20m）、梁間2間（5.10m）で、棟方向はN-4°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、長径0.82～1.32m、短径0.72～0.85m、深さ0.42～0.53mである。柱間寸法は不揃いであるが、各総長を等分すると桁行1.80m（6尺）、梁間2.25m（8.5尺）となる。遺物は須恵器壺、土師器甕が出土した。

33号掘立柱建物（第81・89図 表80）

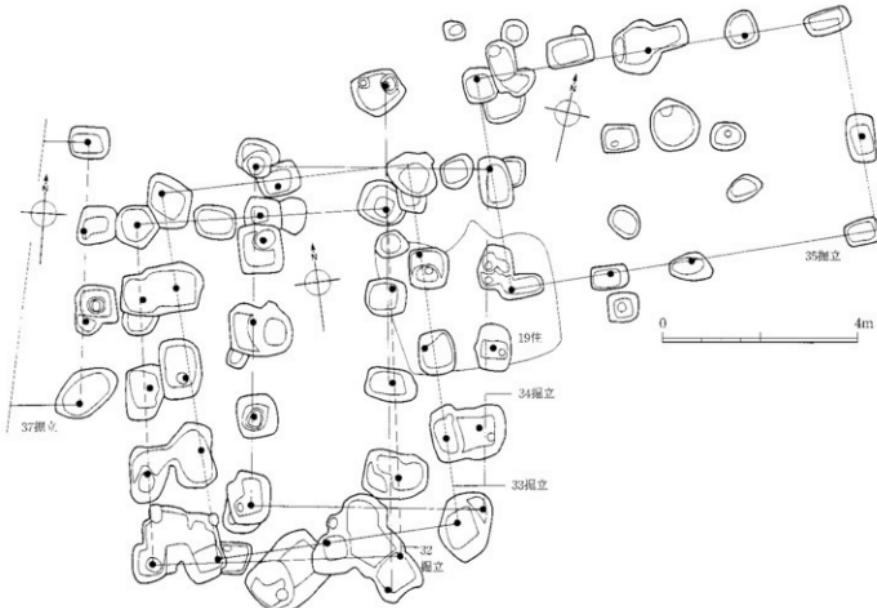
H・II2グリッドに位置する側柱式東西棟建物。32・34号掘立柱建物及び19号住居跡と重複しており、新旧関係は本遺構が古い。平面形式は桁行4間（7.65m）、梁間2間（4.85m）で、棟方向はN-8°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.82-1.22m、短径0.70-0.85m、深さ0.38-0.75mである。柱間寸法は僅かにバラツクが、桁行1.95m（6.5尺）、梁間2.40m（8尺）を基準としている。遺物は須恵器蓋・楕・坏が出土した。

34号掘立柱建物（第81図 表80）

H・II2グリッドに位置する側柱式南北棟建物。32・33・35号掘立柱建物及び19号住居跡と重複関係にあり、新旧関係は19号住居跡より古く、32・33号掘立柱建物より新しく、35号住居跡とは判然としない。両妻側の中央柱は妻側面から1.75m外側に出ており、独立棟持柱建物として復元される。平面形式は桁行4間（7.00m）、梁間2間（4.80m）で、棟方向はほぼ正方位を示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.88-1.05m、短径0.65-0.82m、深さ0.28-0.55mである。柱間寸法は不揃いである。

35号掘立柱建物（第81図 表80）

H11・12グリッドに位置する側柱式東西棟建物で、棟方向はN-80°-Eを示す。北東隅柱が45号住居跡の床下から検出されており、45号住居跡より古い。平面形式は桁行3間（7.60m）、梁間2間（4.30m）と圓形したが不明瞭であり、桁行は4間の可能性もある。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.72-0.95m、短径0.45-0.55m、深さ0.20-0.45mである。柱間寸法は不揃いである。



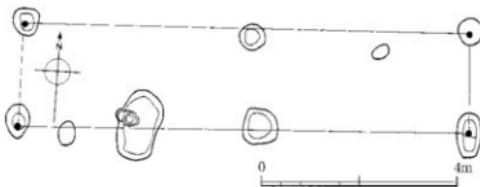
第81図 32・33・34・35・37号掘立柱建物

36号掘立柱建物（第82図 表80）

I・J11グリッドに位置する。東西2間（9.25m）、南北1間（2.10m）側柱式東西棟建物として復元したが不明瞭な遺構であり、東西軸はN-87°-Eを示す。柱掘形は円形もしくは略長方形に掘り込まれており、規模は径0.55～0.92m、深さ0.25～0.32mである。

37号掘立柱建物（第82図 表80）

H12グリッドに位置する。東側柱列（3間）のみが確認されており、一連の柱穴は西側調査区外へ延びていると考えられる。柱穴列は総長5.40mを測り、主軸はN-3°-Eを示す。柱掘形は南隅柱が梢円平面、他は略方形平面を呈し、規模は南隅柱が長径1.25m、短径0.85m、深さ0.35m、他は径0.68～0.75m、深さ0.38～0.62mである。柱間寸法は1.80m（6尺）の等間である。推定ではあるが桁行3間、梁間2間の側柱式南北棟建物跡であろう。



第82図 36号掘立柱建物

38号掘立柱建物（第83-79図 表80 図版26）

G・H11グリッドに位置する。東側柱列（3間）のみが確認されており、一連の柱穴は西側調査区外へ延びていると考えられる。柱穴列は総長5.55mを測り、主軸はN-3°-Wを示し、41号掘立柱建物と柱筋を掘えている。柱掘形は略方形平面を呈し、規模は長径0.95～1.15m、短径0.68～0.90m、深さ0.28～0.40mである。柱間寸法は不揃いである。推定ではあるが桁行3間、梁間2間の側柱式南北棟建物であろう。遺物は土師器壺が出土した。

39号掘立柱建物（第83-79図 表80 図版26）

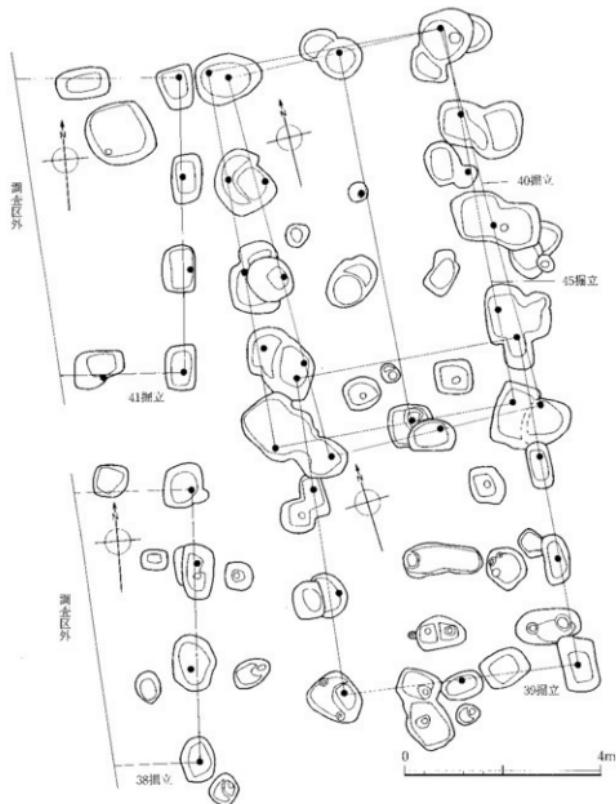
H10・11グリッドに位置する側柱式南北棟建物。40・45号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。北妻側の中央柱は柱筋から内側に柱1本分外れているが、柱材の曲がりゆえと思われる。平面形式は桁行3間（6.55m）、梁間2間（4.80m）で、棟方向はN-12°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.95～1.12m、短径0.45～0.85m、深さ0.40～0.78mである。柱間寸法は桁行、梁間とも不揃いである。遺物は須恵器壺が出土した。

40号掘立柱建物（第83-79図 表80 図版26）

H10・11グリッドに位置する側柱式南北棟建物。45号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形式は桁行4間（8.10m）、梁間2間（4.45m）で、棟方向はN-13°-Wを示す。柱掘形は長方形を意図して掘られているが不整形であり、南妻側の隅柱は内側に「ハの字」状に開いている。規模は長径0.78～1.35m、短径0.62～0.93m、深さ0.52～0.82mである。柱間寸法は桁行、梁間とも不揃いである。遺物は須恵器壺・鏡が出土した。

41号掘立柱建物（第83-89図 表80 図版26）

G10グリッドに位置する南北3間（6.00m）、東西1間（1.70m）以上の割柱式南北棟建物。主軸はN-3°-Wを示し、東柱筋は38号掘立柱建物の東柱筋に揃う。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は径0.95～1.10m、短径0.55～0.63m、深さ0.55～0.75mである。柱間寸法は2.00mを基本に、前後に僅かに振れいる。遺物は須恵器蓋が出土した。



第83図 38・39・40・41・45号掘立柱建物

42号掘立柱建物（第83-79図 表80 図版26）

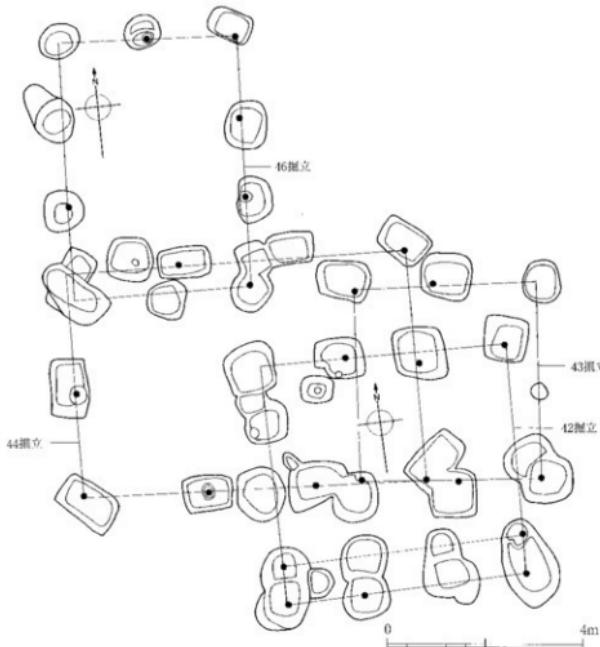
II0・II1グリッドに位置する側柱式東西棟建物で、南側に庇が付く。母屋は桁行3間（5.05m）、梁間1間（4.00m）で、主軸はN-82°-Eを示す。柱掘形は略方形平面を呈し、規模は径0.82～1.15m、深さ0.25～0.48mである。柱間寸法は不明瞭で、庇の出は0.55mと小さい。遺物は須恵器皿が出土した。

43号掘立柱建物（第84・79図 表80 図版26）

H10・11グリッドに位置する側柱式建物で、東西軸はN-5°-Wを示す。44号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は本遺構が新しい。平面形式は東西2間（3.60m）、南北1間（3.90m）で、東西の柱間寸法は描かない。柱掘形は略方形平面を呈し、規模は0.83～0.95m、深さ0.25～0.43mである。遺物は須恵器盤・短頸壺が出土した。

44号掘立柱建物（第84・79図 表80 図版26）

H10・11グリッドに位置する側柱式東西棟建物。42・46号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は本遺構が古い。平面形式は桁行3間（7.00m）、梁間2間（4.80m）で、棟方向はN-79°-Wを示す。柱掘形は長方形平面を呈し、規模は長径0.95～1.32m、短径0.58～0.78mである。柱間寸法は桁行は不揃であるが、梁間は2.40m（8尺）の等間である。遺物は須恵器盤、土師器甕が出土した。



第84図 42・43・44・46号掘立柱建物

45号掘立柱建物（第83・79図 表80 図版26）

H10・11グリッドに位置する側柱式南北棟建物。39・40号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。屋内棟通り中央付近に棟持柱1本が検出されており、屋内棟持建物として復元される。平面形式は桁行4間（7.80m）、梁間2間（4.80m）で、棟方向はN-10°-Eを示す。柱掘形は南西隅柱が整った長方

形を呈するが他は不整形であり、規模は長径0.82~1.30m、短径0.75~0.85m、深さ0.45~0.70mである。柱間寸法は桁行、梁間とも不揃いである。遺物は土師器壺が出土した。

46号掘立柱建物 (第84-79図 表80 図版26)

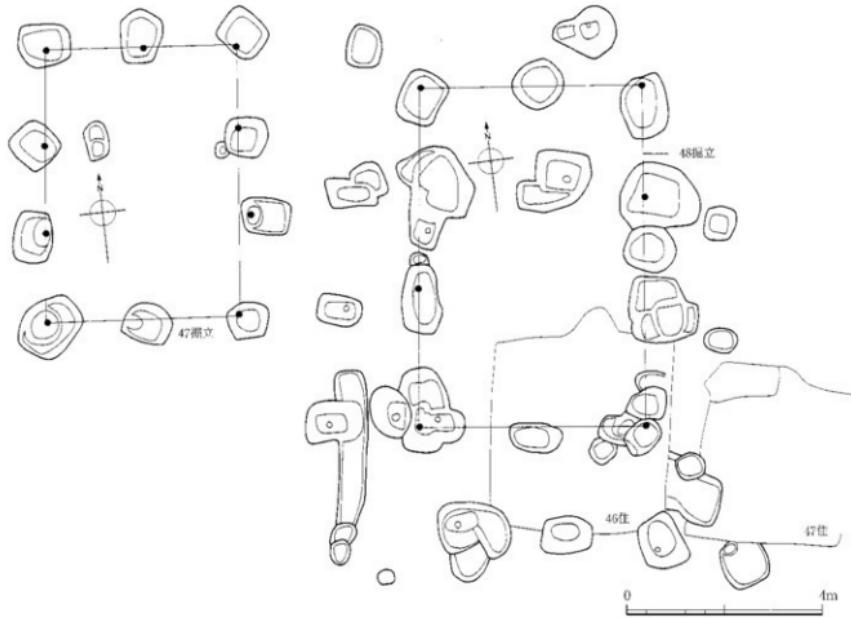
H・III・12グリッドに位置する側柱式南北棟建物。44号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は本遺構が新しい。平面形式は桁行3間(5.10m)、梁間2間(3.60m)で、棟方向はN-5°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.82~1.32m、短径0.65~0.80m、深さ0.40~0.78mである。柱間寸法は桁行1.70m、梁間1.80m(6尺)の等間である。遺物は須恵器壺が出土した。

47号掘立柱建物 (第85-79図 表80 図版26)

I・J9・10グリッドに位置する側柱式南北棟建物。平面形式は桁行3間(5.40m)、梁間2間(3.90m)で、棟方向はN-5°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.95~1.32m、短径0.78~0.85m、深さ0.30~0.45mである。柱間寸法は僅かにバラツクが、桁行1.80m(6尺)、梁間1.95m(6.5尺)を基本とする。遺物は須恵器皿が出土した。

48号掘立柱建物 (第85-79図 表80 図版26)

G・H9グリッドに位置する南北棟建物。46号住居跡と重複しており、新旧関係は本遺構が古い。柱位置が捉えきれず定かではないが、平面形式は桁行3間(6.90m)、梁間2間(4.80m前後)で、棟方向はN-7°-W



第85図 47・48号掘立柱建物

と推察される。柱掘形は略方形平面を呈し、規模は長径0.95～1.45m、短径0.55～0.75m、深さ0.55～0.78mである。柱間寸法は桁行、梁間とも不明である。遺物は須恵器壺・蓋・高壺・鉢、土師器皿が出土した。

49号掘立柱建物（第86-90図 表80 図版26）

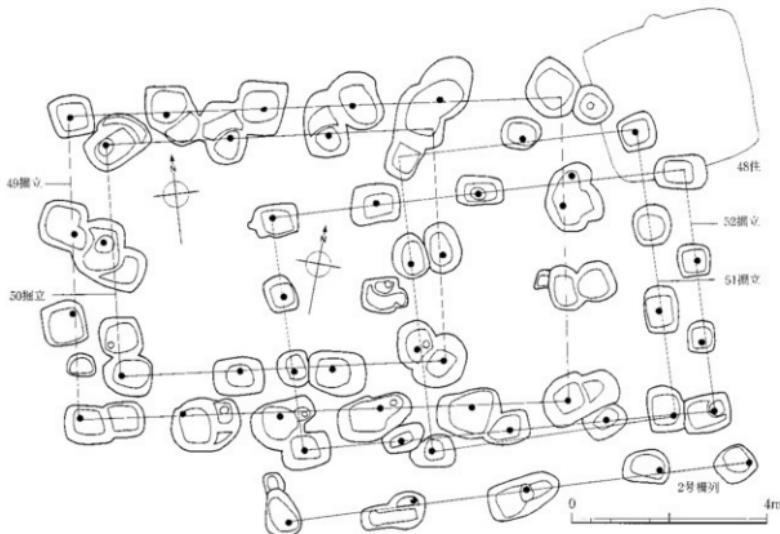
I・H 8・9グリッドに位置する偏柱式東西棟建物。50・51・52号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は本造構が古い。平面形式は桁行5間（10.00m）、梁間3間（6.15m）で、棟方向はN-85°-Wを示す。柱掘形は略方形平面を呈し、規模は径0.93～1.25m、深さ0.55～0.85mである。柱間寸法は桁行、梁間とも不揃いであるが、桁行は2.00mを境に前後に揃っている。遺物は須恵器盤が出土した。

50号掘立柱建物（第86-90図 表80 図版26-29）

II・I 8・9グリッドに位置する偏柱式東西棟建物。49・51・52号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は49号掘立柱建物より新しく、他とは判然としない。平面形式は桁行3間（6.65m）、梁間2間（4.80m）で、棟方向はN-83°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.95～1.32m、短径0.65～0.93m、深さ0.32～0.70mである。柱間寸法は不揃いであり、桁行中央を1.95m（6.5尺）と両脇より0.35～0.40m狭めている。遺物は須恵器壺・蓋が出土した。

51号掘立柱建物（第86図 表80 図版26）

I・J 8・9グリッドに位置する偏柱式南北棟建物で、南妻側の中央柱が確認されていない。50・52号掘立柱建物及び48号住居跡と重複しており、新旧関係は判然としない。平面形式は桁行3間（5.85m）、梁間2間（4.80m）で、棟方向はN-83°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.85～0.98m、短径



第86図 49・50・51・52号掘立柱建物・2号構列

0.62～0.72m、深さ0.42～0.55mである。柱間寸法は桁行は不揃いであるが、梁間は2.40m（8尺）の等間ではなかろうか。遺物は須恵器壺が出土した。

52号掘立柱建物（第86図 表80）

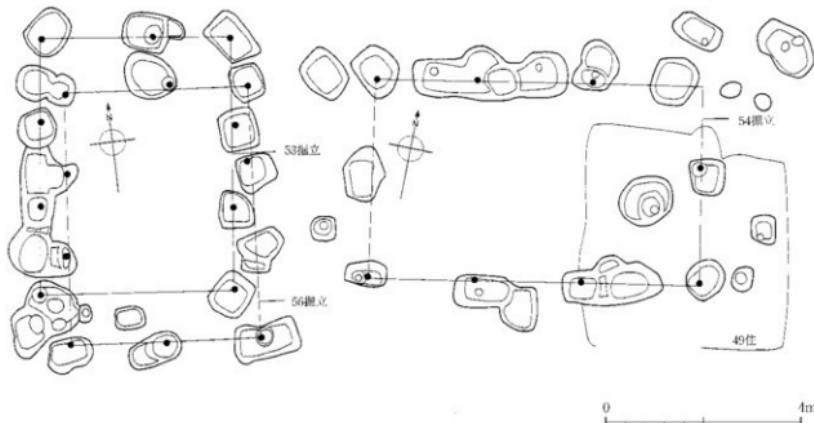
1・J 9グリッドに位置する側柱式東西棟建物。49・50・51号掘立柱建物及び48号住居跡と重複しており、新旧関係は49号掘立柱建物より新しく、他とは判然としない。南平側から1.30m離れた位置に、塀と考えられる1条の柱列（2号柵列、4間・9.62m）が確認された。平面形式は桁行4間（8.40m）、梁間2間（4.95m）で、棟方向はN-81°-Eを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.65～1.10m、短径0.55～0.81m、深さ0.32～0.82mである。柱間寸法は桁行2.10m（7尺）、梁間1.65m（5.5尺）の等間である。

53号掘立柱建物（第87-90図 表80 図版26）

G・H 8グリッドに位置する側柱式南北棟建物で、南妻側の中央柱は不明である。56号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形式は桁行3間（5.10m）、梁間2間（3.90m）で、棟方向はN-5°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.92～1.36m、短径0.57～0.73m、深さ0.52～0.58mである。柱間寸法は桁行、梁間とも不揃いである。遺物は土師器壺、須恵器鉢が出土した。

54号掘立柱建物（第87図 表80）

I7・8グリッドに位置する側柱式東西棟建物。49号住居跡と重複しているが、新旧関係は本遺構が新しい。南東隅柱は東柱筋から大きく外れ、各柱間寸法も不揃いである。平面形式は桁行3間（6.75m）、梁間2間（4.00m）で、棟方向はN-82°-Eを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.75～1.25m、短径0.55～0.85m、深さ0.25～0.43mである。柱位置が明瞭に捉えられていないため定かではないが、平側の一部には柱間に浅い溝が掘り込まれており、「溝持ち」の手法が用いられている可能性がある。



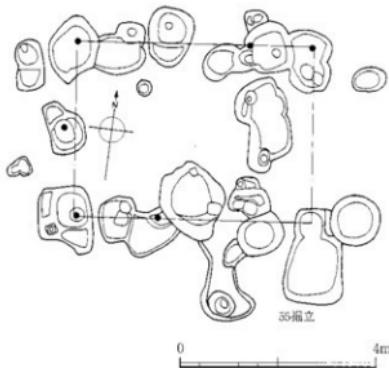
第87図 53・54・56号掘立柱建物

55号掘立柱建物 (第88-90図 表80 図版26・29)

I・J6・7 グリッドに位置する側柱式東西棟建物。南妻側の中央柱が確認されておらず、西妻側の中央柱は妻側面から柱1～2本分外側に外れている。この外れは柱材の曲がりゆえとも思われるが、可能性としては片面近棟当持柱建物とも思われる。平面形式は桁行3間(4.80m)、梁間2間(3.60m)で、棟方向はN-82°-Eを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.85～1.12m、短径0.75～1.05m、深さ0.40～0.55mである。柱間寸法は桁行は不揃いであるが、梁間は1.80m(6尺)の等間である。遺物は土師器壺、須恵器鉢が出土した。

56号掘立柱建物 (第87図 表80)

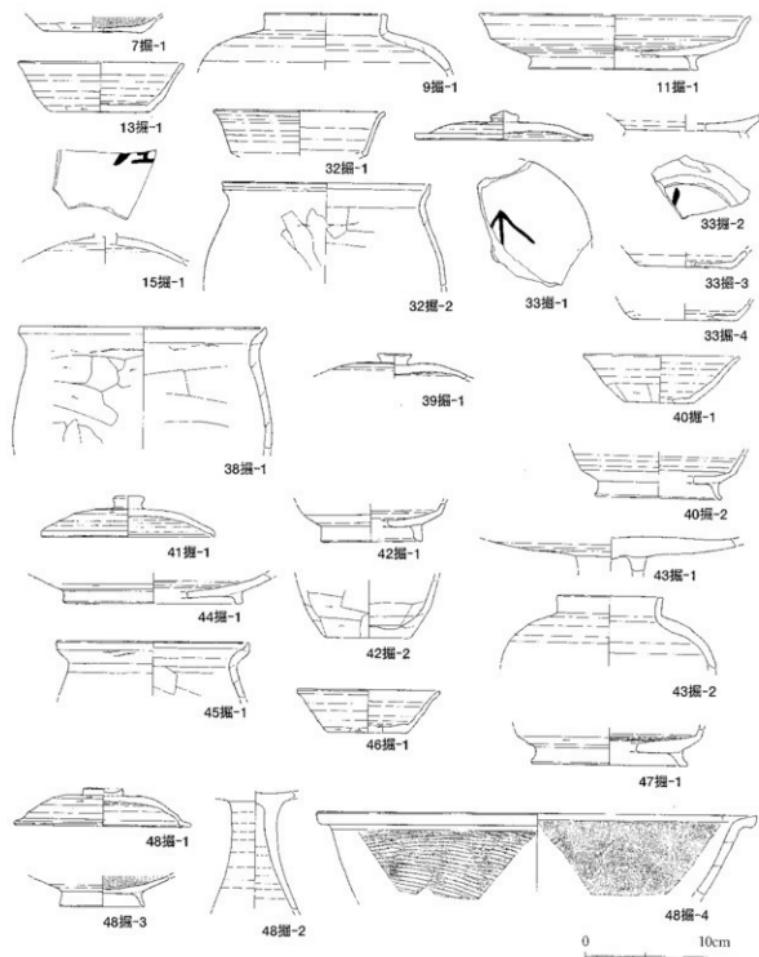
G・H8 グリッドに位置する側柱式南北棟建物。53号掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は判然としない。平面形式は桁行3間(5.15m)、梁間2間(3.85m)で、棟方向はN-7°-Wを示す。柱掘形は略長方形平面を呈し、規模は長径0.95～1.33m、短径0.55～0.98m、深さ0.38～0.55mである。柱間寸法は不揃いである。



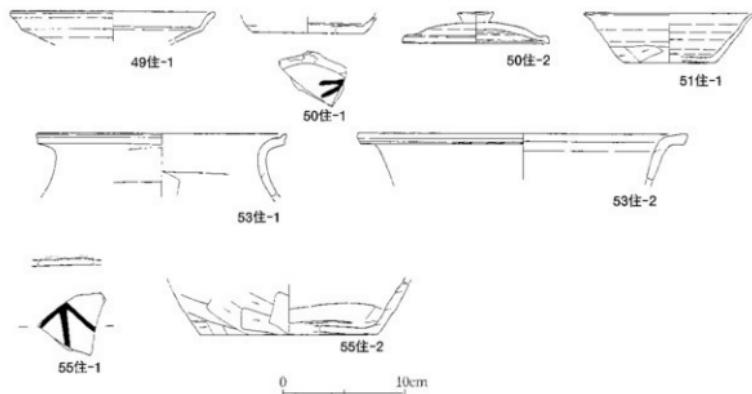
第88図 55号掘立柱建物

遺物

遺物は全て柱掘形から出土したものであり、量的には僅かであった。しかし、建物跡の機能年代の上限を知り得る貴重な資料である。



第89図 挖立柱建物出土遺物(1)



第90図 据立柱建物出土遺物(2)

表53 7号据立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 部位 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土器 环	口 - 底(8.0) 高 -	外面 体部下位横位窪削り、底部一方向手持ち施削り。 内面 範囲き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色～黒色 ③酸化焰	底部1/4残存。

表54 9号据立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 部位 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 短鉗蓋	口 10.0 底 - 高 -	外面 底部輪縫整形。 内面 底部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰色～灰黄色 ③酸化焰	口縁部1/4残存。

表55 11号据立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 部位 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 盤	口(22.2) 底(13.8) 高 1.7	外面 体部輪縫整形、底部回転窪削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、雲母 ②灰色 ③還元焰	1/3残存。

表56 13号据立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 部位 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 环	口(13.4) 底 8.2 高 4.1	外面 体部輪縫整形、下位横位窪削り、 底部回転窪削り後手持ち施削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③還元焰	2/5残存。

表57 15号据立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 部位 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	口 - 紐 - 高 -	外面 体部輪縫整形、天井部右回転窪削り。 内面 体部輪縫整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	大井部破片。 外側に墨書き。

表58 32号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 壺		口(14.0) 底 - 高 -	外面 体部輪縁整形。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	口縁部破片。
2	土器 壺		口(17.0) 底 - 高 -	外面 口縁部横拂で、肩部捺拂で。 内面 口縁部横拂で、肩部横位捺拂で。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③還元焰 ④普通	口縁部一肩部上位1/8残存。

表59 33号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 壺		口 14.4 縁 - 高 2.3	外面 体部輪縁整形、大井部右肩軋削 り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、黒 色鉛物粒、礫 ②灰黄色 ③還元焰	1/4残存。大井 部内面に墨書き 「↑」か。
2	須恵器 壺		口 - 底 - 高 -	外面 輪縁整形、高白貼付後軋削で。 内面 輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、黒 色鉛物粒、礫 ②灰黄色 ③還元焰	底部破片。
3	須恵器 壺		口(7.5) 底(7.5) 高 -	外西 体部輪縁整形、下位手持ち窓削り、 底部一方向手持ち窓削り。 内面 輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	底部1/6残存。
4	須恵器 壺		口(8.5) 底(8.5) 高 -	外西 体部輪縁整形、底部施切り後手持 ち窓削り。 内面 輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③還元焰	1/5残存。

表60 38号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土器 壺		口(20.0) 底 - 高 -	外面 口縁部横拂で、肩部窓削り。 内面 肩部横位窓拂で。	①細砂粒、雲母、石英 ②灰色 ③普通	肩部下位一肩部 1/5残存。

表61 39号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 壺		口 - 縁 2.7 高 -	外面 体部輪縁整形、大井部右肩軋削剝 り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	1/4残存。口縁 部に欠損。

表62 40号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 壺		口(12.8) 底(5.8) 高 4.0	外面 体部輪縁整形、下位横位窓削り、底 部手持ち窓削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	1/4残存。
2	須恵器 高台壺		口 - 底(10.0) 高 -	外西 体部輪縁整形、底部回転窓切り。 内面 体部輪縁整形、底部高台貼付時拂 で。	①細砂粒、白色粒、石英 ②灰色 ③還元焰	下位1/4残存。

表63 41号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 壺		口(14.2) 縁 1.6 高 3.4	外面 体部輪縁整形、天井部右肩軋削剝 り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、雲 母、礫 ②灰色 ③還元焰	1/3残存。

表64 42号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 壺		口 - 底 11.0 高 -	外面 体部輪縁整形。 内面 体部輪縁整形、底部高台貼付時拂 で。	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	体部 - 高台1/8 残存。

表65 43号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 レベル	出土 位置 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴			残存状態 備考
				外面部	内面部	成・整形技法の特徴	
1	須恵器 高盤	口一 底一 高一		複雑整形。 内面 横軸整形。		①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	壇部1/5残存。
2	須恵器 短原蓋	口(8.4) 底一 高一		外面部 脚部輪軸整形。 内面 制部輪軸整形。		①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	口縁部-脚部上位1/4残存。

表66 44号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 レベル	出土 位置 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴			残存状態 備考
				外面部	内面部	成・整形技法の特徴	
1	須恵器 盤	口一 底(14.0) 高一		体部輪軸整形、下位右回転削り、 底部右回転削り。 内面 橫軸整形、高台貼付時撫で。		①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③還元焰、やや軟質	体部-高台1/6 残存。
2	土師器 甕	口一 底7.0 高一		外面部 脚部下位横削り。 内面 脚部撫撫で。		①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰黄褐色-橙色 ③普通	脚部下位-底部 残存。底部に小 薬痕。

表67 45号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 レベル	出土 位置 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴			残存状態 備考
				外面部	内面部	成・整形技法の特徴	
1	土師器 甕	口(15.6) 底一 高一		口縁部横削り、脚部撫撫で。 内面 口縁部横削り、脚部撫撫で。		①細砂粒、白色粒、雲母 ②橙色 ③普通	口縁部1/4残存。

表68 46号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 レベル	出土 位置 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴			残存状態 備考
				外面部	内面部	成・整形技法の特徴	
1	須恵器 坏	口(11.6) 底(6.6) 高3.5		体部輪軸整形、下位横削り右回転 削り、底部-方向手持ち鋸削り。 内面 体部輪軸整形。		①細砂粒、白色粒、黒 色粒、雲母 ②橙色 ③還元焰	1/6残存。

表69 47号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 レベル	出土 位置 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴			残存状態 備考
				外面部	内面部	成・整形技法の特徴	
1	須恵器 蓋	口一 底(12.8) 高一		体部輪軸整形、下位横削り右回転 削り、底部-方向手持ち鋸削り。 内面 体部輪軸整形、高台貼付時撫で。		①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③還元焰	底部1/4残存。

表70 48号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 レベル	出土 位置 レベル	計測値 (cm)	成・整形技法の特徴			残存状態 備考
				外面部	内面部	成・整形技法の特徴	
1	須恵器 蓋	口14.4 紐3.0 高3.1		体部輪軸整形、天井部右回転施削 り。 内面 体部輪軸整形。		①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰色 ③還元焰	1/3残存。
2	須恵器 坏	口一 底一 高一		外面部 脚部輪軸整形。 内面 脚部輪軸整形。		①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	脚部残存。
3	土師器 皿	口一 底6.8 高一		外面部 体部輪軸整形、底部回転撫で。 内面 磨き後墨色処理、底部高台貼付 時撫で。		①細砂粒、白色粒、雲母 ②にぶい墨色-墨色 ③酸化焰	底部残存。
4	須恵器 鉢	口(36.0) 底一 高一		外面部 体部輪軸整形。 内面 体部輪軸整形。		①細砂粒、雲母、石英 ②黒褐色 ③還元焰	口縁部1/7残存。

表71 49号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 レベル	出土 計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 壺	口(16.5) 底 - 高 -	外面 体部輪縁整形。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	口縁部1/8残存。

表72 50号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 レベル	出土 計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 壺	口 - 底(9.2) 高 -	外面 体部輪縁整形後、下位横位箝削り、 底部手持ち箝削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②褐色 ③酸化焰	底部破片。外面 に墨書。
2	須恵器 壺	口 12.0 底 3.0 高 2.6	外面 体部輪縁整形。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒、鞣 ②灰色 ③還元焰	口縁部一部欠 損。

表73 51号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 レベル	出土 計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	須恵器 壺	口(13.0) 底(7.0) 高 4.8	外面 体部輪縁整形、下位横位箝削り、 底部手持ち箝削り。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、白色粒 ②灰色 ③還元焰	2/5残存。

表74 53号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 レベル	出土 計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土器器 鉢	口 20.4 底 - 高 -	外面 口縁部横撫で。 内面 口縁部横撫で、胴部撫で。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰褐色～にぶい赤褐色 ③弁通	口縁部一部残存。
2	須恵器 鉢	口 27.0 底 - 高 -	外面 口縁部横撫で、体部平行叩き。 内面 体部輪縁整形。	①細砂粒、鞣、雲母 ②灰色 ③還元焰	口縁部一部残存。

表75 55号掘立柱建物出土遺物観察表

番号	種類 器種 レベル	出土 計測値 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
1	土器器 鉢	口 - 底 6.2 高(1.3)	外面 体部輪縁整形、底部一方向箝削り。 内面 底部施磨き後黒色処理。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②赤鉄物粒、鞣③褐色 ③酸化焰	底部1/2残存。
2	須恵器 鉢	口 - 底 14.4 高 -	外面 体部下位横位箝削り、底部器面の 荒れにより不明瞭。 内面 体部施磨き。	①細砂粒、白色粒、雲母 ②灰褐色～灰白色 ③酸化焰気味	下位1/4残存。

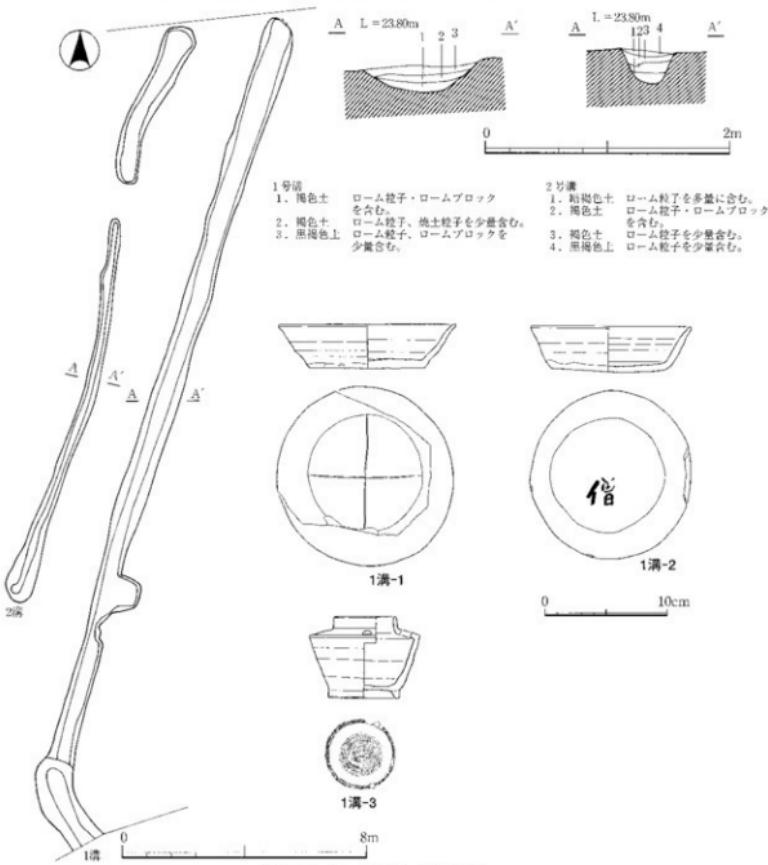
3. 溝

1号溝 (第91図 図版18・26・29)

調査区域の南東縁に位置し、地形の傾斜変化点に沿って構築されている。2号溝と並走しており、2号溝との相互間連が窺われる。規模は長さ24.50m、幅0.72~1.20m、深さ0.20~0.45mで、埋土は3層に分層可能な自然堆積土である。推測ではあるが本溝は、本来は2号溝と共に台地の周縁を大きく回続していたのではないかろうか。遺物は須恵器壺・短頸壺が出土している。

2号溝 (第91図 図版18)

1号溝の内側に構築されており、1号溝との距離は内寸で1.85~2.45mである。規模は1号溝より小さく掘り込まれており、長さ21.20m、幅0.42~0.95m、深さ0.23~0.35mである。また、溝の中央北寄りに、幅約1.20mの掘り残し部分（土橋？）が認められた。遺物は無かった。



第91図 1・2号溝・出土遺物

表76 1号溝出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土 レベル	計測値 (cm)	成・彩法の特徴		①鉛土 ②色調 ③焼成	残存状態 備考
				外面	内部		
1	須恵器 壺		口(14.6) 底 9.5 高 4.6	外面 体部橢円整形後下位横位窓削り、 底部右側斜切り後手持ち施拂で。 内面 体部橢円整形。		①細砂粒、白・褐色粒、 ②灰~灰黄色 ③還元焰	2/3残存。底部 外面に焼成前の 施拂。
2	須恵器 壺		口 13.0 底 9.4 高 3.7	外面 体部橢円整形後下位横位窓削り、 底部同純窓切り後手持ち窓削り。 内面 体部橢円整形。		①細砂粒、白色粒 ②にぶい橙~黒色 ③飛化焰	ほぼ完形。 底部外面に墨 青。
3	須恵器 短腹壺		口 5.1 底 5.6 高 6.7	外面 脚部橢円整形、底部右側斜切り。 内面 脚部橢円整形。		①細砂粒、白・黒色粒 ②灰色 ③還元焰	完形。肩部に4 個の焼成前穿 孔。

4. 井戸跡

1号井戸跡（第92図 図版17）

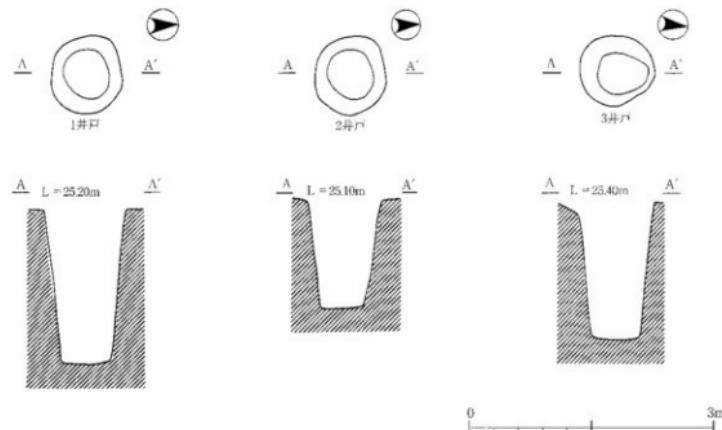
調査区の北西縁に位置し、聯穴式住居や掘立柱建物が密集する区域から距離を隔てている。何れの井戸跡も基底部までは掘り切れていない。円筒形の素掘り井戸で、規模は開口部径0.95m、底部径0.62m、深さ1.95m以上を測る。遺物は無かった。

2号井戸跡（第92図 図版17）

1号井戸跡から西側に約3m離れた場所に鑿井されている。円筒形の素掘井戸で、規模は開口部0.85m、底部径0.55m、深さ1.34m以上を測る。遺物は無かった。

3号井戸跡（第92図 図版17）

2号井戸跡から南西方向に約13.5m離れた場所に鑿井されている。円筒形の素掘井戸で、規模は開口部径0.85m、底部径0.52m、深さ1.85m以上を測る。遺物は無かった。



第92図 1・2・3号井戸跡

表77 奈良・平安時代住居跡一覧表（1）

住居 番号	位 置 (グリッド)	規 模 (長×幅×高さ) ¹⁾	主軸方向	カマド 位 置	半柱 位 置 (本)	周 溝	駄口部 位 置	備 考
1	L17	3.70×2.80,10.36	N18°W	北壁中央	-	全周	南壁中央	9世紀前半
2	K-L15	3.90×2.55,8.40	N95°E	東壁中央	-	-	西壁中央	10世紀前半
3	L15	3.25×2.75,8.93	N9°E	北壁中央	-	全周	北寄り	9世紀前半
4	M-N14-15	5.30×3.74,19.82	N18°W	北壁中央	6	北・南壁	-	51号住居を切り込んでいる。カマドの東脇に土坑を有する。9世紀後半
5	L15	5.30×5.10,27.00	N6°E	北壁中央	4	全周	-	8世紀後半
6	J14-15	4.65×4.60,21.30	N7°W	北壁中央	4	全周	南壁中央	カマドの東脇に底部が平坦な土坑を有する。9世紀前半
7	J14	3.75×3.00,11.30	N3°W	北壁中央	-	-	-	9世紀後半
8	L14	3.95×2.95,11.60	N3°W	北壁中央と 東壁中央	-	東・西・南壁	-	床面中央附近から小鐵冶跡を検出。9世紀前半
9	L13-14	4.80×4.30,20.60	N15°W	北壁中央	4	全周?	南壁中央	11号住居に切り込まれている。 9世紀前半
10	M-N14	2.90×2.45,7.10	N27°E	-	-	-	-	9号住居を切り込んでいる。9世紀後半
11	M13-14	4.75×4.55,21.60	N15°W	北壁中央	-	-	-	-
12	M-N13	2.95×2.85,8.40	N15°W	北壁中央	-	東・南壁	南壁中央	9世紀前半
13	I-1	3.05×2.95,8.99	N14°W	北壁中央	-	-	南壁中央	9世紀後半
14	I13	3.25×2.95,9.58	N12°W	北壁中央	-	全周	南壁中央	31号掘立と重複関係にあるが、 新旧関係は判然としない。9世紀前半
15	J13	3.30×2.30,7.39	N7°W	北壁中央	-	-	-	30号掘立と重複関係にあるが、 新旧関係は判然としない。
16	J13	3.30×3.30,14.4	N4°W	北壁中央	4?	全周	南壁中央	31号掘立を切り込んでいる。半柱 本を隣接してある。9世紀後半
17	J14	-	N8°W	北壁中央	-	東・南壁	南壁中央	43号住居に切り込まれている。
18	M10-J11	-	N118°W	東壁中央	-	-	-	大きな削平を受けている。
19	H-II2	3.30×2.55,8.41	N14°W	北壁中央	-	-	南壁中央	32~35号掘立を切り込んでいる。 9世紀後半
20	II2	3.70×2.45,9.06	N2°E	北壁中央	-	-	南壁中央	35号掘立を切り込んでいる。創 設施跡が付く。9世紀後半
21	L12	4.10×3.55,13.73	N12°W	北壁中央	2?	西・東壁	南壁中央	12号掘立を切り込んでいる。9 世紀前半
22	L11	5.05×4.95,25.99	N8°W	北壁中央	-	-	-	15~16号掘立を切り込んでいる。 10世紀前半
23	J9	5.15×5.05,26.00	N4°E	北壁中央	4	西・北壁	南壁中央	24号住居を切り込んでいる。9 世紀後半
24	J-K9-10	5.55×4.95,27.47	N1°W	北壁中央	4	全周	南壁中央	21~22号掘立を切り込み、23号 住居に切り込まれている。9世 紀後半
25	L13	3.25×2.95,9.58	N5°E	北壁中央	-	-	-	11号掘立を切り込んでいる。9 世紀後半
26	O9-10	2.30×2.25,5.17	N8°E	北壁中央	-	西・東・南壁	-	9世紀代?
27	O-P9	3.65×3.47,12.66	N3°E	北壁中央	4?	-	南壁中央	9世紀前半
28	P6	3.10×2.95,9.14	N6°E	北壁中央	-	全周	南壁中央	西壁に接して方形平面の土坑 が付帯している。9世紀後半
29	M7	3.35×3.23,10.82	N5°E	北壁中央	-	-	南壁中央	4号掘立に方形平面の土坑 が付く。9世紀後半
30	M6	5.15×5.05,26.00	N4°W	北壁中央の 後東壁中央	4	東・北壁	-	柱頭形は略方形平面を呈する。 9世紀後半
31	O5-6	4.75×4.23,20.09	N95°E	東壁中央	4	全周	-	9世紀後半
32	M6-7	2.53×2.50,6.32	N97°E	東壁中央	-	-	西壁中央	33号作居と6号掘立を切り込ん でいる。10世紀代?
33	M6	4.45×3.63,16.15	N4°W	北壁中央	4	全周	-	32号作居に切り込まれ、34号作 居を切り込んでいる。9世紀前 半
34	M6	2.03×1.97,4.99	N8°E	北壁中央 東寄り	-	-	-	33号住居を切り込んでいる。
35	N5-6	3.05×2.95,8.99	N10°E	北壁中央	-	-	南壁中央	8世紀前半
36	J-K7	4.65×4.47,20.78	N7°E	北壁中央	-	全周	-	37号住居を切り込んでいる。9 世紀前半
37	J-K7	5.70以上×7.20, 41.04以上	N2°W	北壁	4?	北・南壁	南壁	37号住居に切り込まれている。 壁面が付帯する。8世紀後半
38	K6-7	3.10×2.95,9.14	N8°E	北壁中央	-	-	-	-

表78 奈良・平安時代住跡一覧表（2）

住居 番号	位 置 (グリッド)	規 格 (長幅×短幅(m), 高さ(m))	主軸方向	カマド 位 置	天柱 (本)	周溝	竪柱 位 置	備 考
39	K-L6	-	-	-	-	-	-	前平によって遺構の大半が消滅している。
40	M9-10	2.92×2.65, 7.73	N63°E	北東隅	-	-	西北北東り 南壁中央	本築跡長人の敷式平住居。整柱と支柱が付帯している。9世紀前半
41	J-K8-9	7.13×6.55, 46.83	N7°W	北壁中央 西寄り	6	はは全周	-	後乱によって裏柱の人が削滅し、遺存は約1/3程度。9世紀前半
42	M12-13	-	-	-	4?	-	-	後乱によって裏柱の人が削滅し、遺存は約1/3程度。9世紀前半
43	J14	2.93×2.85, 8.48	N2°W	北壁中央 東寄り	東・西・南壁	-	南壁中央	17号住居を切り込んでいる。10世紀前半
44	I5	3.30×3.25, 10.72	-	-	東・西・南壁	-	-	後乱によって人気な変形を受けている。9世紀後半。
45	H-18-9	3.97×2.42, 9.60	N13°E	北壁中央 西寄り	-	-	-	35号立を切り込んでいる。9世紀後半。
46	H9	3.55×3.12, 11.07	N3°W	北壁中央 東寄り	-	はは全周	南壁中央	48号掘垣柱を切り込んでいる。
47	H9	3.28×3.10, 10.16	N4°E	-	東・南壁	-	-	9世紀後半。
48	I-J8-9	3.08×2.87, 8.83	N13°W	北壁中央	-	-	-	SB31と重複関係があるが、新旧関係は不明。
49	I8	4.05×3.82, 15.47	N5°W	北壁中央 東寄り	4?	はは全周	-	SB34を切り込んでいる。10世紀前半。
50	H8	5.78×5.65, 32.65	N2°W	北壁中央 に2基	4	東・西・南壁	南壁中央	5号の柱は、消あるいは交叉に使用されたとされる。9世紀後半。
51	M-N14-I5	3.55以上×2.20以上 7.81以上	-	-	全周	-	-	SD04と重複関係があり、本遺構が古い。9世紀前半以前。

表79 奈良・平安時代掘立柱建物一覧表（1）

遺構 番号	位 置 (グリッド)	桁行×梁間 (部長) (m)	柱間寸法(足) (部長) (m)	梁間寸法(足) (部長) (m)	平面積 (m ²)	方 位	平 面 形 式	備 考
1	N8-9	3(6.30)×2(4.20)	2.10(7)	2.10(7)	26.46	N3°W	矧杆人南北造建物、片足柱式南北造建物	
2	07	2(5.10)×2(5.10)	2.55(8.3)2	2.55(8.5)	26.10	N13°W	矧杆造物、方2間	仓库風造物
3	M8	3(5.80)×2(3.90)	1.95(6.5)3	1.95(6.5)	22.62	N3°W	偶柱式南北造建物、奥妻脚に庇が付く	木模風の闇列が伴う。
4	M7	3(5.40)×2(3.10)	不摘要	不摘要	16.74	N4°W	偶柱式南北造建物、四平構造、庇が付く	「満持ち」造物の可能性がある
5	M7	1(6.60)×2(3.90)	1.65(5.5)4	1.95(6.5)	25.74	N4°W	偶柱式南北造建物	
6	M6.7	3(4.50)×2(3.60)	1.50(5)	1.80(6)	16.20	N2°W	偶柱式南北造建物、奥妻脚に庇が付く	23-33号住居に切り込まれる
7	M6.7	2(3.60)×2(3.60)	不摘要	1.80(6)	12.96	N0°	矧杆式南北造建物	8号住居と重複しているが、新旧関係は不明。
8	L-M5.6	3(5.40)×2(3.60)	不摘要	不摘要	19.44	N0°	矧杆式南北造建物	
9	M,N5	3(5.40)×2(3.60)	1.80(6)	1.80(6)	19.44	N90°E	矧杆式南北造建物	
10	N5	3(5.40)×2(3.60)	不摘要	不摘要	19.44	N5°E	矧杆式南北造建物	東柱筋の柱穴1号が不明
11	L13-14	3(6.30)×2(4.20)	2.10(7)	2.1(7)	26.46	N3°W	矧杆式南北造建物、片足柱式南北造建物	
12	K-L12	3(5.85)×2(4.50)	1.95(6.5)	2.25(7.5)	26.32	N13°W	矧杆式南北造建物	21号住居に切り込まれる
13	K11-12	3(6.30)×2(3.30)	不摘要	不摘要	20.79	N3°E	矧杆式南北造建物	ほぼ同位置で施て替えたが行われている。
14	K-L11	3(6.50)×2(4.20)	2.10(7)	2.10(7)	27.30	N4°W	矧杆式南北造建物	雨漏によって南北隅柱が消滅している。
15	L-M11-12	3(5.85)×2(4.20)	不摘要	不摘要	N10°W	矧杆式南北造建物	22号住居に切り込まれる。沿用柱との接觸脚は不明	
16	L11	3(5.85)×2(3.60)	1.95(6.5)	1.80(6)	21.06	N8°W	矧杆式南北造建物	23号住居に切り込まれている。
17	J-K11	3(5.85)×2(3.60)	1.95(6.5)	1.80(6)	21.06	N10°W	偶柱式南北造建物、片足柱式南北造建物	20号掘立との新旧関係は不明
18	J-K11	3(5.85)×3(5.40)	1.95(6.5)	1.80(6)	31.59	N5°W	矧杆式南北造建物	19-20号掘立との新旧関係は不明
19	K11	3(6.30)×3(4.20)	不摘要	不摘要	26.46	N0°	偶柱式南北造建物	19-20号掘立との新旧関係は不明
20	K11	3(6.30)×2(3.30)	不摘要	不摘要	20.79	N3°E	矧杆式南北造建物、片足柱式南北造建物	24号住居に切り込まれる。22号柱との新旧関係は不明
21	J-K10	3(5.85)×2(4.50)	不摘要	不摘要	26.32	N5°W	偶柱式南北造建物	

表80 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表（2）

遺構 番号 (アーチ)	位 置	桁行×梁間 (続長) (m)	桁行柱(m)× 間寸法(尺)	梁間柱(m) 間寸法(尺)	平面積 (m ²)	方 位	平 面 形 式	備 考
22 J-K10	4(7.20)×2(4.20)	1.80(6)	2.10(7)	30.24	N3°W	側柱式南北棟建 物	24号住居に切り込 まれている。	24号掘立との新旧 関係は不明
23 K-L10-11	3(6.75)×2(4.20)	2.25(7.5)	2.10(7)	28.35	N3°W	側柱式南北棟建 物	24号掘立との新旧 関係は不明	24号掘立との新旧 関係は不明
24 K-L10-11	3(6.30)×2(4.80)	2.10(7)	2.40(8)	30.24	N6°W	側柱式南北棟建 物、片 側近縁柱建物	24号住居に切り込 まれている。	24号掘立との新旧 関係は不明
25 K-L9-10	3(5.85)×2(4.20)	1.95(6.5)	2.10(7)	24.57	N0°	側柱式南北棟建 物、片 側近縁柱建物	24号掘立との新旧 関係は不明	26号掘立との新旧 関係は不明
26 K-L9	3(6.75)×2(4.20)	2.25(7.5)	2.10(7)	28.35	N5°E	側柱式南北棟建 物、東 平間に庇が付く	24号住居に切り込 まれている。	24号掘立との新旧 関係は不明
27 K-L8-9	2(3.65)×1(4.20)	-	不描い	15.12	-	側柱式南北棟建 物	28号掘立の入り口 柱か？	28号掘立の入り口 柱か？
28 K-L8-9	4(7.00)×2(4.80)	-	不描い	33.60	N3°W	側柱式南北棟建 物	西面に庇の可能性がある 柱例が壁面されている	西面に庇の可能性がある 柱例が壁面されている
29 K-L7-8	1(7.00)×2(4.80)	-	不描い	33.60	N3°W	側柱式南北棟建 物	側柱式南北棟建 物	31号掘立、15号住居と の新旧関係は不明
30 I-J13-14	3(6.30)×2(4.20)	-	不描い	26.46	N82°E	側柱式東西棟建 物	31号掘立、15号住居と の新旧関係は不明	14号掘立との新旧 関係は不明
31 I-J13-14	3(5.40)×2(4.50)	-	不描い	24.30	N3°E	側柱式東西棟建 物	31号掘立、15号住居と の新旧関係は不明	31号掘立、15号住居と の新旧関係は不明
32 II-12	4(7.20)×2(5.10)	-	不描い	36.72	N4°W	側柱式南北棟建 物	32号掘立と19号住居に 切り込まれている	32号掘立と19号住居に 切り込まれている
33 II-12	4(7.65)×2(4.85)	-	不描い	37.10	N8°W	側柱式南北棟建 物	32号掘立と19号住居に 切り込まれている	32号掘立と19号住居に 切り込まれている
34 H-112	4(7.00)×2(4.80)	-	不描い	33.60	N0°	側柱式南北棟建 物、独立柱建物	19号住居に切り込まれた、柱頭 を剥離させている	19号住居に切り込まれた、柱頭 を剥離させている
35 H11-12	3(7.60)×2(4.30)	-	不描い	32.68	N80°E	側柱式南北棟建 物	34号住居に切り込 まれている	34号住居に切り込 まれている
36 I-J11	2(9.25)×1(2.10)	-	不描い	19.42	N87°E	側柱式東西棟建 物	側柱式南北棟建 物？	側柱式南北棟建 物では無 いかもしれない？
37 H12	3(5.40)×	1.80(6尺)	-	-	N3°E	側柱式南北棟建 物？	側柱式南北棟建 物、北面に庇が付く	側柱式南北棟建 物へ延び ている
38 G-H11	3(5.35)×	-	不描い	-	-	側柱式南北棟建 物？	44-45号掘立との新旧 関係は不明	44-45号掘立との新旧 関係は不明
39 H10-11	3(6.55)×2(4.80)	-	不描い	31.44	N12°W	側柱式南北棟建 物	44号掘立との新旧 関係は不明である	44号掘立との新旧 関係は不明である
40 II-10-11	4(8.10)×2(4.45)	-	不描い	36.04	N13°W	側柱式南北棟建 物	44号掘立との新旧 関係は不明である	44号掘立との新旧 関係は不明である
41 G10	3(6.00)×1(1.70) 以上	-	不描い	-	N3°W	側柱式南北棟建 物	44号掘立との新旧 関係は不明である	44号掘立との新旧 関係は不明である
42 II-11	3(5.05)×2(4.00)	-	-	20.20	N82°E	側柱式東西棟建 物、南面に庇が付く	44号掘立との新旧 関係は不明である	44号掘立との新旧 関係は不明である
43 I-J10-11	3(3.60)×1(3.90)	不描い	3.90(13尺)	14.04	-	-	-	-
44 I-J10-11	3(7.00)×2(4.80)	不描い	2.40(8)	33.6	N79°W	側柱式東西棟建 物	42-46号掘立に切り 込まれている	42-46号掘立に切り 込まれている
45 H10-11	4(7.80)×2(4.80)	-	不描い	37.44	N10°E	側柱式南北棟建 物、屋内連絡柱建 物	39-40号掘立との新旧 関係は不明である	39-40号掘立との新旧 関係は不明である
46 H-111-12	3(5.10)×2(3.60)	1.70(5.7)	1.80(6)	18.36	N5°W	側柱式南北棟建 物	44号掘立を切り込 んでいる	44号掘立を切り込 している
47 I-J9-10	3(5.40)×2(3.90)	不描い	不描い	21.06	N5°W	側柱式南北棟建 物	50-51-52号掘立を 切り込んでいる	50-51-52号掘立を 切り込んでいる
48 G-I19	3(6.90) × 2 × (4.80)?	-	-	33.12	N5°W	側柱式南北棟建 物	50号掘立を切り込 んでいる	50号掘立を切り込 んでいる
49 I-H8-9	5(10.0)×3(6.15)	不描い	不描い	61.30	N85°W	側柱式東西棟建 物	50号掘立との新旧 関係は不明である	50号掘立との新旧 関係は不明である
50 I-H8-9	3(6.65)×2(4.80)	不描い	不描い	31.92	N83°W	側柱式南北棟建 物	50-51-52号掘立が 確認された。	50-51-52号掘立が 確認された。
51 I-H8-9	3(5.85)×2(4.80)	不描い	2.40(8)	28.08	N8°W	側柱式南北棟建 物	50号掘立との新旧 関係は不明である	50号掘立との新旧 関係は不明である
52 I-J9	4(8.40)×2(4.95)	2.10(7)	1.65(5.5)	41.58	N81°E	側柱式東西棟建 物	50号掘立との新旧 関係は不明である	50号掘立との新旧 関係は不明である
53 G-II8	3(5.10)×2(3.90)	不描い	不描い	19.89	N5°W	側柱式南北棟建 物	50号掘立との新旧 関係は不明である	50号掘立との新旧 関係は不明である
54 I-J8	3(6.75)×2(4.00)	不描い	不描い	27.00	N82°E	側柱式東西棟建 物	50号掘立との新旧 関係は不明である	50号掘立との新旧 関係は不明である
55 I-J6-7	3(4.80)×2(3.60)	不描い	1.80(6)	17.28	N82°E	側柱式東西棟建 物	50号掘立との新旧 関係は不明である	50号掘立との新旧 関係は不明である
56 G-H8	3(5.15)×2(3.85)	不描い	不描い	19.82	N7°W	側柱式南北棟建 物	50号掘立との新旧 関係は不明である	50号掘立との新旧 関係は不明である
57 J-K9	2(3.90)×2(3.90)	1.95(6.5)	1.95(6.5)	3.90	N5°E	側柱式建物	24号住居との新旧 関係は不明である	24号住居との新旧 関係は不明である

第6章 まとめ

今回の調査で縄文時代中期前半から後期初頭にわたる堅穴式住居跡23軒、土坑398基と奈良・平安時代の堅穴式住居跡51軒、掘立柱建物跡57棟、横列1条、溝2条、戸門3基を検出した。ここでは主に奈良・平安時代の検出された遺構と遺物について検討を加えたい。

1. 堅穴式住居跡

発掘調査で検出された51軒の堅穴式住居跡を調査した。堅穴式住居跡の時期は、住居跡の形態・構造・出土土器編年から8世紀前半から10世紀前半にわたる。ここでは8世紀前半をⅠ期、8世紀後半をⅡ期、9世紀前半をⅢ期、9世紀後半をⅣ期、10世紀前半をⅤ期としてⅠからⅤ期に時期区分し、堅穴式住居跡を概観することにする。時期別住居の軒数は表の通りである。

表81 住居跡時期別一覧表

時期	住居跡	合計
Ⅰ期	35	1
Ⅱ期	5 37	2
Ⅲ期	1 3 6 8 9 12 14 15 21 27 30 33 36 41 42 50	16
Ⅳ期	4 7 11 13 16 19 20 23 24 25 28 29 31 38 44 45 46 47	18
Ⅴ期	2 10 18 22 32 40 43 48 49	9
不詳	17 26 34 39 51	5

●遺物なし

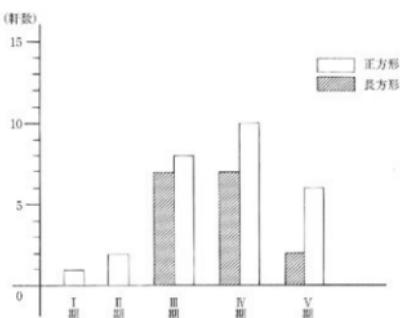
平面形（第93図）

堅穴式住居跡の平面形態は、基本的に正方形・長方形がある。分類基準は、長・短辺の比が10:9以上を方形、10:9未満は長方形とした。平面形態の確認できる堅穴住居跡は45軒で、方形を呈するもの29軒64%、長方形を呈するもの16軒36%で、正方形が過半数を占めている。

形態を時期区分で見るとⅠ・Ⅱ期では正方形が占め、Ⅲ・Ⅳ期には方形が増える一方で長方形が出現し増加するが、Ⅴ期に入ると方形に比べて長方形は1/3に減少する。堅穴住居跡の平面形は、結論づけることはできないが総体で見るかぎりは正方形基調である。

規模（第94図）

堅穴住居跡の規模を長軸・短軸の長さで示したのが第94図である。最大の規模を誇るものは41号住居跡の7.15m×6.55m（床面積46.83m²）で、最小のものは34号住居跡の2.03m×1.97m（床面積4.99m²）である。分布上の特徴としては、一辺2.5mから4mの範囲に密集するグル



第93図 住居跡形態時期別図

ープと、1辺4mから6mの少数にまとまるグループと2つが見られる。

時期別の特徴としては、Ⅱ期の5号住居跡5.30m×5.10m、37号住居跡5.70m×7.20mの大形が2軒、Ⅲ・Ⅳ期は一辺4.5mから4.0mの範囲と一辺6.0mから5.5mの範囲の2つの大型グループが見られる。Ⅴ期では、いずれも一辺3.0mから3.5mに集中する傾向があり、小規模化が見られる。

主軸方向

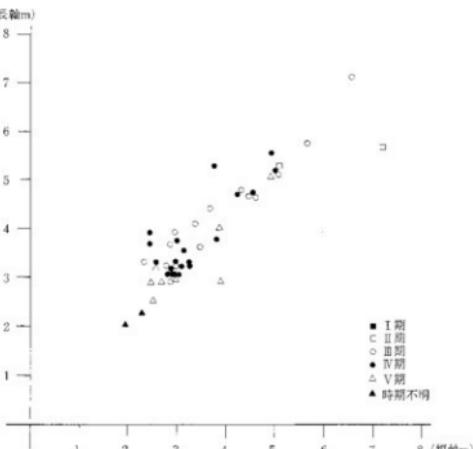
堅穴式住居跡の主軸方向はカマドを通るラインを主軸方向と定めて51軒中、47軒について検討した。北を中心に西向きのもの28軒(60%)、東向きのもの19軒(40%)で西向きが多く、N-0°-W-N-10°-Wが18軒、N-10°-W-N-20°-Wが10軒、N-0°-E-N-10°-Eが12軒と合計40軒で全体の85%をN-20°-W-N-10°-Eで占めており、時期別においても同様なことが言える。東に大きく角度を持つものはⅤ期の18号住居跡のN-118°-Eである。

カマド(表82)

堅穴式住居跡51軒のうちカマドの設置の有無が確認できない5軒を除いて46軒で確認された。カマドを1基設置しているものが43軒と最も多く、2基設置しているものは3基である。住居跡内のカマド設置場所は、北壁が最も多く29基、東壁が16基、西が1基で、南には設置されていない。時期別に見るとⅠ・Ⅱ期では北壁中央部に3基、Ⅲ期になると北壁カマドが減少し、新たに東壁中央の割合が高くなる。Ⅳ期になるとまた北壁中央に集中して設置されるようになり、Ⅴ期になると北壁がやや多いものの東壁との差はなくなり、平均に設置されている。

表82 住居跡カマド位置一覧表

カマドの位置	北 壁				東 壁				西 壁	合計
	西	中央	東	計	北	中央	計	中央		
時期										
I 期		1		1						1
II 期		2		2						2
III 期	1	15		16		2	2			18
IV 期	1	15	1	17		1	1			18
V 期	1	2	2	5	1	2	3	1	1	9
合 計	3	35	3	41	1	5	6	1	1	48



第94図 住居跡規模時期別図

柱穴（第95図）

柱穴の有無を確認できるものは全体の51軒中47軒で、その内無柱が31軒と65%を占めている。柱穴があるものは6本が2例、4本が可能性を含むもの1例を加えて12例、2本1例の計15例である。次に形態別に見ると6本の柱穴を持ち正方形を呈しているものに41号住居跡、長方形は4号住居跡がある。6本柱は、対角線上の柱穴の間にもう1対の柱穴があるもので、41号は更に出入り口ピットを持つ。4本柱穴は柱を対角線上に持つもので4本柱穴のみを有する正方形は5・30・49号住居跡、長方形は31号住居跡である。4本柱穴に加え出入り口ピットを持つもの正方形は6・23・50号住居跡、長方形は9・24号住居跡がある。4本柱穴の1対が壁溝に位置するものに正方形は16号住居跡、長方形は33号住居跡があり、16号住居跡は出入り口ピットを持つ。2本柱穴はカマド側の1対の柱穴がないもので長方形の21号住居跡共に1軒である。無柱は全部で30軒あり、その中でカマド線上に出入り口ピットを持つものが正方形は12・13・14・17・28・29・32・35・40・43・44・46号住居跡、長方形は1・2・3・19・20号住居跡の計17軒、ピットを持たないもの正方形は11・15・22・25・26・34・36・38・47・48号住居跡、長方形は7・8・36・45号住居跡の計14軒である。

時期別では、Ⅲ・Ⅳ期で4本柱穴と無柱に集中して見られ、Ⅳ期に入ると無柱が多くなり、そのままⅤ期に移行していく。また4本柱穴はⅤ期では衰退していくが、無柱はⅡ期を除いて見られる。

柱	6本柱		4本柱		4本柱(壁溝2本)		2本柱		入口ピット		無柱	
	正方形	長方形	正方形	長方形	正方形	長方形	正方形	長方形	正方形	長方形	正方形	長方形
I 期									1			
II 期			1									
III 期	1		5		1	1			1	2	2	1
IV 期		1	1	2	1				5	2	4	2
V 期			1						3	1	2	1

第95図 住居跡柱穴別変遷

2. 堀立柱建物

概観

堀立柱建物は57棟として復元を試みたが、第5章・第2節で示した通り、同位置での建て替えや堅穴住居跡との重複が著しく、一部、平面形式の復元や新旧関係に不明瞭な点が見られる。しかし、多くの建物は、妻側面の柱掘形が内側に向けて「ハの字」状に開いており、その構造的特長を踏まえながら平面形式を復元し得た事は幸いであった。これら建物群は、後記するように8世紀前半から9世紀後半に亘り営まれたと考えられ、建物配置・造構構成・平面形式（柱掘形）・方位等に關し、一般の集落遺跡には見られ難い一定の企画性を有している。

調査区域内における建物群の分布状況は、中央地区から北東地区にかけて広く展開し、南・北地区と南東地区は空白帯となっている。また、37・38・41号建物の遺構検出状況から、調査区域外の西側には更なる堀立柱建物が存在している可能性が高い。

時期（表83）

時期は、柱掘形の出土遺物と竪穴式住居跡との重複関係から主に判断し、その様な状況に無い建物については、時期判断が可能な建物との位置関係と主軸（柱筋）方向から推定した。その結果、大きく4期に時期区分が可能であり、Ⅰ期を8世紀前半、Ⅱ期を8世紀後半、Ⅲ期を9世紀前半、Ⅳ期を9世紀後半に想定した。区分可能な棟数はⅠ期が11棟、Ⅱ期が25棟、Ⅲ期が15棟、Ⅳ期が1棟の合計52棟であり、Ⅰ期に忽然と出現した建物群はⅡ期にピークを迎え、Ⅲ期に至り衰退化傾向にあり、Ⅳ期にはほぼ消滅している。

表83 時期別掘立柱建物一覧表（推定）

時期	掘立柱建物（号）	棟数(割合)
Ⅰ期	16・18・21・24・25・28・33・39・44・48・49	11(21%)
Ⅱ期	1・2・3・4・6・8・9・10・11・12・13・15・19・22・23・26・29・31・32・42・45・52・53・54・55	25(48%)
Ⅲ期	5・7・14・17・30・34・35・37・38・40・41・46・47・50・51	15(29%)
Ⅳ期	36	1(2%)

●柱掘形内から遺物が出土した建物

各期の建物配置（第101図）

Ⅰ期

調査区中央西寄りに、側柱式建物10棟と総柱建物1棟から構成される企画的な建物群が出現する。建物群は5間×3間の東西棟建物（49号）を中心とした「L字配置」を示す小プロック（5棟）と、その東側に直・並列配置を基本とした小プロック（6棟）から構成されており、全体としては南側が開口する「コの字型配置」を示す。2つの小プロックは、距離は内寸で約7.5m（25尺）と離れ、中には左右非対称配置をとる建物もあり、構築時期に多少の時間差があったと思われるが一院を形成しており、大きくは一つのプロックとして認識される。また、建物群の周辺は遺構の空白帯となっているが、唯一、プロックから北東方向に約30m進んだ位置に竪穴式住居跡が1軒検出されている。この竪穴式住居跡と建物群との相互関連については定かではないが、一つの可能性として、竪穴式住居跡は建物群に先行して構築され、建物群の構築に際して機能したのではないかろうか。

Ⅱ期

棟数は25棟と前代に比して飛躍的に増加し、建物群も大きく二つのプロックとして捉えられ、機能の拡大が窺える。一つのプロックはⅠ期とほぼ同位置で建て替えられた一群で、建物配置は大きくは「ロの字型配置」を示し、17棟の側柱式建物から構成されている。中庭には軒を伴う4間×2間の東西棟建物（52号）を中心に据え、その南面に東西棟建物の42・31号、東側に直列配置をとる3棟の南北棟建物を配置している。また、このプロックの北列に、1軒（37号住）の大型竪穴式住居が組み込まれているが壁柱を伴っており、壁立式建物と判断される。もう一つのプロックは調査区の北東地区に新たに出現した一群で、側柱式建物7棟と総柱建物1棟から構成されている。建物配置は「L字配置」を示し、中庭の空隙地を避けた東側に総柱建物の2号、北側の短辺列中央の対面に1号を配置している。また、当該期の竪穴式住居跡は、前記の37号を含めて2棟が出現している。

Ⅲ期

棟数は15棟を数え、前代に比して減少している。前記した二つのブロックの建物配置が崩れているが、依然として同位置での建て替えが行われ、一定のまとまりを示している。但し、前代「L字配置」を示したブロックは2棟のみとなる。堅穴式住居跡は16棟と飛躍的に棟数を増し、ブロックを避けた南側と北側に構築されており、掘立柱建物との棟数比率は約50対50となっている。

Ⅳ期

棟数は1棟のみとなり、掘立柱建物はほぼ消滅する。替わって堅穴式住居が18棟とピークを迎える、東向きに弧を描くように建てられている。

平面形式（第96図 表84）

平面形式は側柱式建物53棟、総柱建物3棟、不明1棟であり、側柱式建物では片庇4棟（4・6・26・42号）、2面庇1棟（3号）が確認されている。側柱式建物では2間×1間が2棟（4%）、2間×2間が3棟（5%）、3間×1間が1棟（2%）、3間×2間が34棟（64%）、3間×3間が2棟（4%）、4間×2間が10棟（19%）、5間×3間が1棟（2%）であり、3間×2間が大半を占め、次いで4間×2間が多く他は極少数である。床面積は最小で15.12m²（27号）、最大で61.50m²（49号）であるが、全体の約46%に相当する25棟が25~35m²の範疇にあり、それ以外の建物でも概ね前述の数値に近似している。

総柱建物では3間×3間が1棟（18号）、2間×2間（2・7号）が2棟であり、何れも正方形プランを早し、Ⅰ期からⅢ期に亘り各1棟が構築されている。床面積はⅠ期の18号が31.59m²、Ⅱ期の2号が26.16m²、Ⅲ期の7号が12.96m²を測り、建物数が減少するⅢ期に亘っては縮小化している。また、床を支える束柱の位置は、側柱と梁行方向の一直線上に揃える通例のものであるが、柱直位置が今一歩判断していない。機能的には、文献資料の記述や田岡等に描かれた倉の多くが正方形建物である〔松村恵尙1983〕ことや、重量物の収蔵に適したと思われる総柱式であることから、穀倉であったと推察される。

主軸方向

主軸方向は、南北棟建物では正方位を示すもの5棟、東へ3°~10°振れるもの8棟、西へ2°~13°振れるもの32棟があり、東西棟建物では東西軸に一致するもの1棟、東へ80°~87°振れるもの7棟、西へ79°~83°振れるもの3棟がある。すなわち、南北棟建物45棟、東西棟建物10棟、不明2棟であり、南北棟建物と東西棟建物との構成比は、各期において5対1前後であった可能性が高い。また、各期建物の主軸方向は統一的なものではなく、例えば棟数的にピークを向かえるⅡ期の南北棟建物は、主軸方向が正方位を示すもの2棟、東へ3°~10°振れるもの5棟、西へ2°~13°振れるもの13棟で構成されている。この様な状況はⅠ期・Ⅲ期にも看取されており、各期に亘り南北軸あるいは東西軸に則して建てられているものの、軸線からは僅かな振れを有している。この様な建物方位に決定された一つの要因は、南北方向に長く東西方向に短く形成された当台地の地形に規定された結果と思われる。

柱擺形

柱擺形は、各期を通して方形平面か長方形平面を基調とし、規模は長軸0.5m~1.0m、短軸0.4~0.8mを測り、四隅柱は内側に「ハの字」状に開くものが多い。Ⅰ期からⅣ期までの擺形平面を概観すると、Ⅰ・Ⅱ期では比較的整った平面プランを示すものの、Ⅲ期以降では総じてルーズな感がある。

特異な建物（第97図）

特異な建物として屋外棟持柱建物である独立棟持柱建物1棟（34号）、片面独立棟持柱建物3棟（1・9・25号）、近接棟持柱建物1棟（11・17・24号）と、屋内棟持柱建物1棟（45号）を復元した。

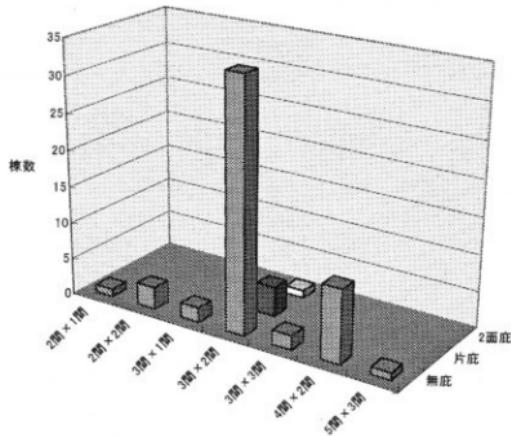


表84 側柱式掘立柱建物跡の平面形式と株数表

	基底	片底	2面底	合計
2間×1間	1			1
2間×2間	3			3
3間×1間	2			2
3間×2間	29	4	1	34
3間×3間	2			2
4間×2間	10			10
5間×3間	1			1
合計	48	4	1	53

第96図 側柱式掘立柱建物の平面形式と株数

これらの建物は、冒頭でも記したように同位置での建て替えや堅穴住居跡との重複関係が著しく、一部、平面形式の認識に誤りがあるかもしれない。例えば妻側の柱筋上に中央柱が見つからず、偶然に他遺構の柱穴が妻側面中央から相応した位置にある場合もあるうし、近接棟持柱としたものの中には柱材の曲がりゆえのものもある。しかし、片面独立棟持柱とした1号建物に関しては、本遺構の周辺に他の遺構が検出されおらず、平面形式の信憑性は高いと考える。

(1) 屋外棟持柱建物

屋外棟持柱建物は、その平面形式上の特長である建物の妻側面から離れた位置に柱を建て、切妻屋根先端の棟木を地面から直接支持するものであり、弥生時代の銅鐸や土器線刻画に表現される様に、主として高床建築に特長的に見られるものとされている。しかし、棟持柱建物は高床建築に固有のものではなく、平屋建築にも少ながらんがら存在することは明らかである（註1）。なお、ここで取り扱った独立棟持柱と近接棟持柱の区分基準は、妻側面からの柱の出が柱1本～2本分（30cm前後）外れているものを近接棟持柱とし、それ以上の出（0.8～1.7m）を有するものを独立棟持柱建物とした。

近接棟持柱建物は、妻側壁面に近接した位置に柱を建てるにより棟木を支持し、切妻屋根を固定したものであり、片面支持でも両面支持でもその機能を果たしたと考えられる。独立棟持柱建物は、近接棟持柱と同構造的機能を果たすとするものの、けらば軒をより張り出して切妻軒先の転びを大きくとて意匠上の効果を上げたと考えられる（註1）。以下は、各建物の構造別の平面形式と位置である（第97図）。

1) 独立棟持柱建物（34号）

Ⅲ期に位置付けた4間×2間の側柱式南北棟建物で、棟持柱の妻側面からの出は2本とも1.70mである。位置は西側ブロックの南西付近に建てられる。

2) 片面独立棟持柱建物（1・9・25号）

1号、Ⅱ期に位置付けた3間×2間の側柱式南北棟建物で、棟持柱の出は南妻側面から約0.80mである。

位置は「L字型配置」を示すブロックの南側中央に、周辺建物とは隔離した場所に建てられる。

9号、II期に位置付けた3間×2間の側柱式東西棟建物で、棟持柱の出は東妻側面から約1.50mである。位置は「L字型配置」を示すブロックの短辺列中央に建てられる。

25号、I期に位置付けた3間×2間の側柱式南北棟建物で、棟持柱の出は北妻側面から約1.20mである。位置は「コの字型配置」を示すブロックの東列の北から2棟目に建てられる。

3) 片面近接棟持柱建物 (11・17・24号)

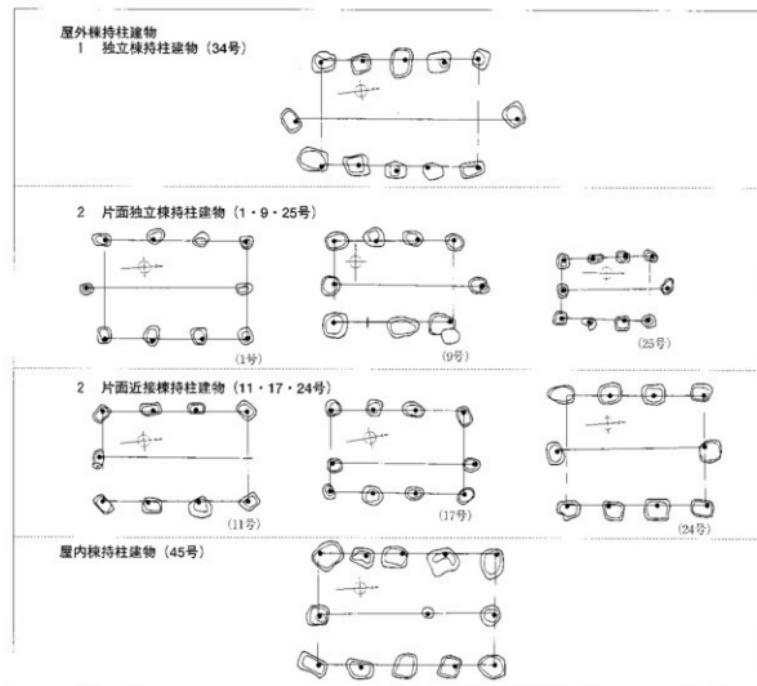
11号、II期に位置付けた3間×2間の側柱式南北棟建物で、棟持柱の山は南妻側面から約0.25mである。位置は「ロの字型配置」を示すブロックの南東隅に建てられる。

17号、III期に位置付けた3間×2間の側柱式南北棟建物で、棟持柱の出は南妻側面から約0.30mである。位置は西側ブロックの南東に建てられる。

24号、I期に位置付けた3間×2間の側柱式南北棟建物で、棟持柱の出は北妻側面から約0.30mである。位置は「コの字型配置」を示すブロックの西列の北から3棟目に建てられており、25号とは隣り合う。

(2) 屋内棟持柱建物 (45号)

屋内棟持柱建物は、屋内棟通りの中央付近に柱を建て、両妻側の中央柱と一緒にして棟木を支持するも



第97図 特異な建物 (1/200)

のであり、前記の屋外棟持柱建物とは性格が異なるものであろう。

45号、Ⅱ期に位置付けた4間×2間の側柱式南北棟建物で、棟持柱の位置は棟通りの中央から北側に僅かに寄って建てられる。位置は「ロの字型配置」を示すブロックの西列の北から2棟目に建てられている。

(3) 性格

前記した各建物が如何なる機能・性格をもつかは定かではなく、また、各建物に与えた形式名が適當か否かは判然としない。しかし、1号掘立柱建物に見られるよう、明らかに妻側の中央柱が妻側面から意図的に外れた位置に建てられたり、一般の建物には見られ難い構造であったことは確かであろう。仮に前記した建物が、一般に認識されている屋外棟持柱（独立棟持柱・近接棟持柱）とするならば、その構造上の特性から他の建物との差別化を図ったことは明らかであり、集落内あるいはブロック内において象徴的建物であったと判断される。

3. 出土遺物

扇ノ台遺跡の歴史時代の土器は、8世紀前半から9世紀代にかけての須恵器、8世紀初めと9世紀～10世紀前半の土師器、9世紀代の灰釉陶器が出土している。須恵器の器種には食器具としての壺、高台付壺、蓋、炊飯具としての瓶、貯蔵用具としての甕が見らる。土師器は炊飯具の甕類と食膳用の壺、椀類が出土している。灰釉陶器は、全部で6点出土しておりK14～K90頃の壺、皿、長頸瓶類で9世紀～10世紀前半代の遺物と併せている。須恵器の多くには妻母が混入しており、筑波郡新治村に所在する新治窯跡群の須恵器が大部分を占めていると考えられる。新治窯跡須恵器については赤井氏による編年案があり、15～25年程の時間軸ごとに代表する窯の名称を付けている。赤井編年を参考にして出土須恵器を中心に出土遺物のおおまかな位置付けを行う。

I期

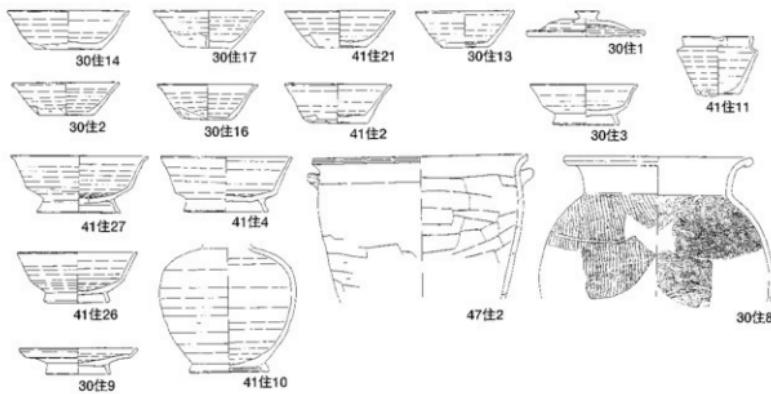
8世紀前半の遺物は全体に数が少なく、35号竪穴住居跡出土遺物以外では、掘立柱建物跡の柱掘り形内から出土するものが僅かにある。35号竪穴住居から出土した土師器壺は、7世紀末から8世紀前半代に見られる器形の土師器壺であり、甕は体部にヘラ焼きが入るが口唇部のつまみ上げがみられず他の常総形甕との比較がむずかしいもののこの時期の前半頃のものと考えたい。48号掘立柱建物跡からはかえりが残存し妻母を胎土中に含む須恵器蓋が出土しており、新治窯須恵器編年上のX2段階（725年前後）のものに近い。33号掘立柱建物跡の須恵器蓋は東城寺寄居前A段階頃のものに類似しており、44号掘立柱建物跡出土の甕は高台が低くしっかりとつくりで高台径も大きい。これらは8世紀第2四半世紀後半から中葉頃のものと思われる。

II期

8世紀後半の出土遺物では37号住居跡出土須恵器壺・高台付壺・蓋と11号掘立柱建物跡出土須恵器蓋が新治窯跡東城寺段階の8世紀第3四半世紀頃、5号住居跡出土須恵器壺・蓋と1号溝出土の甕2点が東城寺桑木段階（8世紀の第4四半世紀）である。1号溝から出土した肩部に4つの小円孔の開く香炉形の短頸甕は、「僧」の墨書き土器とともにこの時期のものである。

III期

9世紀前半の土器は出土数量が多い。須恵器壺類では6号住居跡のものが小高村内段階資料に類似し、36号住居跡出土甕も口縁端部の形状と全体形が同段階のものに近似し9世紀前葉頃のものと考えられる。41・51号掘立柱建物跡出土須恵器蓋・甕は東城寺寄居前B段階のものに類似している。21号住居跡出土土師器壺、甕も同段階の須恵器壺と共に伴しており、9世紀第2四半世紀頃のものであろう。墨書き土器は出土数が増加し、土師器壺の底部外面に墨書きされたものが目立つ。金屬製品は、刀子、鉄製紡錘車、鎌が出土している。



第98図 9世紀前半代の須恵器

IV期

9世紀後半になると28・31・33号住居跡出土須恵器坏のように坏の底径が最小化し、体部下端のヘラ削りも幅広で粗雑になってくる。これらの須恵器は新治塗跡小野1号窓段階から小野1号窓段階に後続する段階に属するものと思われる。内面黒色処理の土師器坏が増加し、墨書き器はそれらの体部外面に書かれたものが多い。金属製品では、鉄製の刀子・鎌・鍔・馬具等が見られ、皇朝十二銭の内の神功開寶が出土している。鉄鎌はⅢ期のものに較べ装着角度がやや大きくなっているようである。

V期

一般的に、須恵器坏が消え廻のみの生産に移行する時期であり、須恵器坏類は確認されない。49号住居跡出土土師器坏・高台付椀のように内面黒色処理が施されないものや、43・22号住居跡出土土師器椀のように足高傾向に特徴が見られる。49号住居跡からは高台の断面二日月化したK90期以降の灰釉陶器碗が出土している。鉄鎌は9世紀代のものが装着角度が大きかったが、43号住居跡のものは角度がなくほぼ直行方向に延びている。鉄鎌のタイプの違いかもしれない。

4. 集落内の変遷と性格

前項では畝穴式住居跡と掘立柱建物とを個別に扱い、各期における建物の構造について主に論じたが、本項では前記の遺構に出土遺物を加えて勘案し、集落の変遷と性格について検討する。I・II期における企画的な遺構配置は、主屋と日される大型掘立柱建物を中心に据えた「L字配置」であり、その建物に直・並列配置の小プロックが組み込まれることにより、大きくは「コの字配置」「ロの字配置」を示している。但し、高度な配置計画に従って造営したとは言い難く、各建物間の棟間距離や小プロック間の距離に厳正なる基準は認められない。また、中庭は空閑地とはせずに直・並列の建物が配置されており、一つの構造的特長を示している。

変遷

I期

「L字配置」の小プロックと、直・並列を基本とする小プロックから構成された「コの字配置」を示す一院

が形成される。主屋は5間×3間の東西棟建物（49号）で、3間×3間の総柱建物（18号）は主屋から南東に下がった位置に置いてる。堅穴式住居跡（35号）は一軒のみであり、ブロックから南東方向に約30m離れた楕円地付近に構築されている。掘立柱建物群を造営するに当たっての作業小屋であろうか。

この時期の出土遺物は、35号堅穴式住居跡の土師器と33・41・48号掘立柱建物の須恵器蓋と盤である。須恵器は新治麻福年の「丁田段階から東城寺寄居前段階のもので8世紀後半期を主体としており、この時期の掘立柱建物の機能期間に使用された供膳具と考えられる。また、35号堅穴式住居跡出土の土師器壺・蓋は8世紀初め頃の所産と考えられる。

Ⅱ期

施設は前代に比して飛躍的に拡大し、建物群も大きく二つのブロックとして捉えられる。一つのブロックはⅠ期とほぼ同位置で建て替えられた一群で、ブロック南面に11・31号が建てられたことにより、遺構配置は大略「コの字配置」から「ロの字配置」へ移行している。中庭には主屋の4間×2間の東西棟建物（52号）を中心に据え、その南面に東西棟建物の42・31号、東側に直列配置をとる3棟の南北棟建物を配置している。また、このブロックの北列には、外観上からは掘立柱建物と変わらない礎立式の大型堅穴式住居跡（37号）が組み込まれており、掘立柱建物との役割分担があったものと推察される。もう一つのブロックは北東地区に新たに出現した一群で、側柱式建物7棟と2間×2間の総柱建物1棟（2号）から構成されおり、「L字配置」を示す。総柱建物はブロックの短辺列東端から南に下った位置に置き、Ⅰ期の総柱建物と近似した配置形態を取っている。この様な配置形態に類似した事例として、群馬県境町十三宝塚遺跡の方形域東南側の建物群が挙げられるが、十三宝塚跡は、寺院関係施設または都衙に転用された館ないし厨家と推定されている（註2）。堅穴式住居跡は、37号の他に1軒が調査区の南西隅に建てられており、軒数は1軒から2軒に増えている。また、台地の南西隅には並走する2条の溝が確認されおり、台地周縁を押繰し、集落を防衛したものと推察される。

この時期の出土遺物は37号堅穴式住居跡から出土した須恵器高台壺・蓋、11号掘立柱建物から出土した須恵器盤に見られる様に、有台器種の定量生産が行われ、須恵器の供給量も増加していく時期である。新治麻福年須恵器は東城寺段階と東城寺桑木段階のもので、8世紀後半を主体としている。掘立柱建物から出土する遺物数が最も多い時期で、遺物の上からも掘立柱建物の隆盛期と捉えられる。

Ⅲ期

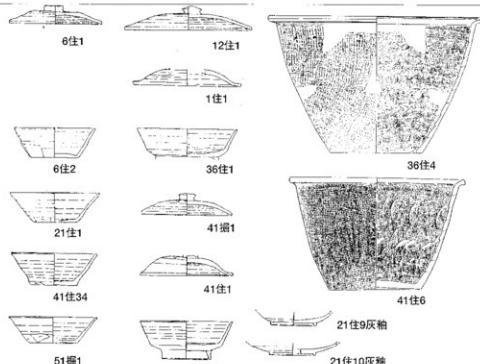
掘立柱建物の棟数は前代の25棟から15棟と減少し、代わって堅穴式住居跡が2軒から16軒と大きく増えている。建物配置は崩れだすものの、依然として同位置での建て替えが行われて、2棟～3棟が直・並列配置を取ることにより一定のまとまりを示している。前代に「L字配置」を示した建物跡地には、新たに4間×2間の側柱式建物1棟（5号）、2間×2間の総柱建物1棟（7号）、堅穴式住居跡2軒（30・33号）から構成される小ブロックが出現する。遺構配置は、堅穴式住居跡を含めると総柱建物を北東隅に置く「L字配置」示しており、変化しながらも前代の基本配置を踏襲している。堅穴式住居跡は掘立ブロックの北側と南側に位置し、本遺跡最大の住居跡（41号）は前代の主屋（52号）の東脇に建てられている。41号は51号の建て替えであろうか。

出土する土器は、この時期に堅穴式住居だけからなる他の集落の出土物とあまり差のない器種構成である。須恵器は小高村内段階から東城寺寄居前B段階の9世紀前半頃のもので、僅ながら掘立柱建物跡からも見られる。鉄製品や墨書き器の出土がやや目立っている。

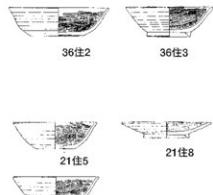
	須恵器坏・高台付坏・盤	土師器坏	土師器甕	墨書き器	土製品	金属製品
前半	48振2	35住1	35住2	33振1		
8世紀後半	37住1 37住3 13振1 33振4 33振3	37住2 44振1 11振1	37住5 37住6	32振2 1満2 1満3 5住4 5住2 5住3 32振1 1満1	5住6 5住7 6住5	

第99図 出土遺物の編年(1)

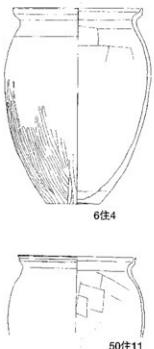
須恵器壺・高台付壺・灰釉陶器・須恵器甌・瓶



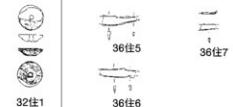
土師器壺・碗・皿



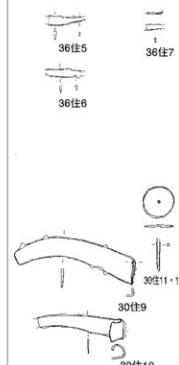
土師器甌



墨書き器

土製品
石製品

金属製品



前

半

9

世

紀

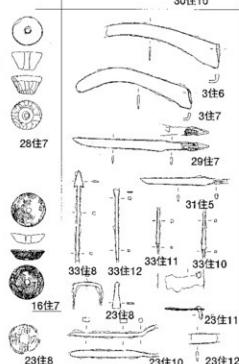
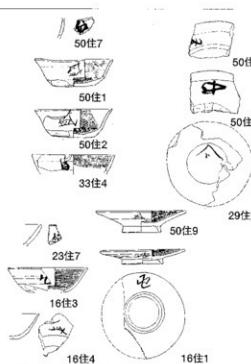
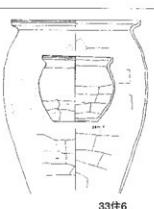
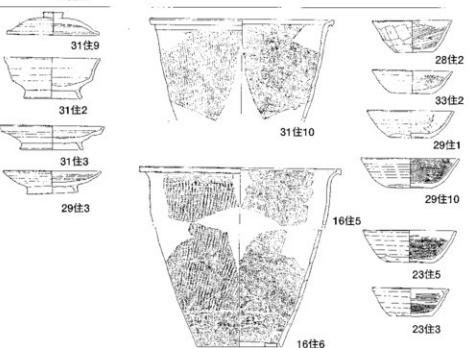
後

半

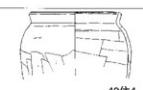
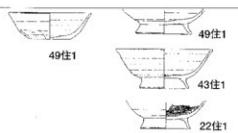
10

世

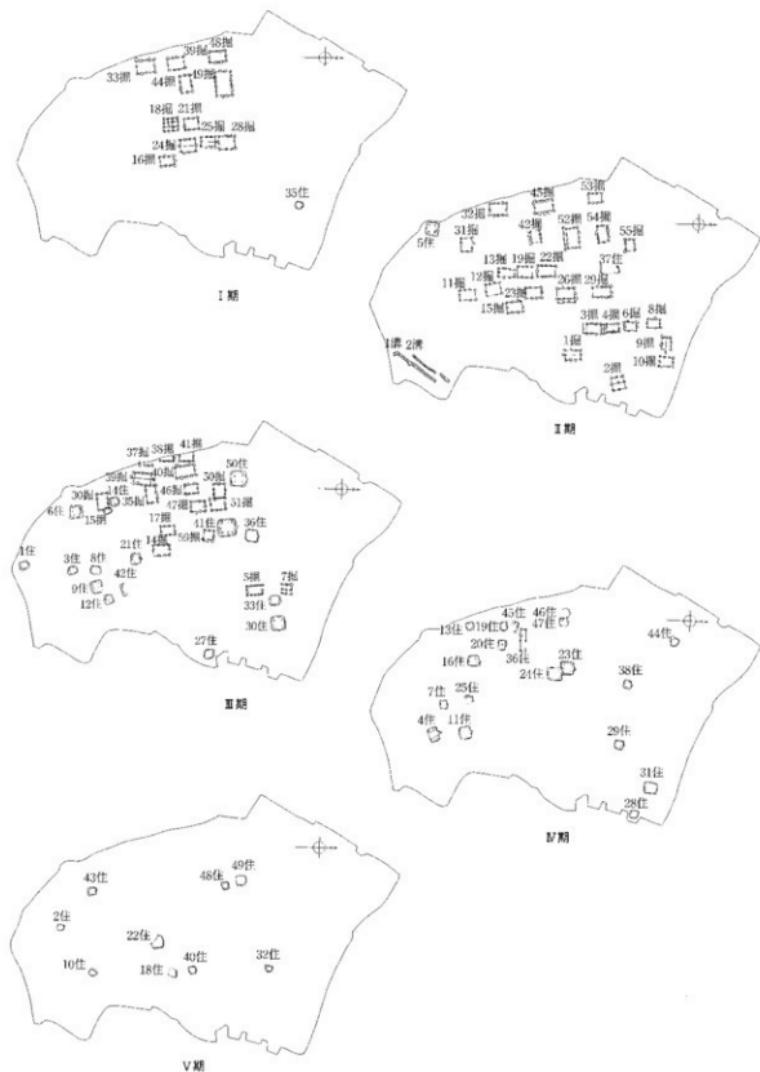
紀



49住3灰胎



第100図 出土遺物の編年(2)



第101図 古代集落の変遷

IV期

簡易な掘立柱建物1棟と、竪穴式住居跡18棟が検出されている。竪穴式住居跡はビーグを迎える、ほぼ中央には主屋とおぼしき大型住居跡（23・24号）が立地している。北東側では前代の「L字配置」の崩れと見られる3軒の竪穴式住居跡が認められ、北側では4軒の竪穴式住居跡がまとまって所在している。

須恵器は小野1号窯跡とそれに続く段階のものが主体となり、土師器の内黒坏・皿とそれらに墨書きした食器が多くなる。金属製品に武器や馬具の一部、神功開宝が出土している点は注目される。

V期

掘立柱建物は消滅している。台地中央に主屋の残存と思われる大型住居跡が所在し、これを取り囲むように中・小の竪穴式住居跡が方形状に所在している。北東部の住居跡は前代の影響を受けたためか、他の住居跡よりもやや離れた位置に構築されている。

遺物は須恵器壊が見られなくなり、土師器は足高傾向の椀が主体となっている。

以上が遺構・遺物から見た集落の変遷である。大略ではⅠ期に官衙的様相を示す建物群が忽然と出現し、Ⅱ期には機能の拡充と共に新たな機能を担い、Ⅲ期には前代の官衙的機能を担いつつも一般的な集落に転換していく様相が窺える。Ⅳ期では一般集落とした様相を呈するが、出土した遺物の一部（武器や馬具の一部・神功開宝）からは、今だに前代までの理念が感じられる。V期は本遺跡終焉の時期であり、集落は竪穴式住居跡のみで構成される。

性格

花室川左岸に位置する本遺跡は、天保年間に編纂された中山信名著『新編常陸國誌』では「信太郡」に属する「阿弥郷」に編入されていた地区である。しかし、久信田喜一氏は『茨城史林』16号に発表した「古代常陸国信太郡について」の中で、中村・右筋・小岩田地区などに「中」と付く小字名が多く見られることから「中村郷」に属するという考え方を示した。その説を肯定するかのように、平成6年に右筋地区で実施された念代遺跡（註3）から「中家」と記した墨書き土器（9世紀前半）が出土している。

当遺跡もまた現在の中という大字地名に所在し、かつ「中」と記された墨書き土器（Ⅲ・Ⅳ期）が出土しており、念代遺跡同様、中村郷の拠点集落の一つ、あるいは中心施設（郷家）であったと推察される。また、「僧」と記した墨書き土器（Ⅱ期）や梵字の「卍」を記した墨書き土器（Ⅲ・Ⅳ期）が出土しており、草堂の寺や「春時祭川藻」にあるような神社の存在が予想される。本遺跡を郷家とし、前記の寺・神社が存在したとするならば、郡衙の郡守に対応するような郷の寺、あるいは寺院的要素を取り込んだ建物が官衙機能の末端である郷家にも存在したかもしれない。本遺跡で寺・神社の可能性がある建物は、寺では穀倉と考えた正方形プランを呈する2号掘立柱建物、神社では「特異な建物」として取り扱った屋外棟持柱建物が挙げられる。

これまで郷家の蓋然性が高いとされる遺跡は數少なく、構造と機能の比較検討にはその数は十分ではないと思われる。よって、今回得られた資料は、郷家像を検証する上で有効な考古資料の一つとなり得る。

参考・引用文献

- 註1 宮本長二郎 1996 「日本原始古代の住居建築」中央公論美術出版
註2 山中敏史 1994 「古代地方官衙遺跡の研究」堀書房
註3 矢ノ倉正男 1996 「主要地方道土浦奄ヶ崎線道路改良工事地域内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財團文化財調査報告書第111集

写 真 図 版

図版1 遺跡全景（空撮）

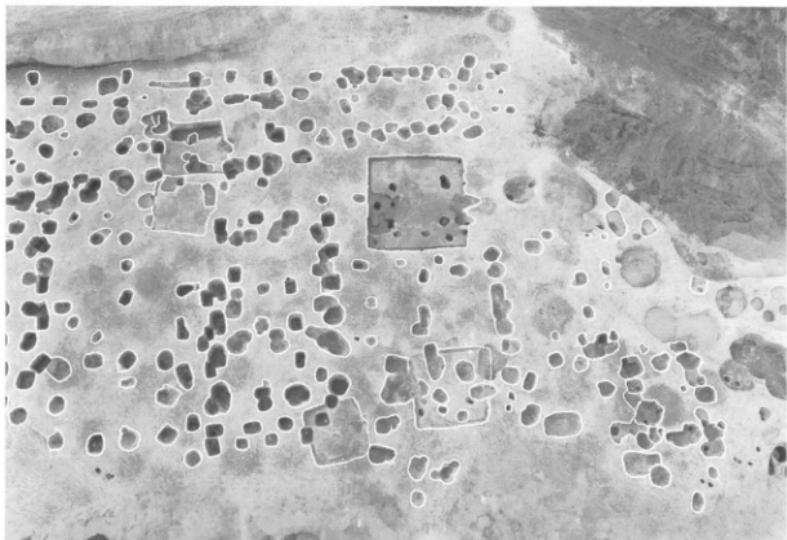




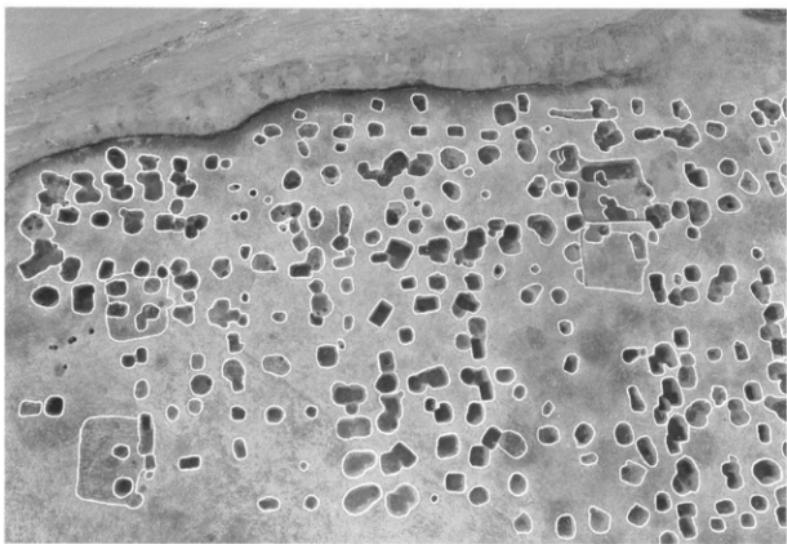
1. 調査区中央・南



2. 調査区中央住居跡・掘立柱建物跡

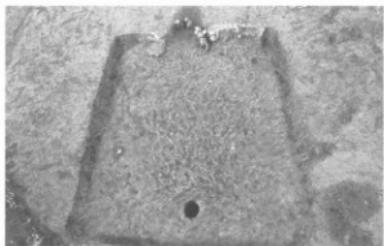


1. 調査区北西住居跡・掘立柱建物跡



2. 調査区西中央住居跡・掘立柱建物跡

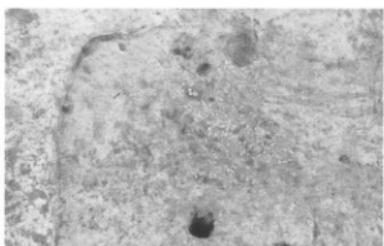
図版 4
遺構（住居跡）



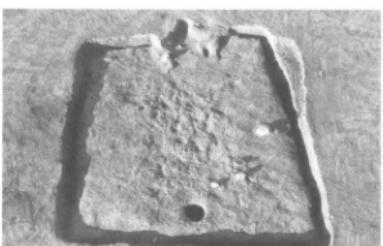
1. 1号住居跡全景（南より）



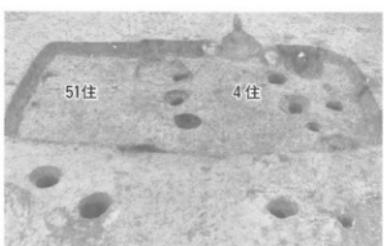
2. 同 カマド



3. 2号住居跡全景（南より）



4. 3号住居跡全景（南より）



5. 4・51号住居跡全景（南より）



6. 4号住居跡遺物出土状況



7. 5号住居跡全景（南より）



8. 同 遺物出土状況



1. 6号住居跡全景（南より）



2. 同 遺物出土状況(1)



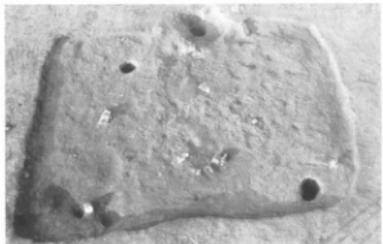
3. 同 遺物出土状況(2)



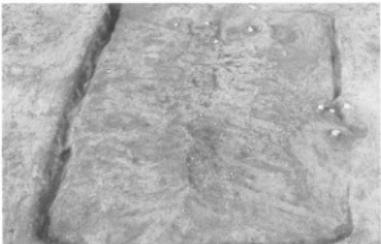
4. 同 カマド



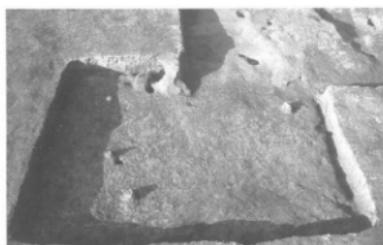
5. 同 掘形



1. 7号住居跡全景（南より）



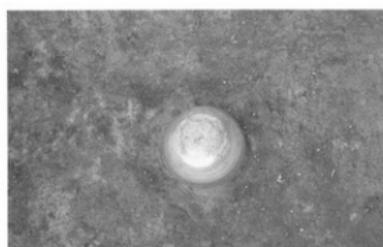
2. 8号住居跡全景（南より）



3. 9号住居跡全景（南より）



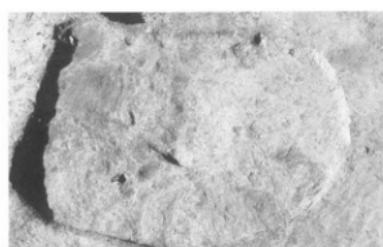
4. 同 遺物出土状況(1)



5. 同 遺物出土状況(2)



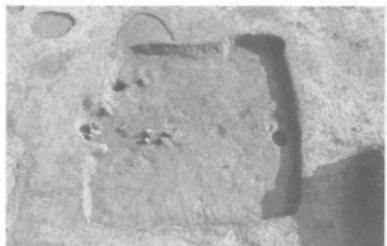
6. 同 遺物出土状況(3)



7. 10号住居跡全景（南西より）



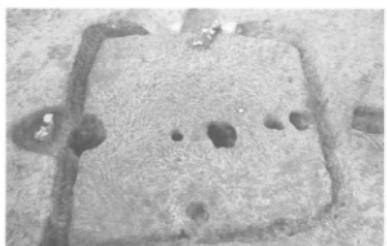
8. 12号住居跡全景（南より）



1. 13号住居跡全景（西より）



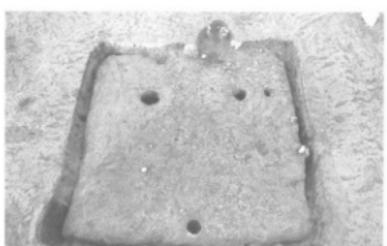
2. 同 カマド



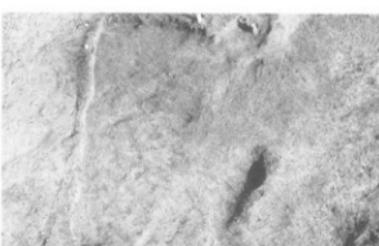
3. 14号住居跡全景（南より）



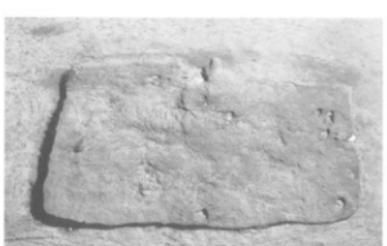
4. 15号住居跡全景（南より）



5. 16号住居跡全景（南より）



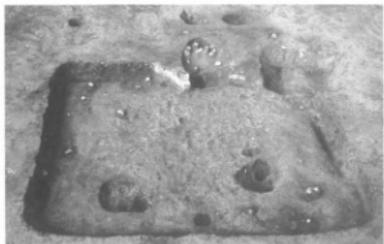
6. 18号住居跡全景（西より）



7. 20号住居跡全景（南より）



8. 同 遺物出土状況



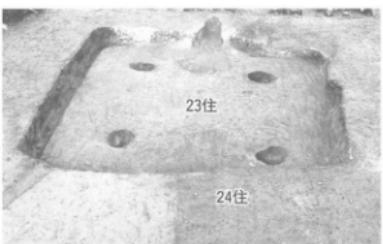
1. 21号住居跡全景（南より）



2. 同 カマド



3. 22号住居跡全景（南より）



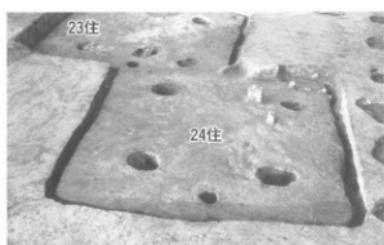
4. 23・24号住居跡全景（南より）



5. 23号住居跡全景（南より）



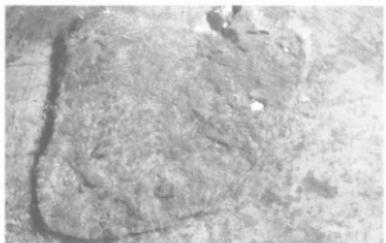
6. 同 遺物出土状況



7. 24号住居跡全景（南より）



8. 同 遺物出土状況



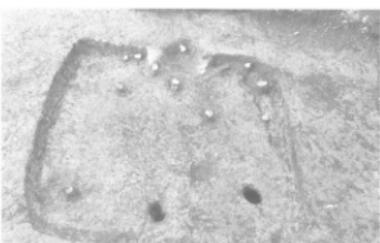
1. 25号住居跡全景（南より）



2. 26号住居跡全景（南より）



3. 同 カマド



4. 27号住居跡全景（南より）



5. 同 遺物出土状況(1)



6. 同 遺物出土状況(2)



7. 同 遺物出土状況(3)



8. 同 カマド



1. 28号住居跡全景（南より）



2. 同 遺物出土状況(1)



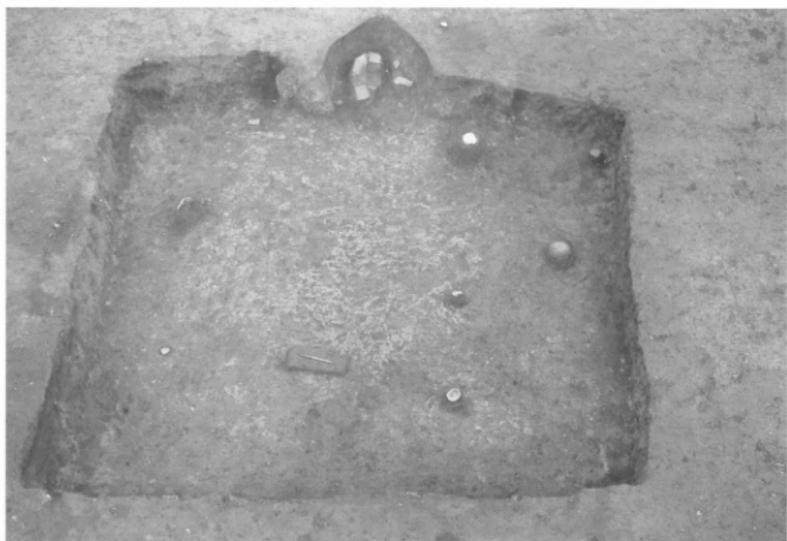
3. 同 遺物出土状況(2)



4. 同 遺物出土状況(3)



5. 同 遺物出土状況(4)



1. 29号住居跡全景（南より）



2. 同 遺物出土状況(1)



3. 同 遺物出土状況(2)



4. 同 遺物出土状況(3)



5. 同 遺物出土状況(4)



6. 同 挖り方



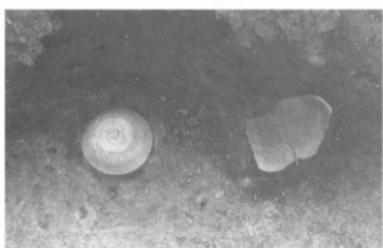
1. 30号住居跡全景（西より）



2. 同 遺物出土状況(1)



3. 同 遺物出土状況(2)



4. 同 遺物出土状況(3)



5. 同 遺物出土状況(4)



1. 31号住居跡全景（西より）



2. 同 遺物出土状況(1)



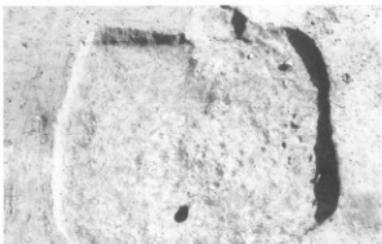
3. 同 遺物出土状況(2)



4. 同 遺物出土状況(3)



5. 同 カマド



1. 32号住居跡全景（西より）



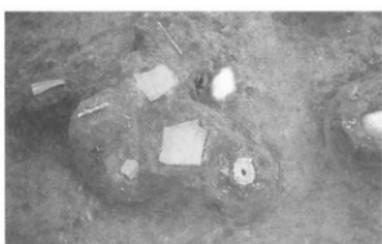
2. 33号住居跡全景（南より）



3. 同 カマド



4. 同 遺物出土状況[1]



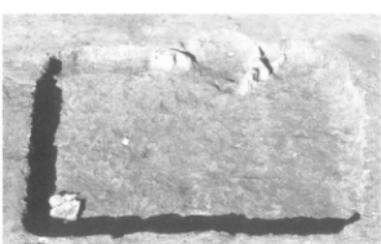
5. 同 遺物出土状況[2]



6. 同 遺物出土状況[3]



7. 34号住居跡全景（南より）



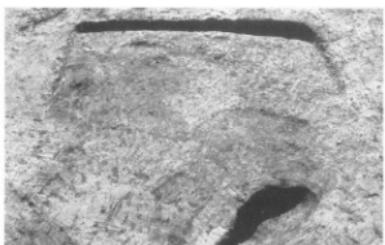
8. 35号住居跡全景（南より）



1. 36・37号住居跡全景（東より）



2. 38号住居跡全景（南より）



3. 39号住居跡全景（北より）



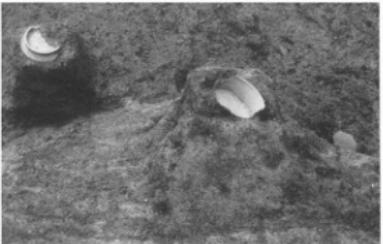
4. 40号住居跡全景（西より）



5. 23・41号住居跡遺物出土状況（南より）



1. 41号住居跡遺物出土状況(1)



2. 同 遺物出土状況(2)



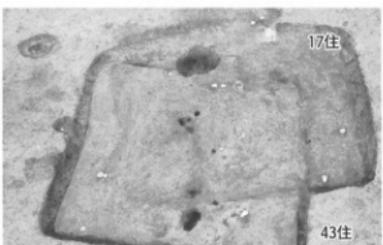
3. 同 遺物出土状況(3)



4. 同 遺物出土状況(4)



5. 42号住居跡全景（西より）



6. 17・43号住居跡全景（南より）



7. 44号住居跡全景（東より）



8. 45号住居跡全景（南より）



1. 46号住居跡全景（南より）



2. 47号住居跡全景（南より）



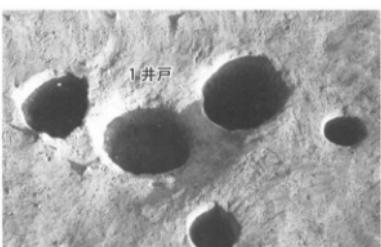
3. 同 遺物出土状況



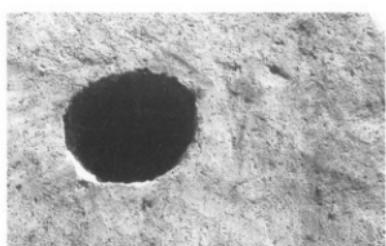
4. 48号住居跡全景（南より）



5. 49号住居跡全景（南より）



6. 1号井戸跡全景



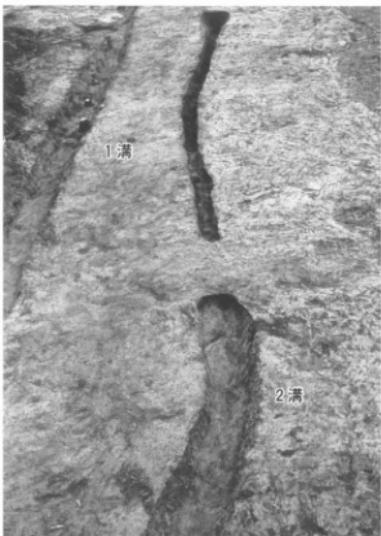
7. 2号井戸跡全景



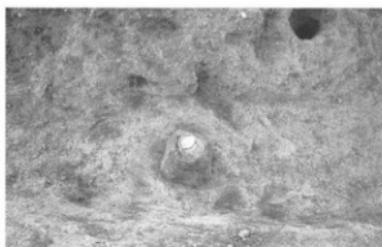
8. 3号井戸跡全景



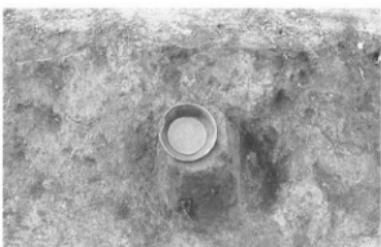
1. 1号溝全景 (南より)



2. 2号溝全景 (北より)



3. 1号溝遺物出土状況(1)



4. 同 遺物出土状況(2)

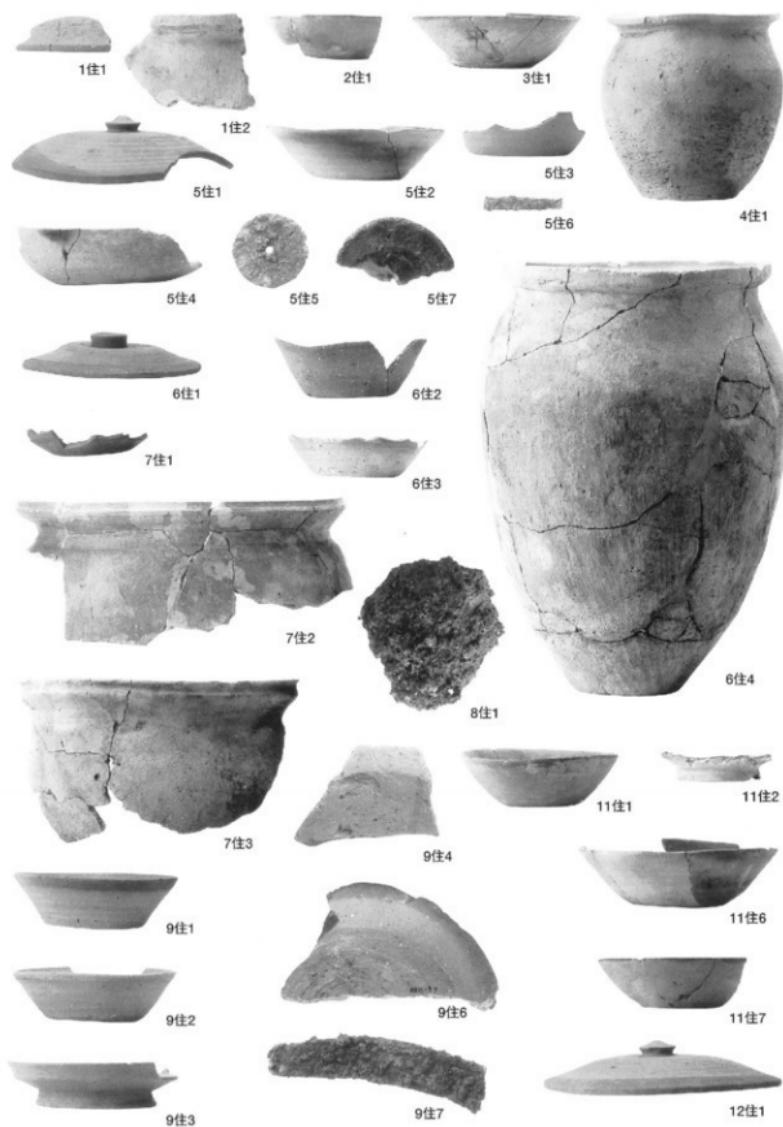


5. 同 遺物出土状況(3)

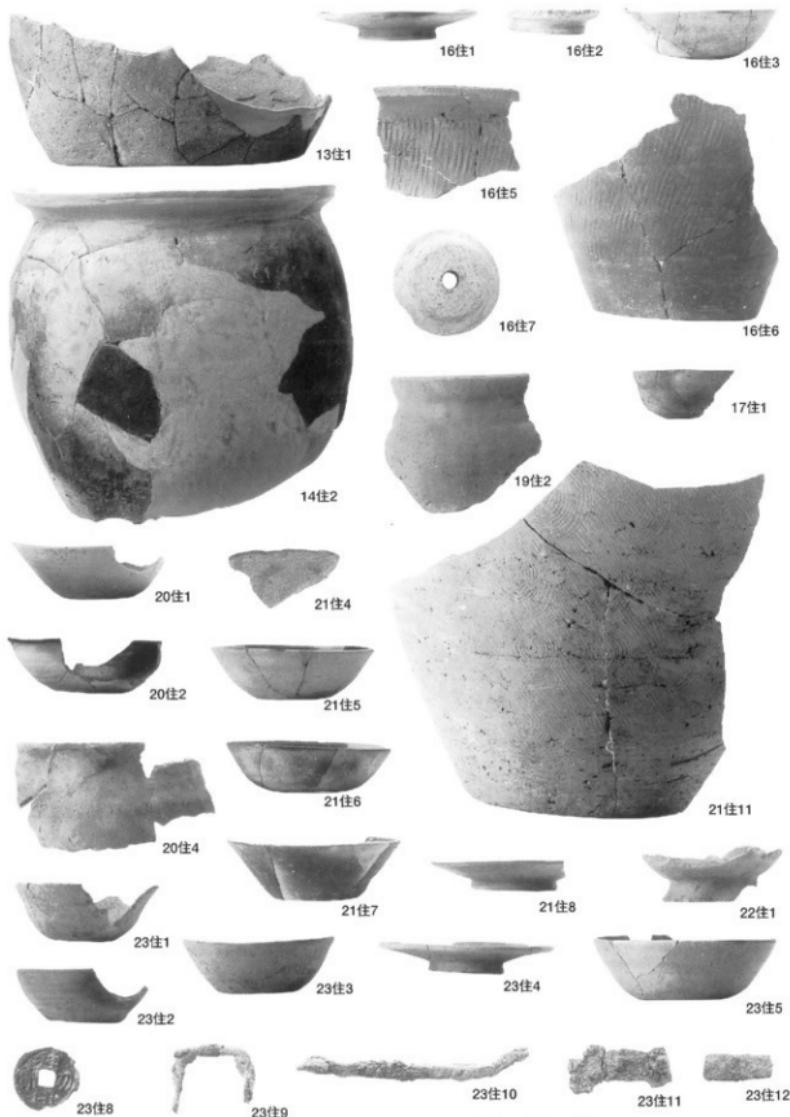


6. 同 遺物出土状況(4)

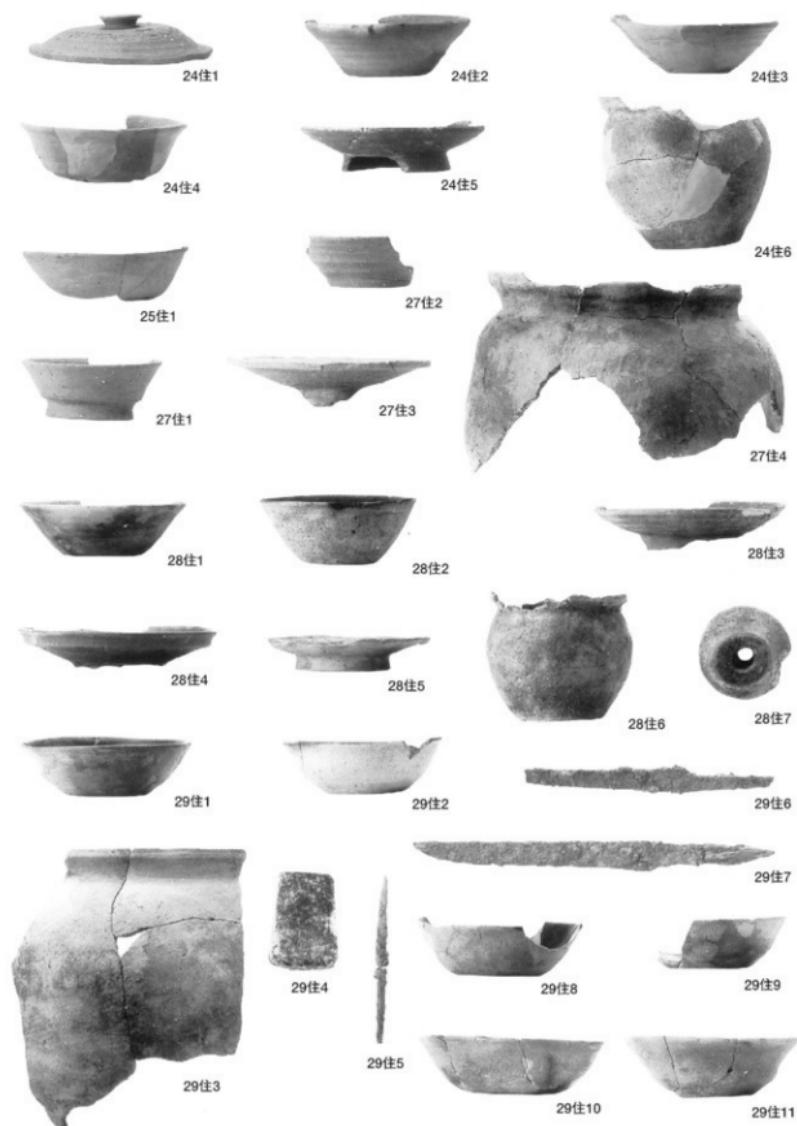
図版 19 遺物（土器・鉄製品）



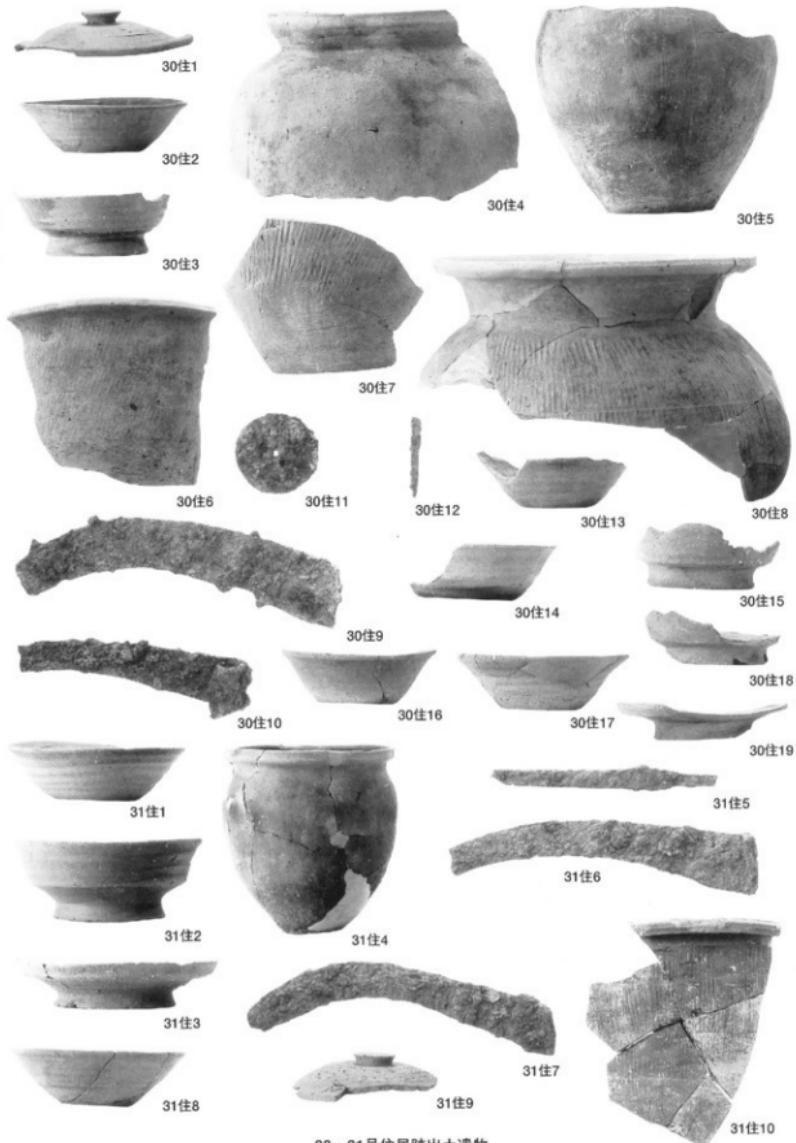
1～9・11・12号住居跡出土遺物



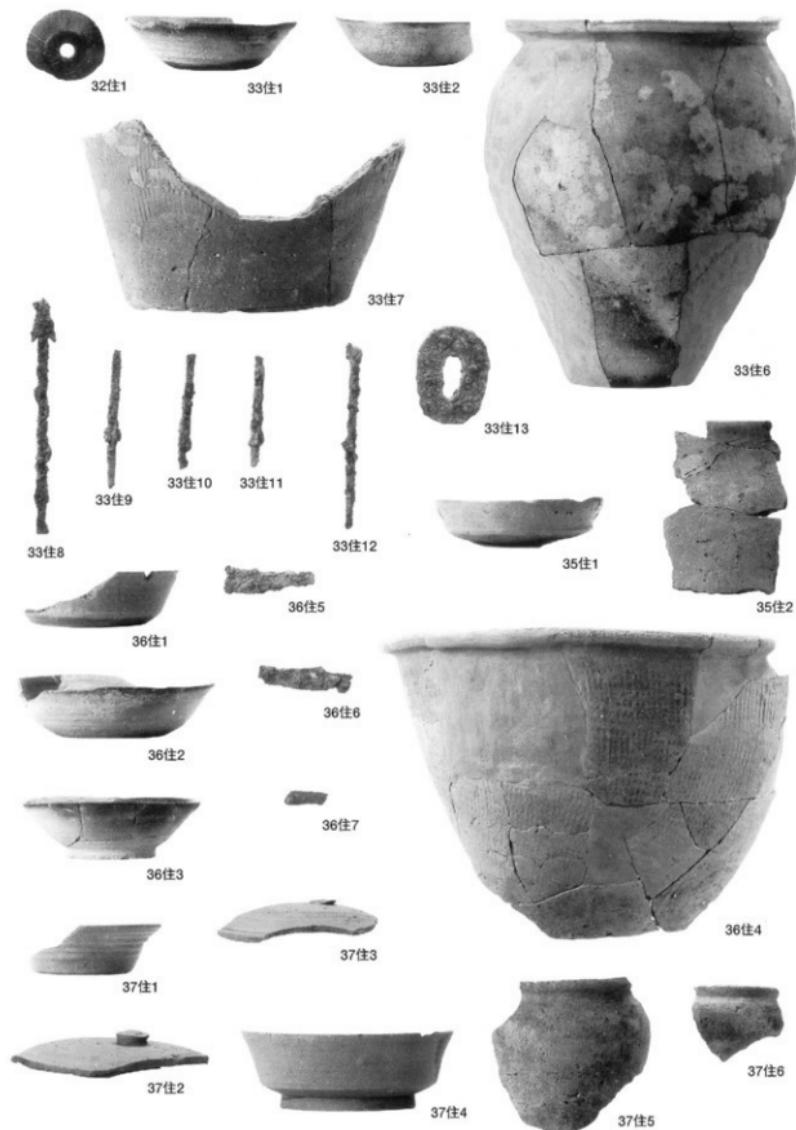
13・14・16・17・19・20・21・22・23号居跡出土遺物



24・25・27・28・29号住居跡出土遺物

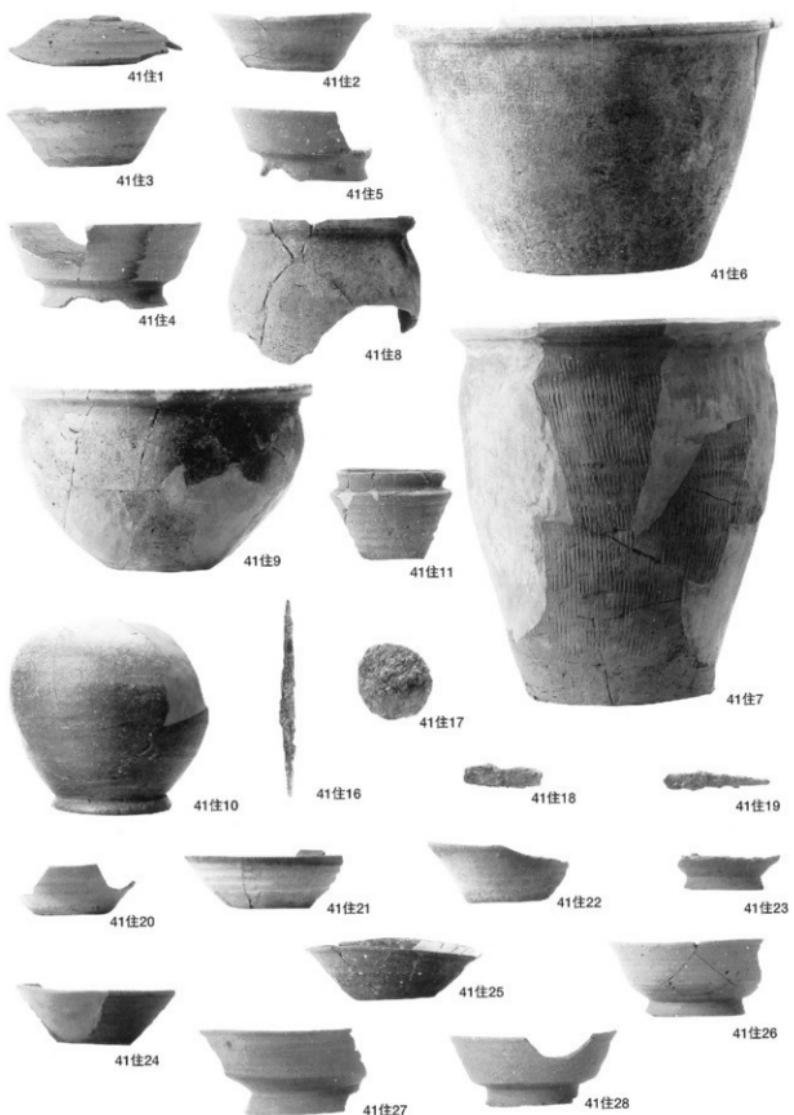


30・31号住居跡出土遺物

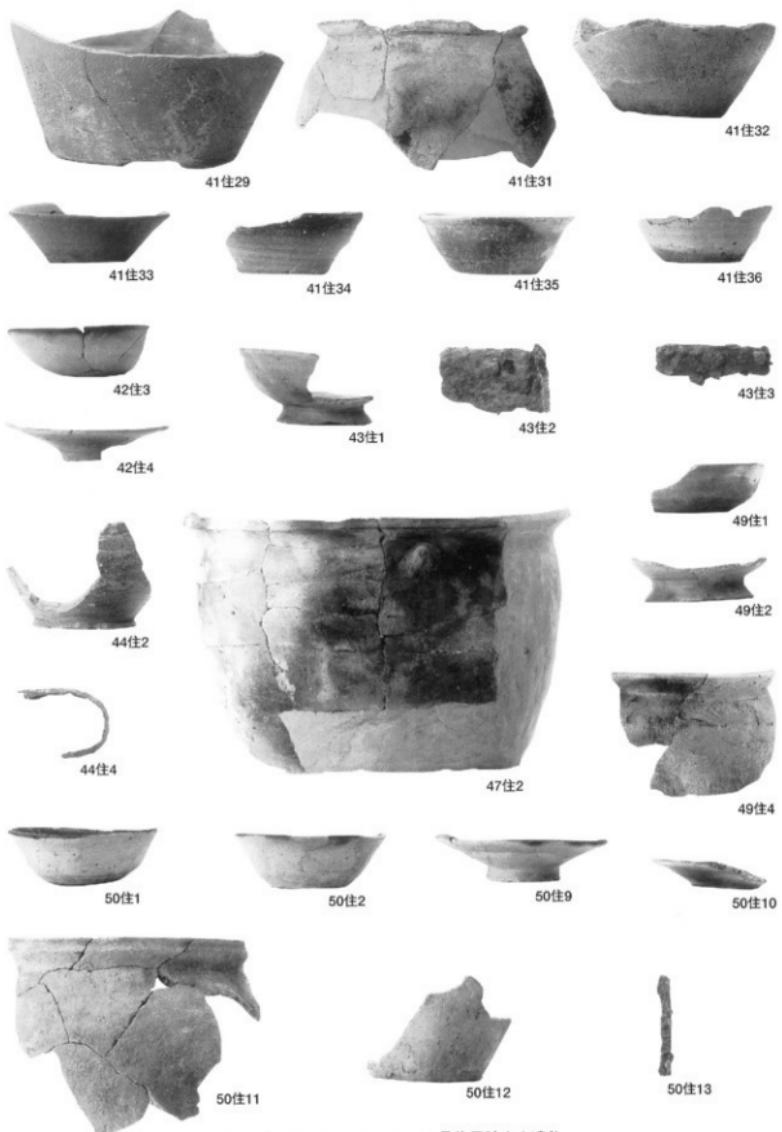


32・33・35・36・37号住居跡出土遺物

圖版 24
遺物（土器・鐵製品）

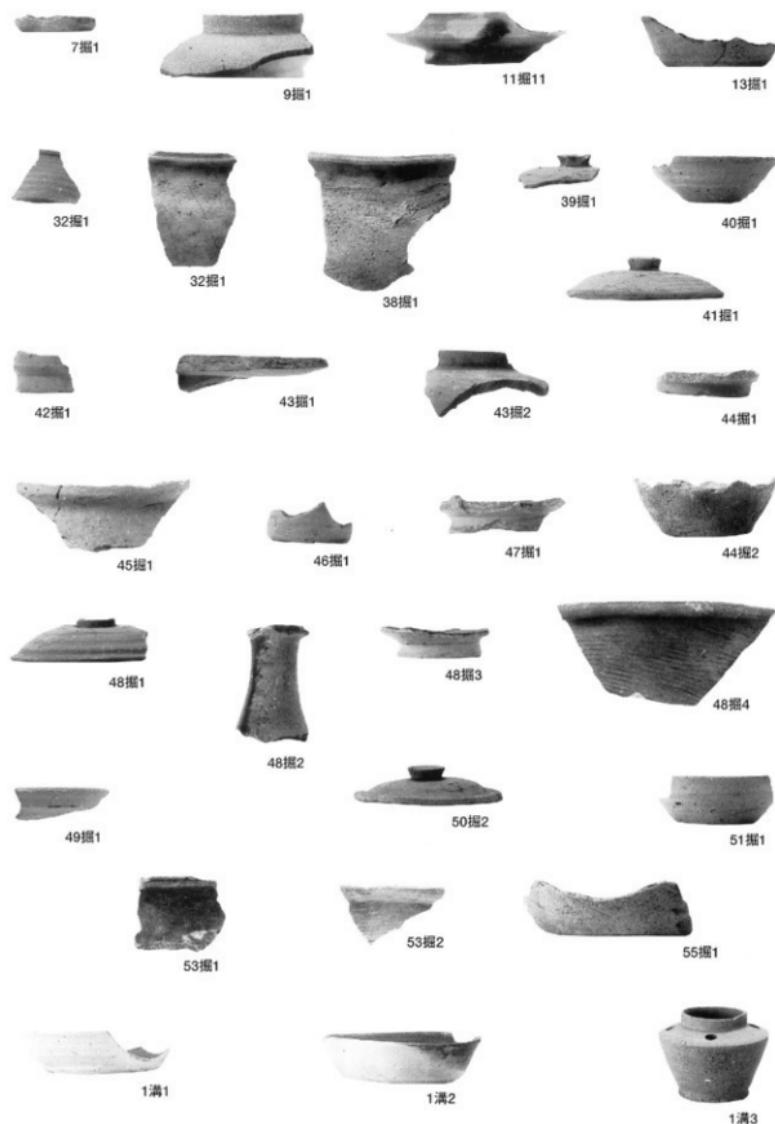


41号住居跡出土遺物



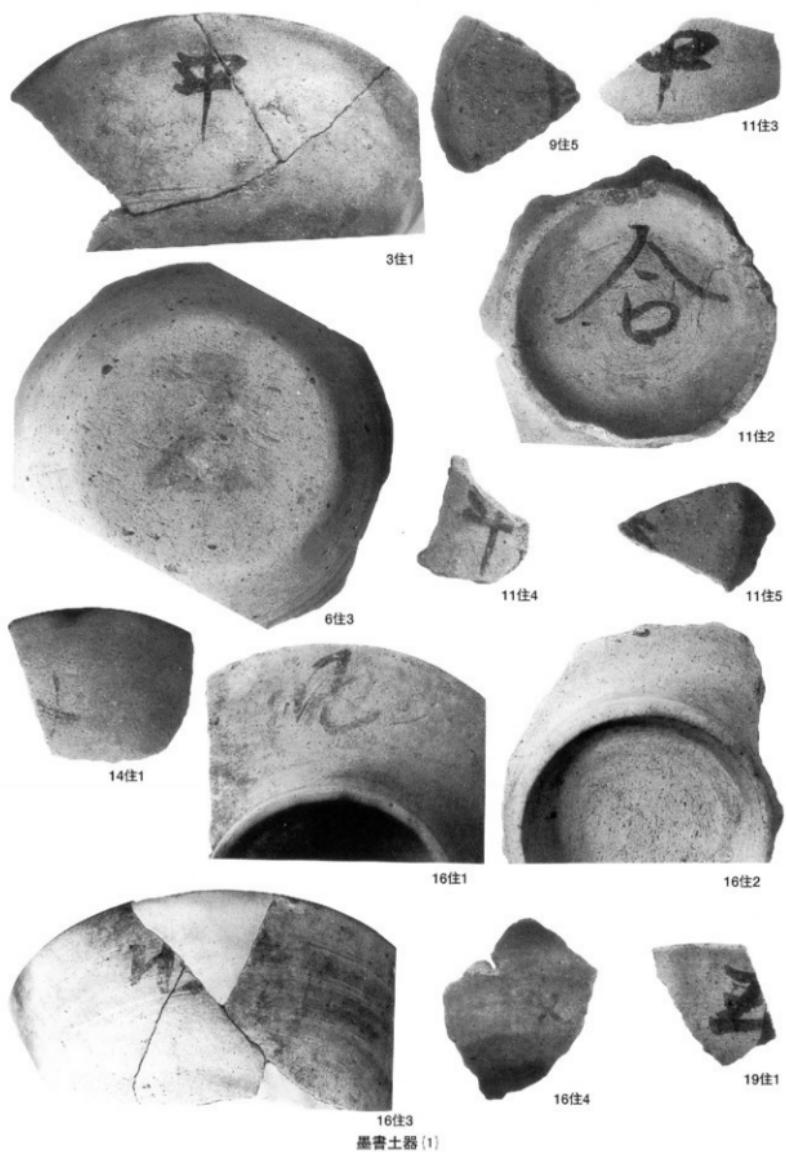
41・42・43・44・47・49・50号住居跡出土遺物

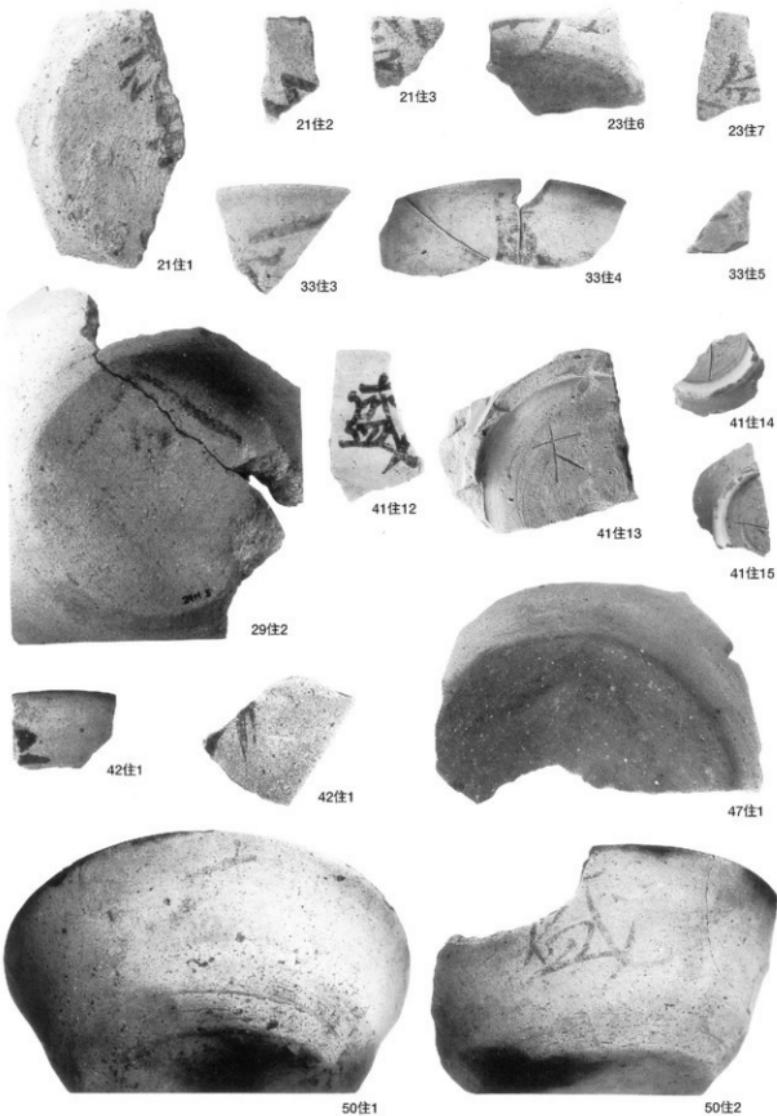
圖版
26
遺物
(土器)



7·9·11·13·32·38·39·40~51·53·55号掘立柱建物跡、1号溝出土遺物

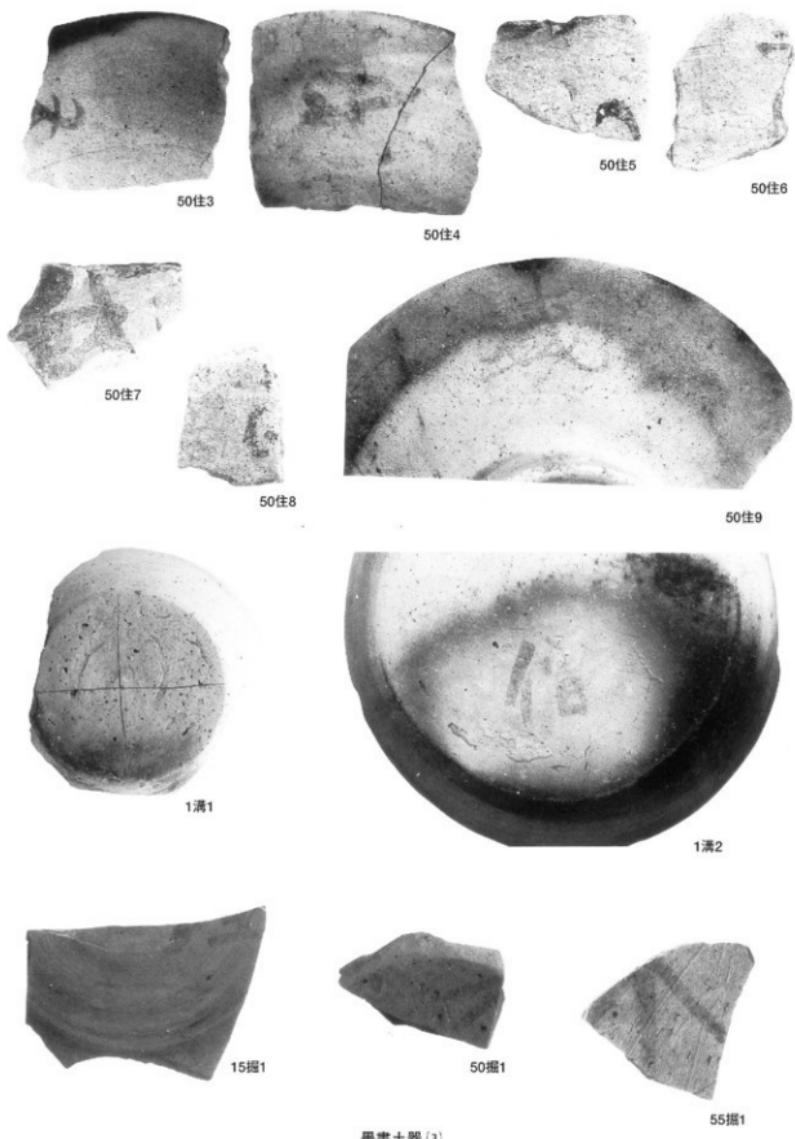
図版 27 遺物（墨書き土器）





墨書土器 (2)

図版 29
遺物（墨書き土器）



抄
録

フリガナ	オオギノダイイセキ					
書名	扇ノ台遺跡					
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
編著者名	平岡和夫 桐谷優					
編集機関	山武考古学研究所／〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地 TEL 0476-24-0536					
発行機関	土浦市遺跡調査会 土浦市教育委員会／〒300-0812 土浦市下高津2-7-36 TEL0298-26-3484					
発行年月日	西暦1999年11月30日					
フリガナ	フリガナ	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			調査原因
扇ノ台遺跡	茨城県土浦市	08203	土浦市	36°	140°	1996.11.15
	大字中		A-69	02'	10'	~
		1141-1番地外		37°	30"	1997.03.25
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
扇ノ台遺跡	集落跡	绳文時代 (中期前半から後期初頭)	住居跡	23軒	土器(阿永台 中峰 加曾利E I・II・称名守 扇ノ内)	馬蹄形集落跡
			炉跡	16基	土製品(土鉢)	
			土坑	398基	石器(打製石斧 磨製石斧 石鏃 石皿)	
		奈良・平安時代	掘立柱建物跡57棟 柵列 1条 竪穴住居跡 51軒 井戸 3基 溝 2条	土師器(坏皿 壺) 須恵器(坏 壱 梶 高坏 短頸壺 香炉) 鉄製品(刀子 鉄鎌 錪 紡錘車) 古錢(神功開寶)	企画的な遺構配置 を示す集落跡	

CONTENTS

Preface	
Introductory Notes	
Explanatory Notes	
Chapter I Background of the Research and the Research Organization	1
§ 1 Background of the Research.....	1
§ 2 The Research Organization.....	2
Chapter II Location of the Site and its Surroundings	3
Chapter III Outline of the Trial Excavation.....	9
Chapter IV Method and Progress of the Research.....	11
§ 1 Method of the Research.....	11
§ 2 Progress of the Research.....	11
§ 3 Basic Strata	13
Chapter V Excavated Structural Remains and Artifacts.....	17
§ 1 Outline of the Structural Remains and Artifacts of the Jomon Period.....	17
§ 2 Nara and Heian Periods	37
Chapter VI Conclusion	111

SUMMARIES

1. This book is an excavation research report of Oginodai site which is located at 1141-1 and some other nos., Oaza-Naka, Tsuchiura City, Ibaraki Prefecture.
2. As the previous research accompanying preparation works of a company house of Daimatsu Planning & Management, Inc., this research was conducted by the Archaeological Sites Research Association of Tsuchiura City, which was organized in the Board of Education, in cooperation with Sambu Archaeological Research Institute.
3. The research was conducted from November 15, 1996 through March 25, 1997.
4. This site is of the following ingredients, that of a settlement of the former half of the middle to the beginning of the late Jomon period and that of a settlement showing an aspect of government offices of the Nara and Heian periods.
5. Excavated structural remains belonging to the Jomon period are: 23 pit dwelling sites, 398 earthen pits and 16 fireplaces in dwelling pits. Besides, found in the structural remains were pottery, clay objects and stone-made objects. As a result of examinations, the following was cleared up: The settlement was operated from the Atamadai phase (III and IV stages), prospered rapidly in the Kasori-E I and II stages, and fell off swiftly in the Shomyoji phase. Moreover, now that a great number of the structural remains are had by storage pits, it is supposed that these structural remains were a settlement to store.
6. Excavated structural remains belonging to the Nara and Heian periods are: 50 pit dwelling sites, 57 sites of buildings with pillars embedded directly in the ground, 2 remains of palisade lines, 2 ditches and 3 well remains. Found in the structural remains were Iizui ware, Sue ware, ash glazed ware, iron objects and copper coins. As a result of examinations, the following was cleared up: in the former half of the 8th century, a settlement was built on purpose to play an official part, subsequently, it changed into an ordinary one. Finally, it came to an end in the former half of the 10th century.
7. Discovered in the sites of buildings with pillars were a few peculiar buildings showing a form of the main building of a shrine.
8. The artifacts, plans and photographs, etc. relating to this report are together in the custody of Kamitakatsu Kaizuka Furusato Rekishi no Hiroba.

茨城県土浦市
扇ノ台遺跡
古代編

----宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書----

印 刷 1999年11月1日

發 行 1999年11月30日

編 集 山武考古学研究所

發 行 土浦市遺跡調査会
土浦市教育委員会

印 刷 (株)文化総合企画
TEL 0476(93)0593

